しこにもまたわが思ひはかゝれるよ。われ大學に入りし歳の春なりき、友と共に、東、總房の海涯に沿うて九十九里の長灣より、小湊、勝浦、天津の浦々をたどりて白濱、根本の岬をめぐりしは、世にも樂しき旅なりき。爾來春秋いくたびか去來して、われまたいくたびか北條館山のほとりにさすらひき。あるは、那古灣頭の夕照にあびて、友と自然の色彩を論ひ、あるは根本の海樓に倚りてローレライを歌ひしは、光景宛として尚ほ眼にあれども、早く既に八歳の昔とはなりけるよ。時は遊水の如くまばらくも停まらず、人は春ごとに老いて青春はやく暮れなむとす。心を傷ましむるかな。

あゝ湘南の風光うるはしからざるに非ず、たゞ懐往の情日に切なるを如何にすべき。世にも人にも離れたる身にしあれば、賴もしからぬ行末かけて、われはた何の望むところぞ。ただ言ふまじく憶ふまじき過去の今なほ夢に入るこそうれしけれ。

（明治三十四年五月十日。湘南の寓居に於て）

乙羽兄を憶ふ

嗚呼乙羽兄、君はもはや此の世の人にはあらざる乎。十歳が間、吾れ君の生けるを知りき、今に及びていかでか君の死せるを想ひ得む。夢か、現か、あゝ吾れ復た君を見る能はざる乎。

君と吾れと、憶へばはかなき契りなりけるよ。君逝けりと聞きてより、吾れは君が事をのみおもひ暮らしゝが、悲しいかな吾が心亂れて夢をだに結び難し。あゝ吾れ長へにまた君を見る能はざるべき乎。

去年の夏、君歐米の遊を畢へて歸り來ませし時、吾れ病みて駿河臺の病舍にありき。旅裝のまゝにして君は吾が病を見舞はれしが、吾れは君の手を取りてその恙なきを祝ひたりき。秋の初めより、吾れ薄見潟のほとりにさすらひの身となりし時、君は三亭の道を遠しとせずして吾が幽棲をおとづれ給ひき。其の夕べ月明に乘じ、三保の入江に棹(さを)して秋夜の興會を擅にせしは、おもへば再びし難き遭逢なりしなり。歳の暮、吾れ湘南に移り、事ありて都に上

る毎に君を見ざることなかりき。冬漸く寒うして吾れ京に入らざること數旬、二月なかばのころ、圖らずも君熱ある病にかゝりて大學の醫院に入れりとの報知に接しぬ。日頃より人にすぐれて健やかなる君なれば、かりそめの惱みとのみ吾れも人も、恐らくは君自らも思ひしならむを、その時この醫院に君が命終の床横はれりとは神ならぬ身の誰か知るべき。

君病みてより、月を經て吾れ京に入りぬ。君は尙ほ癒えやらで病舍の中に臥しましき。よもやかうまではと思ひし君の、一月あまりの惱みにいたく痩せ衰へて、ありし面影の夫れとしも見わかぬに、吾れは胸塞がり、心消えていふべき言葉も得言はざりし。君は吾れを見て、却て吾が病いかにとのみ氣遣ひ給ひ、やがて褥を離れなば御身と共に沼津、興津のほとりになど語り給ひき。かくて君の病はよしともつかず、あしゝともつかず、熱の惱みの想ひの外に長びけるに、醫師の長さへ思ひ惑へるよし傳へ聞きて、吾れ人ともに心いと安からざりき。その後都に上る毎に幾度も君を見舞ひしが、その度毎に君のやつれまさり給へるを見し時の吾が悲しさを、何にか喩へむ、誰にか語らむ。

去月十五日、吾れ事ありて京に入りしかば、直ちに君をおとづれき。あゝ今にして思へばこ

れ君と吾れとの永き訣別にてありしなり。君の熱は少しく和らぎしよしなれど、その顏ばせはうつし世の人としも思はれざりき。君は嬉しげに吾れを見給ひて、御身に遇ふてゑみ〳〵と語らまほしきことの澤なれど、是非もなき今の身なればとて、はら〳〵と涙を流し給ひき。吾れはたゞ君が手を握りてうなづきぬ、絲の如く痩せ細りたる君が手は吾れのよりも熱かりき。かくて吾れは後日を期して悄然として退り出ぬ。あゝ期したる後日は長へに來らざるなり。今にしておもへば、言ふべきこともえ言はず、聞くべきこともえ聞かず、徒らに悲嘆の間に別れしことの口惜しさよ。

かくて君と吾と長へに相別れぬ、けにはかなき別れにはありけるよ。此月のはじめ君逝げりと聞きし時、吾れ病で褥にありき。三日には君が弔葬の式ありと聞きつれど、病める身の心に任せず。此日雨降りまきりて風さへいと強く、松韻濤聲また懺悔のひゞきを作し來る。心ばかりの手向に一炷の香、一枝の華を具へて遙に君を弔へば、返らぬ事の限りもなう想ひ起されて、この恨み絕ゆべき時のありとしも想はれず。あゝ乙羽兄、十歲の契り夢の如くにして、君獨り醒めたる乎。憶へば君と吾れと知ることの何ぞ遲くして、別るゝことの何ぞ速や

き。そも〳〵かげろふのあるかひもなき現し世に、など人の情のかくはあつかりける。あゝ吾れ長へに君を見る能はざる乎。

（明治三十四年六月）

無題集

○

吾がこゝろ、
波にも似て碎けたるか、
など圓かなる儘に寫さざる、
大空高く澄みわたる月。

○

かつてこの世、
かく迄は狹からざりしを
今のわが身の
老いぬるぞ口惜しき。

○

はかなくも立つ烟かな
行方も知らず立迷へるさまの
わが心にも似たりけるよ。

○

君よ、わが名を問ふ勿れ、
別れてはまた逢はるべき吾ならず、
見ずや、空ゆく雲の右と左を。

○

さら〳〵と
悲しくも響くか、蟬の小川よ、
やがては大海の中に沒すべきなれど。

○

昨夕、吾うるはしきものを見き。
露重げなる白百合の花に
光やさしく照りそへる月。

（明治三十四年八月）

況後錄

而此經者　如來現在
猶多怨嫉　況滅度後

（法華經法師品）

一

伊東に死なず、龍の口に斬られず、不思議に存へし命も、此處佐渡が島を今は最後の地と覺ゆるぞ。あら嬉しや、人々、此程の喜びをば笑へよかし、日蓮程の果報の者また世にあるべしや。古より君の爲めに死せしもの、親の爲めに死せしもの、妻子財寶の爲めに死せしものはあれども、法華經の爲めに命を捨てしものありや。是の敎の爲めに臭き頭を刎ねられむは、砂に黃金を代へ、糞に米を替ゆるに同じ。今こそは霜露の日影を待つばかりの命ながら、化城の迷ひ遙に去りて、靈山の開顯眼前にあり。頸は鋸にて引きも切られよ、胴は稜鋒もて貫かれもせよ、足には絆しを打ちて錐揑みにもせよ。この息の根の通はむ程は、南無妙法

蓮華經の聲をばよも絶たじ。

吾れは是ノ粟散の邊土、安房東條の旃陀羅が子、身賤しくして性劣れり。智解に於ては天台、傳教が千分の一にだも及ばじ。されど法華經の行者なるが故に卽ち是れ一天の眼目、四海の柱石たり。六難九易の敎、三障四魔の說は素より熟く知れり。唯唯末法不祥の世に生れたる身の、法王の宣旨默し難く、身命を抛つて救世の大願に志し、こゝに權實二敎の軍を起し、忍辱の鎧を着、妙敎の劍を提げ、一部八卷の肝心妙法五字の旗を指し上げ、一代の風雪を捲き起して折伏の戰に從ふこと、こゝ二十餘年。あはれ、法華經の行者が爲すべき程の軍は、日蓮ほゞ仕遂けたりと覺ゆるぞ。是の經の爲めには大覺世尊だに九橫の大難に値ひたまひき。不輕菩薩は杖木瓦石を被りき。竺の道生は蘇山に流され、法道三藏は面に火印をあてられ、天台大師は南三北七の仇となり、傳敎大師は六宗に憎まれ給ひき。日蓮こそは居所を逐はること二十餘度、敵人の戕害に臨みしこと三たび、一度は頸の座に据ゑられ、二度は遠流の罪に行はれて、今やこの北海の孤島に明日をも知らぬ命とはなりたるぞ。あら嬉しや、喜ばしや、古賢先聖だに讀み給はざりし妙法の極意をば、今ぞ日蓮こそは讀みたむなれ。勸持品二

十行の偈は、日蓮だに此の國、此の世に生れ、別して此の島に流されずば、世尊一代の大妄語となり果てなむず。如何に人々、一代聖經の付屬はまさしく日蓮が頭に懸かれりと覺えたり。是れ程の譽れをば祝へよかし。是れ程の慶びをば笑へよかし。日蓮最早やこの世に望む所無し。

されど、顧みれば心地好きわが越方かな。三類の强敵は吾が爲めの善知識ならずや。北條氏無くば法華折伏の本意を如何にすべき。末法付屬の未來記は、まさしく日蓮が生涯に記されたり。刀杖瓦石もて身に流されたる日蓮が血潮は、やがて妙法勝利の願文に染められたり。昔者半偈の爲めに身を投げ、肱を折きしものだにありしを、日蓮が身の幸ひを如何にとか見む。中にも龍の口の頸の座こそ面白かりけれ。いで〳〵一期の思ひ出に、日蓮が今生の不思議を書き遺さむず。

二

去ぬる文永五年の正月、西戎蒙古國より我國へ牒狀あり。文辭暴慢にして、まさしく侵逼の

禍心を露はせり。鎌倉殿を初めとして國の上下齊しく罵り騒ぐのみにて、民に安き心も無し。愚なる人々かな、斯程の事は日蓮既に文應の昔に勘へ置きたりしものを。國に賢人なんどもあるならば、夙に用ひて禍を未然に防ぎたりしならむに、今に及びて眉に火の附きたらむ樣に狽て騒ぐ態の可笑しさよ。愚昧無道の鎌倉殿も流石に今は目覺めたるらし。いで〳〵再び安國論の正義を示して一世の迷夢を驚かすべし。是れ、身の爲めに申すに非ず、神の爲め、君の爲め、國の爲め、一切衆生の爲めに申すにこそ。

そも〳〵安國論は日蓮一期の遺鑑、本化妙宗創業の大本なるを以て、事煩はしけれども重ねて是れを申さむか。要は金光明經、大集經、藥師經の三災七難の佛讖に本づき、謗法の罪を改めて正敎の擁護に歸らしむるにあり。數十年このかた、天變地夭踵を接して起り、飢饉疫癘天下に遍ねきは、偏へに是れ謗法の罪に座す。そは正法退き滅ぶれば、諸天善神共に此の國を去りて、邦土忽ち魔界となればなり。當今、佛閣甍を連ね、經藏軒を並べ、僧は竹葦の如く、尼は稻麻の如しと雖も、皆是れ天魔破旬の徒の、解脫同相の衣を纏へるもの、諂曲にして人倫を欺誑し、邪惡にして魔界の眷屬たり。就中、近代の法然、捨閉閣抛の四字を揭げ

て一向專修の念佛を唱へ、一代五時の肝心たる法華經を無用のものと誹謗し、其の敎天下に蔓りて人皆是れを信ず。善神こゝに退き、惡鬼こゝに代はる、天下の災難洶に以あるなり。今や聖經示す所の七難三災、唯、其の二つを餘すのみ。人は既に疫に苦しみ、日月既に蝕し、星宿既に列を失ひ、風雨既に時に非ず。今より來らむものは夫れ自界叛逆難と他國侵逼難とならむか。前證既に爭ふべからず、何ぞ後驗の違はざるを疑はむ。あはれ、是の國久しからずして內亂あらむ、又久しからずして外寇あらむ。今に於て計を運らさずむば、夫れ岌々乎として危い哉。施すべき道は唯一つあるのみ。畢竟念佛は墮獄の敎、禪は天魔の業、眞言は亡國の宗旨、律は國賊の事。是等一切の邪宗を斷滅して、無二無三、唯一乘の法華に歸依し給はば災難消除、國土安全なるべき也。

あはれ人々、日蓮が此の安國論を勘へて北條殿に奉りしは、蒙古の使の來れる今年文永五年を去る十年の往時にてありしぞかし。今はた其の言に露違はず、殘るところの他國侵逼難をば如何とか見る。佛の未來記にも劣らず、末代の不思議、何物か是れに過ぎむや。今に及びて尙ほ日蓮が言葉を用ひずば、國はやがて西戎の俗となり、人はやがて蒙古の民とならむ。

一世の愚昧なる、知らずして亡落の淵に近づけり、法華經の行者たらむもの、いかでか是れを看過ごし得べき。日蓮玆に身命を抛つて再び安國論の先識をかざし、十一通の書狀を認め、鎌倉殿を初めとして、平左衛門尉、北條彌源太、建長寺、壽福寺、極樂寺、以下の權家大寺に送りて當來眼前の覺悟を促しぬ。

三

素より身命を抛ちての業なれば、言ふべき程の事は押し切つて言ひぬ。あはれ日蓮程の者の言葉に何の憚る所やあらむ。其の旨に謂へらく、蒙古の來襲は久しからずと覺えたり。早く建長寺、極樂寺等の邪宗門を閉鎖して、一佛乘の法華に歸依し給ふべし。建長寺の道隆は人崇めて佛陀の如く、極樂寺の良觀は世仰いで羅漢の如し、されど是等は野狐の袈裟着けたるが如く、其の蒙昧佞惡なること禽獸にも劣れり、須らく誅戮の沙汰を急がるべし。日蓮は是れ日本第一の法華經の行者にして、兼知未萌の預言者なり。這回蒙古退治調伏の任に當らむもの、日蓮を舍いて誰ぞや。と、斯樣に言ひ張りしことなれば、一身の危殆は言ふも更な

り、日蓮が弟子檀那等が上にも必ず禍あるべしと想ひければ、乃ち書を彼等に與へ、大蒙古國の牒狀到來に就き、十一通の書狀を以て鎌倉殿を初め、方々を驚かし奉りぬ。日蓮は申すに及ばず、弟子檀那等が流罪死罪は一定免れ難からむか。必ず妻子眷族を思ふ勿れ、權威刀杖に怯るゝ勿れ。法華經の爲めに生死の縛を切つて佛果を遂げ給ふは喜ばしからずや。と申し遣はしぬ。

是等十一通の書狀は果して上下の怨みを深うせしとぞ覺えし。或は使を罵り、或は受領に及ばず、或は受領すれども上へも申さず。所詮は諸宗緇素の怒りを加へ、柳營内外の憤りを重ねたるらし。是れ素より日蓮が當初存知の旨なれば、驚きもせず、怖れもせず、靜に處刑の日を待ちたりしに、怪しい哉、何事もなく打ち過ぎて、文永もはや八年の半ばを越えぬ。

扨ては一時の苟安に狎れて他界侵逼の大難をも打ち忘れ、法華經の行者が未萌の佛讖を一妄語とは思ひけるよ。良し其の儀ならば日蓮思ふ仔細ありとてます〳〵不退轉の勇猛心を奮ひ起し、名をも惜しまず、命をも捨て、念佛無閒、禪天魔、眞言亡國、律國賊と聲を限りに呼ばはり、一乘の致相を啓いては權宗の邪道を打ち懲らし、三敵の誹謗に接しては六難の戒

を事ともせず。風強ければ浪荒く、龍大なれば雨猛き樣に法華折伏の鬨の聲、天地に震ふばかりに言ひ張りしかば、迷ひ狂へるものの憐れさよ、己が無明の夢よりは醒めむともせで、偏へに日蓮が正法の敎を怨み、故最明寺殿の尼御前などに取付き、鎌倉殿、平左衞門尉等が怒を煽り立て、日蓮こそは故入道殿を無間地獄に墮ちたりと申し囃やせる無類の惡僧ぞと呼ばはりぬ。かくて柳營にて僉議あり、日蓮の罪科所詮遁れがたし、頭を刎ぬべきか、鎌倉を追ふべきか、弟子檀那等の所領あるものは所領を沒し、或は頭を切り、或は籠に入れ、或は遠流に處せらるべしと取沙汰す。捕卒の出向、今は日もあらじと傳へられぬ。

四

日蓮悅んで曰く、斯かるべしとは素より存知の旨也。昔者樂法梵志は屋か半偈の悟りを得むが爲めに、其の皮を剝いで紙となし、其の骨を削りて筆となし、其の肉と血を絞りて墨水となしき。雪山童子は身を魔王の口に投げて悔ひざりき。法華經の御爲めに捨つる身の幸ひこそ嬉しけれ。

如何に人々、勸持品二十行の偈をば、吾等常にいかに讀み奉りたる。三類の强敵は言ふに及ばず、もろ〳〵の比丘等の利養を貪り、名聞を求むる徒、國王大臣に向つて法華經の行者を誹謗し毀傷すべしとは卽ち今の吾等の身の上ならずや。數々見擯出の五字は日蓮が徒これを讀まずむば、何人か是れを讀むべき。身は佛讖を現じてこの惡世に導師となりぬ。喜ばしや。

されば苟にも日蓮が弟子と名告らむ人々は一人も臆すべからず。鎌倉殿の弓矢の爲めに毀らるべき我等が忍辱の鎧かは。逃げもせざれ、匿れもせざれ。所領ある者は所領を與へよ、親あるものは親を棄てよ、妻子あるものは妻子を思ふなかれ。首も刎ねられなむ、手足も切られなむ、是の臭き軀を離れて寂光の樂土に向はむ時、妙法五字の旗高く指し上げて、吾れこそは日本第一の法華經の行者よと聲高々と名告らむは如何に。

所詮はお〳〵思ひ切り給へ。此の身を法華經に替ゆるは、石に珠を替へ、砂に黃金を替ゆる也。『佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、南岳、天台、妙樂、傳敎等だにも未だ弘め給はざりし法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先駈したり。若黨共二陣三陣つゞいて、迦葉、阿

難にも勝れ、天台、傳教にも越えよかし。僅かの小島の主等が威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき。佛の御使と名告りながら、臆せむことは無下の人々也』

吾れは斯く吾が弟子檀那等に說き示して、今にも鎌倉殿の御使あらむ時、見苦しき振舞あるまじき由をくれ〴〵も申し含めぬ。

五

斯くて文永八年八月の初めに及び、廳所より召し出されぬ。日蓮を中にして鎌倉殿を初め平左衞門尉以下列坐の態、たゞならず見えし。日蓮一々究問に答へて曰く、建長寺、壽福寺、極樂寺等を燒き拂ひ、道隆上人 良觀上人等の頸を刎ねよと申せしこと、一言も相違無し。是等は正法の怨敵、國家の大賊なれば、磔、八裂にも行はるべき族也。首を刎ねよと申すに何の不思議かあらむ。但し最明寺入道殿を無間地獄に墮ちたりと、御他界の後にて申せしとは虛事也。念佛無間、禪天魔とは入道殿存生の時より申せし事ならずや。是れ程の大事の法門をば、御存生の時勸め參らさざりしことやある。畢竟右の事、國を思ひ民を思ふ日蓮が孤忠

に出づ。誠に百世の平穩を祈られなば、速かに改悔の實を擧げらるべし。日蓮は一貧道ながら、法華經の行者なれば、卽ち是れ釋尊の御使、日本國の眼目にて候ぞかし。其の言葉を御用ひ無くば、やがては梵天、帝釋、日月、四天の御咎めありて、爾時後悔あるべきを慮り給ふべき也。と、何憚らず申し陳ぜしに、鎌倉殿を初め、平左衞門尉等、聖者の言を聞くべき耳なくして、偏へに太政入道の狂へる如くに罵り騷げるこそ笑止の極みなりしか。

越えて九月十二日、平左衞門尉賴綱を大將として數百人の兵共、日蓮が松葉が谷の庵に押し寄せぬ。扉か一人の痩法師を召捕らむとて、斯ばかりの意を用ひしこそ氣の毒なれ。朝尙ほ早くして人馬の響き遠くより近づきぬ。あはれ事あるかな、日蓮が日頃月頃待ち設けし願は遂に達きぬるよと思ひながら、徐ろに南の戶を開き、眞先なる賴綱に向ひて、咨爾の來ること何ぞ遲き、と申しければ、兵共眼を瞋らし、聲をあらゝけ、刀杖瓦石を以て散々に狼藉す。中にも平左衞門尉が一の郎從、少輔房と云ふもの、走り寄りて日蓮が懷にせる法華經の第五の卷を取り出だし、吾が面を思ふがまゝに打ちこらす。吾れ微笑して、第五の卷は卽ち勸持品ならずや、爾等そが識文もて吾れを撲つこと奇なるかな、奇なる哉。と申しけるを、悔

られたりとや思ひけん、大將を初め、兵者等ますゝ怒をなし、經典佛具を或は踏み、或は毀り、凡そ家の二三間が間は、金口の文字土芥に塗れて足を容るべき所もなし。日蓮大音聲を放つて、あら面白や平左衛門尉が物に狂ふを見よや人々、日本國の柱唯今倒れぬるぞ、と呼ばはりぬ。聞くもの顔見合はせて安からぬ色あり。日蓮こそは御勘氣を蒙れる身なれば、臆してこそは見ゆべきに、さは無くして勝ち誇れる者の如くなるは如何に。扨ては是の事、僻事にてやあるらむとこそ思ひしならめ。

六

其の日も暮れぬ。吾れは拘禁の身となりて武藏守殿にあづけられ、やがて夜半に及びて龍の口にて刑に行はれむとす。かくて馬に騎せられ、兵共に擁せられ、若宮の小路に打ち出でて赤橋の前にさしかゝりぬ。爾時人々の驚き騒ぐを鎭めつゝ、八幡大菩薩に最後に申すべき事ありとて馬より下り、北の方を屹と睨まへ、大音聲に申す樣。いかに八幡大菩薩は眞の神か。昔者和氣の清麿が頭を刎ねられむとせし時は、長一丈の月と顯はれさせ給ひ、傳教大師が法

華經を講ぜし時は、紫の法衣を御布施に捧げさせ給ひき。日蓮は日本第一の法華經の行者也。日本國の一切衆生が謗法の罪によりて無間地獄に墮つべきを助けむが爲めに、是の邦に生れたる釋尊付屬の御使ぞや。身に一分の過なくして刑に引かれむとするをば、神には如何に見そなはするぞ。其の昔、多寶塔中に釋尊法華經を講じ給ひし時には、三世十方の分身、無量諸天の諸佛、中には天照大神、八幡大菩薩も其の座に連りて法華經の行者に疎略なるまじきの誓狀參らせしをば如何が忘れさせ給ひしぞや。されば日蓮が申す迄も無く、いそぎ〳〵是處に出合はせ給ひて、塔中付屬の宿願を果させ給ふべき也。若しさも無くんば、日蓮今夜頸切られて寂光寶土に參らむ時、日本の天照大神、正八幡こそは起請を用ひぬ妄語の神なれと、さしきつて教主釋尊に言ひつけ參らせ候はんず。若しそを痛たしと思召さば、いそぎ〳〵御計らひあるべき也と。群集の人々は、日蓮がかく申すを聞きて、あはれ鎌倉殿の氏神に法外の惡口を憚らざる日蓮こそは、惡鬼羅刹の分身ならめ、なんど罵り合へりしか。

七

日蓮を載せたる馬は、警護の武士に擁せられ、御靈の社より極樂寺の坂を通りて、七里が濱に打出でぬ。[三] 五更の月は早や雲に入りて、劍戟の光獨り松火の炎にきらめきぬ。四條金吾兄弟四人は途より馳せ參じて馬の口に取り付き、あはれ御樣よと泣き悲しむこと限りなし。やがて龍の口に着きて濱邊の圓座に下ろされぬれば、執行の奉行平左衞門尉が下知と覺しく、太刀取既に吾が背後に立てり。四陣の篝は星の如く連りて、萬目悉く吾が身の上に注がれたり。金吾は、今ぞ御最後よと身を投げ伏して泣き轉ぶ。日蓮申す樣、あはれ不覺の殿原かな、是れ程の悅びをば笑ひもせで、何に平生の約束を違へらるゝことよ、と。やがて合掌瞑目して今ぞ最後と覺しき時、江の島の方より月の如くなる光物の鞠の如くなるが飛び來り、辰巳の方より戌亥の方へ光り渡る。頃しも十二日の夜の昧爽に、物の形も定かならざりしが、物の光り月の如くにて、人の面も皆鮮やかに見ゆ。太刀取眼くらみて倒れ伏し、兵共も怯ぢ怖れて一町計り走り退き、或は馬より下りて畏まり、或は馬の上に蹲まるもあり。日蓮、大音聲を揚げて、如何に殿原、かゝる國家の大罪人を獨り差し措きて何處にか退き給ふぞ。夜も明けなば見苦しかりなむ、急ぎ寄りて頸切るべくば疾く切れよかし。如何に〳〵と呼ばはれ

ども、兎角の應へする者無く、又打ち寄る人も無し。やゝ久しうして、兵共來りて、兎も角も相摸の依智へ入らせ給へと申すにぞ、依智とは何處ぞ、國家の囚人を獨り歩ませる法やある、案内せよや、と申し付くれども、唯〻茫然として答ふる者無し。其の狼狽へ騷げる狀、笑止の限りに見えたり。

* * * * * *

斯くて、吾れ龍の口の頸の座を助かりて依智に入り、翌十月十日、依智よりこの佐渡が島に移り越しぬ。其の間の仔細は煩はしければ書かず。

八

昔者、釋尊、多寶塔中に坐して妙法を說き給ひし時、五十小劫、佛の神力の故に半日の如く謂はれき。今の二十年、歲月短きに非ざれども、法華經を身讀せる日蓮が身にとりて片時の如く思はるゝぞかし。末法弘通は塔中付屬の大願、法華折伏は聖經自爾の本義、日蓮身に上行の使命を受けて、法華經の行者が爲すべき程の事、ほゞ爲し遂げきと覺ゆるぞ嬉しき。あは

れ鎌倉殿吾れに於て何かあらむ、六宗の緇素もとより墮獄の徒たり。吾れ夫れ獨り誓つて日本の眼目となるべき也。北海波荒く、孤島雪深けれども、苟も化城の迷を離れて本土の開顯にだに與からば、吾等が居住して一佛乘を行ぜむ處、いづこか常寂光の都ならざるべき。靈山の道は一歩の外にあり、本有の淨土晝夜に往返すべし。何ぞ鎌倉と伊豆と龍の口と佐渡とを問はむや。於我滅度後、應受持斯經、乃至、速疾得、無上佛道と說かれたる聖經の文空しくば、諸佛の舌も切れなむ、多寶の塔も壞れなむ、寂光の土も地獄の巷と變じなむ。『詮ずる所は、天も捨て給へ、諸難にも遭へ。身命を期とせむ。善につけ惡につけ法華經を捨つるは地獄の業なるべし。大願を立てむ、日本國の位を讓らむ、法華經を棄てゝ觀經等に就いて後生を期せよ、父母の頸を刎ねむ、念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひじとなり。其の外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ、等と誓ひし願破るべからず』。

南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

（明治三十四年十二月）

此篇は種々御振舞御書、開目鈔、如說修行鈔、佐渡御書、觀心本尊鈔、量蓮房御返事等に據りて述べたるもの、私意を加へたる所少し。上人追懷の事は假構に出づと雖も、錄する所は事蹟の眞實を傳へて毫も疑を容れず。文中『……』を施せしは、上人御書の原文を其まゝ用ひたる處を示す。謹みて聖文を汚すの罪大なるを謝す。

（櫻牛生）

雜

漏

鳥海山紀行

庄内勝地多し、而して予は特に其二を推す。二とは何ぞや、鼠ヶ關、及び鳥海山之れなり。彼は明媚愛すべく、此は崇高懼るべし。予常に人に誇りて以て庄内の双絶となす。

一日筐底を探り、鳥海山紀行一篇を得たり、之を讀むに往日の遊、宛然として目にあり。

即ち記して貴社（山形日報）に呈し、未だ遊ばざるものに告ぐ。

辛卯八月二十五日、予、弟良太と共に鳥海山に向て啓行す。山は我郷庄内の乾隅にあり、鶴岡を去ること十數里。西は日本海に面し兩羽の境を壓し、山脚より海を抜くこと凡そ八千尺、天半又一段の隆起あり、嶄然空を摩すること更に三百丈、巍然として東北の鎮たり。鶴岡より之に登るに二路あり。一は蕨岡よりし、一は吹浦よりす。予、良太と謀り前者を取る。此日天善く晴れ、日未だ出でず、北、鳥嶺を望めば滿山淡靄に封ぜられ、半面暉光を受て黄紫を呈し、彩光將に流れんと欲す。零露珠の如く樹梢より落ち、珊々聲あり。路花村柳

情あり、共に野を清めて予を待つものの如し。午前九時頃酒田に到る。藻江の洋々たるに臨み、鳥嶺の崔嵬たるを仰ぎ、微吟一聲、滄浪の華句、江山共に峙つの慨あり。酒田は予が十一二歳の頃一年程住せし事あり。良太と共に其舊廬を訪へば、父老既に逝き、予と共に嬉遊せしもの、今や儼然たる一家の主となれり。予、悵然として去るに忍びず、轉た白樂天が商山路の憾に勝へず。止ること半晌計、千日堂前より蕨岡に向ふ。藤塚、今井の諸村を經、行くこと二里許、日光橋に沿て右折し、畦畑の間を逶行す。眸を轉ずれば鳥海山雄然として眉睫の間に迫る。腰間の望遠鏡を取りて之を望めば、略山上凹凸の狀を審にすべし。午後三時半、蕨岡に着す。

蕨岡は鳥海山の麓を去ること里許にある小丘の巓みなり。大物忌神社拜殿の在る所なり。村中別に旅店と名くるものなし。道者の此山に登る者の爲に五軒の道者宿を設け、社務所員之を周旋す、宿坊之れなり。予の鶴岡を出るや、我友藤湖子（姓名佐藤小吉 号藤湖子）予に與ふるに予等兄弟を社務所員鳥海朝光氏に紹介するの一書を以てす。至れば朝光氏予等を鳥海重任氏の家に導き、周旋至らざる所なし。予告ぐるに、予等は道者として登山する者に非ず、只、其景勝を探

らんが爲なるを以て、拜神に關する諸々の繁禮は一切之を除去せられんことを以てせり。氏笑て之を諾す。蓋し世人此山を以て神聖犯すべからざるものとなし、之に上るもの、必ず先づ少くとも三週間齋戒の勞を取らざるべからず。斯の如くにして登山するもの所謂道者之れ也。其之に上るや、至る所祈禱祈願等をなし、予等の如き者に於ては煩繁寧ろ厭ふべきものあり。予故に預め之を避けたるものなり。

予の室、山を負て西面し、庭前數武を出れば斷壁數十丈。碧梧翠竿、左右を翳ひ、數圃の松杉蓊蔚として檐に迫て立つ。石上の藤蘿、墻頭の蕣蕊、幽致甚だ閒適に堪たり。眸を放てば漠々たる河北の野、擧て脚底にあり。西海の烟波、依稀として雲水相連る。日向川銀蛇の如く遠青遙碧の間に逶迤し、暮靄淡々の間、微に酒田の港口を見る。遙に望む、孤帆落日の中、青山煙の如く映帶し、斜照松翠を負て顏緣我衣襟を染む。人閑に、景幽に、物外の思あり。食後、榻に依れば、星斗窓に當て大さ盆の如し。予、良太と相携て庭前を歩す。一境寂として人語を聞かず、松濤竹韵、時に遠く溪流の鏘々たるに和するのみ。予「笠置の山」を歌ふ、良太短笛を取て之に和す。餘音嫋々として流風夜を貫く、清曠の致、俗襟を仙了するに

足る。

此夜白衣の道者此家に宿するもの極めて少し。予等の外三四人に過ぎず。此山に登るもの半夜に發するに非ざれば、一日にして降り難し。予、翌日の疲勞を慮り、夙に寢に就く。山形彷彿として夢に入り、壯思躍々安眠する能はず。

二十八日午前一時、夢を破て山に登る。同行するもの三人、予等二人と先達とを合せて凡て六人なり。蓋し此山、岐路多し、嚮導を傭ふに非ざれば登るべからず、之を先達と謂ふ、其裝束一に道者に等し。此夜、淡雲空を覆ひ、天太だ晴明ならず、然れども尚ほ以て今日の晴をトするに足る。先達、燭を執て途を照す、一片鈎月朦朧として山端に懸り、左、烏海の山影を摸稜の間に認む。四山寥廓、時に怪禽を聞くのみ、山風蕭々として衣袂を吹き、嵐氣肌骨に徹す、熊野橋を渡り、杉澤を經て行くこと里許、駒止と云ふ所に達す、之れ烏海山の麓なり。是より路漸く險にして足指著しく仰ぐ。矮樹短草、蒙茸として左右を掩ひ、高さ僅かに人頭を沒すべし、之に臨めば恰も土窟に入るが如し。硬砂拳石、磔砢として其下に横り、木根蟠屈、躓て仆れんとするもの數々、燭を取て仔細に觀れば、之れ實に一溪間のみ。先達

說て曰く、一朝雨れば此路忽ち奔湍となり、殆ど步むべからずと。月光時に樹間を透し、烱々岩角を射る、凄寥の氣、衣襟に滿つ。行く里餘、眼界漸く開く。仰ぎ見れば山巔形を匿し、一峰前に横り、黝然として大屏風を立たるが如し。頭を回らせば河北の野、一望淡墨を抹するが如く、寒星晃として天にあり、山水髣髴、海上遙かに汽船の燈影射るが如きを認むるのみ。黎明、一の木戸に達す、狀闕門の如し、往來の人を點檢するなり。其前一茅舍あり、徇僂して入べし、内餅を鬻ぐ、名て力餅と云、予、良太と各一碗を喫す、味極めて佳なり。一の木戸を出る頃、天全く明く、先達燭を滅し、一行魚貫して進む。路愈〻狹く愈〻險なり。峭巖鑿立し巨石磊砢として路を塞ぐ、樹瘦せ華黑く、鐵枝槎枒として岩磉を縫ひ、怪根土なくして岩角を攫み、虹龍の珠を爭ふが如し。碧苔、石壁を蝕却し、幽葩、古香を發して其間に點綴す、一行跼蹐して而して進む。石崖齒々鞋を嚙み、足趾稍〻痛を覺ゆ、予、良太と相扶携して上る。斯の如きもの里許、顧望すれば千峽一灘、身は數峰の上にあり。日は已に上り、紫光山背を掠めて斜に西海を射る。山風樹を拂ひ、滴露瓢々として我帽を撲つ。神氣極めて爽快、這般の情味を思へば今尚白雲と共に留住せんと欲す、仰視すれば大峰眉睫を壓して聳へ、山巔尚

黛するが如し。予大喝一聲、勇を鼓して進む。空翠幾重、山又山。

中腹より以上全山皆岩石、途の求むべきなし、僅に岩稜を探り、礫角を攀ぢ、肉薄して登るべし。草木皆風靡して岩礎に鱗伏し、高さ二尺を出でず、枝却て丈餘に亘るものあり、蓋し西風の常に強きが爲なるべし。青苔紫葉の蘚苔、其下に簇生す、見るもの甚だ珍異の感あり。

午前七時、河原宿と名くる所に到る、一矮屋を設けて登山者の休所に充つ。此時西風大に起り帽を戴くべからず、流汗冷絶、氷の如く、爽快限りなし。之を暫くして冷氣漸く肌に徹し少く寒を覺ゆ、凛として晩秋の候なり。予、革嚢を開きフランネルの襦衣を出て之を着す。之を先達に問へば、温暖今日の如きは殆ど稀なりと云ふ。

河原宿を出れば清泉岩を縫て流る、之に臨めば日華透徹、恰も琉璃の如く、之を掬すれば清冽、舌に觸れて氷の如し。予、良太を顧みて曰く、之れ山上殘雪の融解するに非るなきを得んや。走て溪角を繞れば、唯見る一望皚々として恰も大白練を天半に掲げたるが如し。之れ所謂心字雪の一なり。蓋し山上の殘雪常に相依て心字を爲す、故に名く。予、快哉を叫ぶもの數回、走て之を踏めば欸々聲あり、恰も降後數日を經たるものの如し。予、杖を以て之

を碎き、良太之に携ふる所の砂糖を混じ、共に氷上に踞して之を喫す、滿身清絶、意氣快曠、飄然として羽化登仙の想あり。嗚呼、萬頃の蒼茫を瞰下し、千尋の高岡を飛度し、千古の氷に坐して青天に嘯嘯するの快味、安ぞ彼の紅樓朱門に奔走し、庭前盈尺の地に跼蹐する者と共に語るを得べけんや。予、衣を振て雲耶山耶を唱ふ、良太之に和す、高言、嘯虎の風をなし、豪舉、湧山の浪を破るの慨あり。壯絶快絶。

氷雪を踏むこと前後十數町、雪終て山更に險なり。午前九時、初めて山頂に達す。山上一平地をなすに非ず、山角相繞て馬蹄形をなし、西面獨り缺損して深谿をなす、山間陷落し、赭黑色の岩石、瑰琦として遠く谿に沿て相重り、其間片青點綠の見るべきものなし、山上は怪巖疊々として天を衝き、相依て鋸齒狀をなす。谿に昇降するに鐵梯子を以てし、一歩を誤れば忽ち現世の人に非ず。之に臨めば隱崖幽暗、風稜鐵の如し、人をして悚然として毛髮竪立せしむ。頭を回せば眼界廣漠、天地渺茫、將に之れ魂舞ひ神飛ばんと欲す。

此日空際一碧、千峯霽を開き、風氣秋の如し。彼の東方に當て蒼黛畫くが如く蜿蜒として有無の中に隱見し、或は長人の巨馬に跨て馳騁するが如く、或は青蛇の雲に乘じて飛騰する

が如きものは、陸前、岩代の諸山なるか。連山綿々海に沿て走り、遙に西海の煙波に溶去するものは、越後の諸山なるか。雲耶山耶吳耶越耶、海天髣髴、雲水依稀の間に見るものは、佐渡島なり。碧丘相連り、恰も長鯨の漂ふが如きものは飛島なり。俯して庄内三郡の平原を望めば、宛然掌上の物を數ふるが如し。最上川逶迤として白虬草を排して走るが如く、豆阜す落、其間に點綴し、風煙一抹、山川相映帶す。海岸一帶の地、白砂青松縹渺として連綿十數里、翠光海を掠めて餘影長し。屠岳聯峯潮の如く脚下に朝し、雲間より俯して最上の原野を指摘すべし。其景、遼遠微茫、筆端の摸捉し得べきに非ず。予、心神恍惚として岩角に踞し、沈々嘘嘯するもの之を久うす。長風衣を吹て胸襟廓然たり。吁々、彼の茫々として蒼なるもの、果して天の本色乎。彼の漠々として碧なるもの、果して地の本體乎。彼の天を仰で天壘れりと言ふもの、豈地に俯して地濁れりと言ふものならざるを知らんや。安ぞ又地に俯して地濁れりと叫ぶもの、豈天に臨で天壘れりと言ふものならざるを知らんや。彼の茫たるもの、果して天乎、彼の漠たるもの、果して地乎。天上地外、畢竟何ぞ窮むべけん。扶搖に策して九萬里を馳するもの、焉ぞ彌陀掌上盈寸の地を脫する能はざるに非るを知らんや。憫れむべ

き哉、人生の空然たるや。而も尙ほ其狹隘なる窓戸より其頭を出し、我は萬物の靈なりと叫ぶに至ては抑も何等の狂態ぞや。人の見る所を以てすれば、萬物皆小ならざるはなし、人自ら最小なるものなればなり。彼の纖小の筆を握て寸天尺地の中に齷齪し、我は天地の美妙を發揮せりと呼ぶ者の如き、抑も亦何等の白痴ぞや。爾の眼を放て六合の外を觀よ、爾の耳を側てて宇宙の外に聽け、蜉蝣旦夕の智、安ぞ天地永遠の活氣を呼吸するを得ん。彼の認めて善と謂ひ、惡と謂ひ、美と謂ひ、醜と謂ひ、大小と謂ひ、高低と謂ふ所のもの、抑も何か據る所あつて然るや。彼の學者と誇り、無學者と詆る者、其間幾何の差違かある。所謂る學者の知る所を以て知らざる所に比せば果して如何。若し日光を以て平行なりとせば、世焉ぞ學識の有無を論ずべけんや。人は能く無窮を說き、又能く永遠を談ず、然れども其の之を說き之を談ずるや、一に天帝の靈力に歸し去るのみ。所謂天帝なる者は果して萬物祕密の府として犯すべからざる所のものなる乎。此一歩を轉じて此一段の幽冥を照破するに非ずんば、人間豈學識の優劣を論ずべけんや。百感交々起る、區々たる文字は這般崇高なる境地に達する能はず。慨然として長嘯すれば、呼吸深々、空冥に徹するを覺ゆ。吾弟、畫を善くす。予、顧み

て笑ふて曰く、卿何ぞ此絶景に對して一筆を揮はざるや。答へて曰く、崇高の念、吾心を呑む、畫施す所なきなりと。予聞て憮然たり。

上山別に神社なし、只、岩石の間、素屋數檐あり、道者の休憩所に充つ。予等茲に握飯を喫し、一行と別を告げ、山を下りて吹浦に向ふ、時正に午前十一時。

鳥海の池を左方に見、右、羽後の雄鹿半島、八郎潟等を雲煙の間に望み、蹇歩して下る。路險なること蕨岡に倍す。荒草雜木、蒙茸として路を塞ぎ、七八里の間一茶亭の憩ふべきなし。疲餓交〻至り、吹浦に到る頃、精氣殆ど竭く、途に仆れざるを幸とするのみ。良太殊に苦む。吹浦の北、海に沿て半里、湯の田の鑛泉あり、行て宿す。樓、海に依りて建つ、清涼愛すべし。浴後、團扇を執りて欄に凭れば、海綠に、煙淡く、欸乃數聲、沙鷗驚いて波を蹴り、孤帆獨り悠々、人をして巫峽瀟湘の想あらしむ。此夜、濤聲枕を洗ひ、夢裏、山影波に漂ふ。

二十九日雨意洽々。顧みて鳥海山を見れば、雲漠々として其所を知らず。山靈我爲に一日の霽を開きたるが如し。此日酒田に宿し、翌日歸家す。窓間、鳥嶺悠然として尚我れに揖するものの如し。

嗚呼此行、予果して得る所あるか。予自ら之を知らず。平生缺焉たる一物の微、歸來果して如何。予自ら我を知らず。暫く良太と之を記して後日の追憶に充つ。

（明治二十四年頃）

夏季の學生

樂しき哉、夏季の學生や、學年方に終を告げ、六旬の休課、一座の身邊を累はす無し。身は輕鳧に比し、心は流雲の如く、西に、東に、舟に、車に、將に都門を去らむとす。あゝ學生諸子、夫れ何處に行かむとする、誠に艶羨すべき哉。吾人夏季に遭ふ毎に、切に懷往の情に勝へざるなり。今や身世俱に移り、江湖の風月に背く事茲に幾年、せめて遙に諸子の樂境を想像して聊か懷を遣らむ哉。

夫れ天地は大人物なり、山水語らず、日月言はずと雖も、夫の能く自然を觀る者は其高仰

ぐべからず、其深俯すべからず。漠然限り無きが如きも而も渾然として全く、茫々意無きが如きも而も鑿々として味あり。星辰の大、毫絲の微、布置則あり、運行度あり。雷霆時に怒れども地動かず、風雲時に號べども天常に澄む。悠然として彼の蒼を仰げば、虚しきが如く滿てるが如く、情時に怫鬱、意時に蕩逸、或は怡懌虚無なるが如く、或は縱横卓犖なるが如く、氣象萬千、意料究まり無し。顧みて人間を眺むれば、拘々切々、濁氣途に薰蒸す、眞に慚死すべきなり。是れを以て大人は常に自然を師とす。

自然を師とするものは、自然を解するの法を知らざるべからず、自然を解するの法、唯己れを虚うするにある而已。山岳の瑰琦、河海の浩茫、風雲雷霆の奇觀、心を虚うして是れに對する事久しければ、一氣自ら恍惚として直ちに造化の樞機に參し、身世共に遺れ去りて天地我と一體たり。忽然として煙火の境に歸るも、尚ほ氣廓遼遠、雄心腹に滿つ。是の間一物の微、杳として語るべからざるものあり、夫の磅礴渾茫、直ちに天より下り、父師に由りて立たざるもの、神聖雄奇の極に參して反て正々堂々に歸す。達人の事業亦是の如きのみ。人は法を造り、而して法に苦しめらる。大人物は常に人法を以て天則を遺れず、顧みて彼の自然に

學ぶ。是れを規し是れを矩し、朝に一頭を描き、夕に一角を畫するもの、了に墨士塵人の技柄のみ。

能く自然を解する者は、常に能く自然を大觀す。幽溪小壑の奇を喜ぶもの、未だ與に天地の大文章を語るに足らざるなり。所謂泰華の三峰直ちに天と接する底の壯觀は、斷橋落澗の景に見るべからざる也。

山は其の高きを欲し、水は其の廣きを欲す。千峯趨り、萬巒走り、環繞周匝、拜するが如く揖するが如し、矗立萬丈、四海を瞰視して是れに臨むもの、眞に天地の雄物に非ずや。若し夫れ煙波浩蕩、千里一碧、一旦空回り雲昏く、海水天風渙然として相遭ふや、濆薄吹盪、渉として津涯無し。萬頃の波瀾、注げば則ち天紳となり、立てば則ち岳玉となり、澎湃動蕩亦眞に天地の偉觀に非ずや。大人物の規度多く玆に出づ、顧みて人生名利の巷を望まば、誰れか其の子々焉たるに驚かざらむや。

書は能く人を敎へ、自然は能く人を造る。社會は能く人を制裁し、自然は能く人を解放す。人をして其本に歸らしむるものは自然なり。社會も亦時に自然に歸るを要する時あり。自然

は何れの時代に於ても進歩の標準なればなり。

夏季の學生は自然の友たらざるべからず。實際の人生に入るに先ち、出來得る丈け自然の啓沃に接せざるべからず。是れ未來に於て青年の純潔と大望と理想とを活現する所以なり。吾人僅に穢滓を遠去して其風露に鳴く、喩へば秋蟬候蛩の如きもの、眞に恨事とすべき也。

（明治三十一年七月）

人生と天然

○今や吾人を圍繞するものは初夏の天然也。而して初夏の天然は四季の中の最も快濶なる天然也、最も希望と血氣とに富める天然也。是れを人生に喩へば、夫れ三十歲前後の青年乎。

○夫れ色相の上より見れば、黃と白とは理想の標號也、而して黃は白に比して一分の熱素を含む、卽ち是れ白が冷絕清絕の理想を標示するに對して、一分の情味を蓄ふる也。是れを以て、吾人の理想とする所の天國淨土、及びもろ〳〵の佛光神彩を現はす主なる色相は黃金

色也。

○東帝駕を旋らして、萬物漸く春ならむとするや、草木の初めて嫩芽を萠すもの、其の色多くは黃に近し。而して春漸く深くして、初めは淺緣より漸く純緣となり、夏期に至りて、深緣より漸く暗緣に移る。而して色相上、緣を成すものは黃と青と也。卽ち知る、春夏二季の天然は、色相上、黃青二色の消長に外ならざるを。

○而して青は天の色也、海の色也。卽ち其の標示する所の感情は『深遠』也、而して『深遠』は知識也。

○今夫れ黃は理想の色なるを以て、同時に希望の色也。而して純黃は其の色相餘りに抽象なるを以て、そが標示する所の希望亦餘りに不明也。是れを人生に喩へむ乎、猶ほ嬰兒の呱呱として聲を擧ぐるが如し。

○卽ち玆に一分の青味を加ふ、淺緣是れ也。是れ卽ち渾沌なる希望に加ふるに若干の知見を以てする也。夫の柳條の淺緣を見よ、轉た人をして紅顏二八の少年男女を想はしむるもの無からずや。

○季は夏に入りて青味漸く加はる、先きの淺緑なるもの漸く變じて純緑となる。卽ち是れ少年の知見漸く進み、其の希望亦漸く定明ならむとするに似たらずや。初夏の天然は、正に三十歳前後の青年也。

○青黄二素、其の均衡を保ちて、玆に純緑の色を成す。是れを人生に喩へむ乎、理想に對する希望と、實在に對する知識と、兩々相調和して最も快濶なる生活を現ずる也。二十歳前後の人は空想に耽るを樂み、四十前後の人は實際に執着す、十歳前後の少年は渾沌なる理想の人たること、猶ほ五十歳以後の老人が、枯淡なる知性の人たると等しき也。見來れば、圓滿なる人生は夫れ三十前後にある乎。

○圓滿なる人生が三十前後なるが如く、圓滿なる天然は、恐らくは初夏季に於て求め得べけむ乎。晩夏に近くに隨ひ、黄漸く減じて青漸く加はる。八九月の森林は人をして幽邃の感あらしむるも、快濶の情を起さしめず、理想色なる黄味の減じたれば也。下つて秋に入れば、常緑樹は暗黑色を呈し、他は卽ち漸く乾枯す。何ぞ夫れ恬淡情に忍ぶ白頭翁と相似たる。

○且夫れ初夏は、血氣に富める事に於ても、三十前後の青年と均しき也。見よ、牡丹、芍

藥、石竹、躑躅、薔薇等、凡て燃ゆるが如き赤色の花は、一年中是の季を以て最も多しとなす。孟春の花は清冷雪の如き梅花のみ、些の情熱なし。中春の花に桃花あり、櫻花あり、海棠あれども、其の色尚ほ甚だ紅ならず、血氣に於て未だ足らざる所あり。猩々緋の如き極熱の色素は、多く五六月の間に於て是れを見る。

○赤は熱色也、而して熱色の標示する所の感情は情慾也、煩惱也、血氣也。三十歳前後の人は、是の點に於ても亦初夏の天然に似る所あらざる乎。

○人生の四季を觀じて是れを天然に擬す、亦多少の興味無きに非ざるべし。而して吾人は信ず、天然が吾人に與ふる大なる教訓の一は、實に這般の觀察に由來すべきことを。

（明治三十二年六月。詹々錄）

海の文藝

○海を意味する言葉の中で最も實物に相應はしき音調を有するは、蓋し希臘語の『タラッター』でがなあらうテ。獨逸の文學に通ずる人の皆知つて居る如く、ハイネはその有名なる海の歌『メールグルース』の破題をば此の言葉で起し、其まゝ『タラッター、タラッター』を呼び懸けて居るが、吾輩はこの詩を讀む毎に、是の破題の音調によりて一種の何とも言ひ難き壯大なる感情を惹き起すのである。バイロンがかの『チャイルド・ハロルド』の終りを結びたる大洋の歌の序行も、誰れも知る名高いものであるが、ハイネの此の『タラッター』の呼び起しに較ぶれば、中々及ばざるの感あるを免れない。

○これを思ふと、我邦の『ウミ』と云ふ言葉はまことに面白くない。如何に音調を附けて發聲しても、海てふ觀念の惹起すべき壯大もしくは快濶てふ感情を現はし難い。英語の『オーシアン』Thou dark blue ocean と云ふ語などは、これから見るとなか〳〵趣がある。『ザウ、ダーク、ブルー、オーシアン』と低調で朗吟すれば、暗黑なる蒼海の寄せ來る樣子が髣髴として想ひ浮ばぬでもない。

○言葉は仕方が無いとして、是の海國の日本に海の詩人と云ふものが無いのは如何した譯であらうか。少しく歴史に通ぜる者の何人も知る如く、本邦建國の歴史は勿論の事、中世の頃まで、吾々の祖先は海國民として恥かしからぬ事業を爲して居つたのである。近世鎖國の國是が如何に國民の志氣に影響したにせよ、詩人文學者乃至美術家までが、此の天地間の一大壯美の現境を遺却し去つたかの觀あるは如何いふ譯であるのであるか。

○海は英吉利文學の過半を占領して居るとは、よく人の言ふことであるが、政治上、商業上に於て全世界に羽翼を伸ばしたる此の國民が、文藝の上に於ても亦海の支配者であつたと云ふことは著しい事實と謂はなければならぬ。單に近代詩人に就て見ても、スコット、ヲーヅヲース、バイロン、コルリッヂ、シェレー、テニゾン、スヰンバーンなど云ふ人々の著作より海に關する題目を取り去つたならば、殘すところは誠に寂莫たるものであらう。

○中にもバイロンは海の詩人として最も成功した者であらう。勿論是の人の歌つた海は、

平和な美はしき海では無くて、亂暴なる悲壯なる海であつた。彼は自然界の最も絶大なる力を示現せる、バイロン其人の所謂惡魔主義の權化とも見るべき處に、彼れが此の窮屈なる人生に得ざる、限りなき意慾の要求を寄托し、以てその胸中の磊塊を遣らむとしたので、海其物の本來の美を忠實に發揮し得たや否やは、一寸疑問であるが、兎に角、崇大悲壯なる海の美の一面を最も有力に現はし得たことは爭ふべからざる事實と謂はなければならぬ。

○コルセーアや、ドン・ジュアンや、チャイルド・ハロルドやに現はれて居る海には、常にバイロン其人の俤が映つて居る。彼は自分でも言つて居る通りに、眞に『海の兒』であつたのだ。

○獨逸のハイネも海の詩人として尤も成功したる一人である。『北海』篇の如きは、ハイネ集中の秀逸を集めて居ると云つても差支は無い。幽婉なる感情の中に、あらゆる海の美を融化し、獨得の調子の上にあらゆる其の響きの美はしさは、たゞ〳〵感歎の外は無い。

○これは自分一人の場合のみであるかは知らぬが、ハイネの詩ほど自分に不思議なる影響を與へるものは無い。興會到る時、其の一行一節を讀めば、自分の心は、さながら魔術者の

杖に觸れたる昔譚の著者の樣に、たゞ〳〵何となく悲しく涙のこぼれる樣な感じがするのである。尤も是れは自分が久しい前から、病氣の時や失意の時の唯一の伴侶としてハイネを携へてあるいた經驗の、おのづから然らしめた所であるかも知れぬ。

○忘れもせぬが六年前の冬の最中であつた。熱海の海岸で『望みも戀も消え果てゝ』と云ふ一行で初まつて居るかの「破船者」の一篇を誦した時の如きは、自分も覺えず詩中の人と同じく、濕つぽき磯邊の砂に面を俯して熱き涙を濺いだこともあつた。實に是の「破船者」の一篇は自分の身にとりて忘れがたき紀念を有して居る。可なり長篇ではあるが、自分は今日でも一字一句もよどみなく諳記して居るのである。

○これは自分の私事に亘つたが、兎に角ハイネの海の詩は恐らくは如何なる詩人の海の詩にも劣らぬものであらう。それにしても我邦には何故海國でありながら是の如き海の詩人が出なかつたのであらうか。それとも又海の美と云ふことに殊に感じの無かつた爲めであるのか。まさか其んな事もなからうに。

○然しながら海についての觀察の缺けて居つたことは、爭はれぬ事實とは思はれる。例へ

ば、夕陽の美と云へば、西洋では、あらゆる美中の最も美なるものの一つとして數へられて居る。其れだから苟も自然の美に興味を有てる詩人は、皆何れも口を極めてその美を歎美して居る。自分は『マウンテン』と題する詩集を持つて居るが、其の中に夕陽の美を歌つた近代詩人の詩が數十種に上つて居る位だ。ベインの樣な學者ですら、其の心理學で、美はしきものの例に夕陽と星と百合の花との三つを擧げて居る。斯樣に貴ばれて居る夕陽の美をば、本邦の詩人はどれ程歌つたであらうか。如何にも夕日影とか、夕照とか云ふ文字は見えぬではないが、其の崇大なる光景を想はしむるに足る一首一篇だに我文學史の上に見出され得るであらうか。自分の寡聞なる、未だ是れあるを知らないのである。自分は、花鳥風月に傷心してかゝる天地の大觀を遺却せる本邦人の美意識には聊か不滿足の意を表さなければならぬ。

○斯んなことを今更慣慨しても別に仕方がないが、後に來る文藝の士に對する吾人の希望として讀者の注意を求むるも强ち無用でもあるまい。

○夕陽は美はしいが、其の中でも海の夕陽ほど美はしいものはあるまい。自分は奥州の西海岸に育つた者であるから、海の日沒の景色は自分には牢乎たる印象を留めて居る。——自

分のこの粗末な筆で、なまじひ形容立てをするのは已めにして、すべて經驗ある讀者の想像に委ねることにしやうが、あの夕べの雲のいろ〳〵のたゞずまゐ、それにはえうつれる夕日の光の濃き淡き、それに伴つて大海原のいろ〳〵に彩られたる、これ等の一切が日の傾くにつれて形も色もそれ〴〵變りゆく有樣、殊に大空の色の暮れゆく具合などは、繪にも筆にも又心にも及ばない。斯かる大なる美に對して、殆ど風馬牛の觀ありたる文學者、美術家があらうとは、吾々の想像し得られぬ所だ。

○畫家にとりても、斯かる景色は技倆だに伴はば、蓋し絶好なる題目と言はねばならぬ。例へば、ラスキンに激賞せられたるかのターナーの作品抔には、是の畫題によりて多大の成功を示したものが幾らもある。是れは「近世畫家」を讀める人の誰も知つて居ることであらうが、かの『テメレーン』の如きも其の一例である。ラスキンが評して『純然たる自然の風景のみによりて現はされ得べき最大の悲哀』と謂つたのは、卽ち是れだ。

○然しながら、夕陽の海を見て悲哀を感ずる場合があらうとは、自分には如何しても思へぬ。尤もこれは自分の貧しい經驗の爲めであるかも知れぬが。

○海の夕陽に對して自分の起す感情は常に「平和」である。例へば世界のあらゆる障碍に打勝ちたる大勇者が、今方に其最後の戰鬪を後にして、榮光と平和とに擁せられつゝ、靜かに其の墓門に凱旋する、と云つた樣な趣があるのである。夕陽のけしきは如何にも崇大光明ではあるが、其の全體の上にドコとなく疲れ憊れたる老衰の趣があることは、自分には如何しても爭はれぬ感情である。是れを例へば朝日の景色のよろづ活き〳〵として、今將に戰場に上らむとする初陣の勇士の有樣なるに較ぶれば、兩々相對して、さながら人生の兩端を現示して居る趣があるではないか。

○あゝ人や、その青年は朝日の如く、その晩年は夕陽の如くありたいものではないか。爭ひを經ざる平和は、平和たるの價は無い。吾等は人生の戰鬪に打勝ち、榮光の雲につゝまれて靜かに西方の天に入りたいものではないか。あゝ海の夕陽は美はしいが、海の夕陽に似たる人生の末路は更に美はしからうではないか。

（明治三十三年六月）

清見潟日記

一　はしがき

清見潟の名を聞くだにも床しうぞ覺ゆる。海道の名所、關の東西に少からざれども、われにとりてこの地ばかり懷かしきは無し。

憶へば早や六歳の昔とはなりぬ、われ身に恙ありて、そばらく此地にさまよひしことありき。冬のもなかにてありければ、野山のけしき寂しく、海原遠く吹きわたるいなせの風のいとゞ身に染みき。されどわれは幸なりき、胸にこそいたみはあれ、眼はなほうるほひき。清見寺の鐘の音に送り迎へられしゆうべあしたの幾たび、三保の松原に泣きあかしゝ月あかき一夜は、今にしておもへば、見はてぬ夢の恨めしきふし多かりき。

六歳は流水の如く去りて、人は春ごとに老ひぬ。清見潟の風光、昔ながらにして、幾たび

となく夜半の夢に入れど、身世怒忙として煙霞の癖をゆるさず、深くこれを恨みとしき。もしあやしき運命のわれに禍するに非ざりせば、この宿志、いづれの日にか果されたりけむ。去年の夏、われ思はずも病にかゝりぬ。如何なる野の末にてもなまじひ都の煩はしきよりは住みよかむなるを、ごさむなれ清見潟ならぬ地にわれいかでか行くべき。こゝに九月のはじめ、居を清見寺の下に卜しぬ。

二　清見潟の今昔

薩埵の岬のあなた、興津川の口より袖師、江尻の長汀をこめて清見潟とぞいふなる。古の清見が關は、今の清見寺のふもとにありきと傳ふ。關の起りは王朝のはじめごろなるべくや。天慶のそのかみ、東夷征討の爲に下りたる清原のなにがしが、漁舟の火の影は寒うしてと朗詠しけるむかしの跡もゑのばるゝ。かの維盛の少將が兵衞の佐討たむとて、やがては水鳥の羽音に立つ足もなき十萬騎の轡をそろへしも、見ぬ世のあはれ、たづぬるに由なし。光行が海道記に『清見が關を見れば、西南は天と海と高低ひとつに眼をまどはし、東北は山と磯と險

難おなじく足をつまだつ』とゑるしゝは、三保の浦の水平らかに、薩埵の山の峠けはしきを言ひしならめ。今は鐵路海に沿うて走れども、むかしは薩埵の峠を越えて倉澤に出づるの外に道無かりしかば、海道の要衝、函根の西にはまづこの關をぞ推すべかりける。

清見が關は早くすたれて、興津の宿とはなりぬ。このわたりの地名同音にして異字多し。海道記には今の如く興津とゑるされけれども、和名抄には息津とあり、源平盛衰記、方角抄などには何れも沖津と書かれたり。由井の正雪が住ゐしと云ふ由井の宿も、或は湯井と書し、或は湯居とゑるさる。獨り名稱のみならず、土地もまた換はれるあり。田子の浦とし云へば、今は鈴川のあたりの浦づたひを云へど、古は清見潟をもゑか呼びたるらし。方角抄に、三保の入江より浮島が原づたひの浦をおしなべて田子の浦と呼ぶとあれば、興津、江尻などもその中の小名なりしならむ。永享のむかし、藤原の雅世が清見寺にて詠める歌にも、

吹く風もなほをさまりてたゝぬ日は、けふとぞ見ゆる田子の浦浪

とあり。想ふに山邊の赤人が田子の浦にうちいでて見ればと詠みけむも、清見潟あたりのながめなるべきか。げに興津の濱に立ちては、富士は薩埵の峠に遮られて、わづかに其頂を見

はすのみなれど、袖師の浦より三保の方にうち出づれば、山のすがた、世にもうるはしく仰がるゝなり。事實いかにやありけむ。

三　默　思

九月のはじめより十二月のなかばまで、三月あまりの月日をば、われ夢の如くにしてたちくらしき。わが宿は清見寺の眞下なる海邊に臨みて、袖師の濱の浦づたひ、江尻・清水のなぎさより、水と空とを限りたる三保の松原をまのあたりにぞ見る。夕べあしたのながめ、心往くばかりなりき。あゝかゝる折にこそ、詩人ならぬ身のくやしけれ、この筆の短きにくらぶれば、我が思ひの餘りに永きを如何にすべき。

素より病にかくるゝ身にしあなれば、秋もやうゝ深うなるにつれて、身にまむ衰れはさすがに繁かりき。三保の入江おほろにけふりて、有渡の山かげやうゝにうすれゆくころ、雲いろゝの夕暮の空にながめ入りて、われや行衛もまらぬ思ひに幾たびか立ちつくしけむ。夜靜かにして磯打つ波のかすかに聞遠うなるにつれ、わが胸のあへぐが如きこそあやしかりけれ。われはこのあやしき默思を友として、三月あまりを夢に暮らしき。げにあはれにもまた樂しき夢なりき。

都なる友はまきりに文してわが幽棲を慰めぬ。されどわれは寧ろわが孤獨を喜びき。人間よしやあまなくとも、われになほ山河の知己あり。人は友とぞいふめる、されどこの世に響を同じうする胸は幾ばくもあらざらむ。面して笑ふもの幾萬人ありとても、われにとりては瓦礫にひとしからずや。

美はしきかな、山や水や、憎みなく、猜みなく、僞りなく衰へなし。人は生死の巷に流轉し、世は興敗のわだちを廻る。山や水や、かはるところなきなり。衰れとも樂しとも、見る人のこゝろ〳〵にまかせやりて、春秋ごとの榮落に萬古の姿とこしへなるこそめでたけれ。想へば恥かしきわが身かな、こゝに限りある身の病を養へばとて、千年の壽、もとより保つべくもあらず、やがて衰れは夢のたゞちに消えて、知る人も無き枯骨となりはてなむず。あゝ清見潟、千年の興亡、なれにとりては雲烟の一たび過ぐるにも等しからむ。今はたこゝにわれあることを知るや、否や。

人讀まば笑ひもせむ、かゝるあだなる想ひの中に、わが慰みはありき。

四　興津の宿

興津はもと海道の一漁村に過ぎざれども、人の往來いと繁き地なり。そは東海の名區として知られたる清見寺の所在地なるにもよるべく、天つ乙女のあま降りけむ三保の松原の順路なるにもよるなるべし。されば一月二月の頃には參宮の道者、興津の驛に下るもの絡繹として絶えず、清見寺に詣で、三保に渡り、龍華寺より久能山を一日の旅路として、靜岡に泊る、大かたはかはることなし。さらでだも、山海のながめの世の常ならぬにひかされて、四季をり〳〵の漫遊の客少からず、加ふるに近年は海水浴のはやりとて、夏の人込み、殊に繁しとぞ。

都離れたる土地とて、家居のありさまよろづ鄙びたる、いとめでたし。人の心もさすがにまことなるらし。わがかり住居に、處の老女の年五十ばかりなるを雇ひて、朝夕の事を頼みしが、われ都に歸る時、この女、車の窓によりて、今別れ參らせば何れの日、何れの時かまた

遇ひ奉るべきとて、はら〳〵と涙を流しき。あはれ、かりそめなる緣りのわれなるに、さても人の心のかくばかりあつかりけるよ。

こゝは蜜柑の名所なり、紀州の有田につぎては、全國この地に及ぶものなしと云ふ。雲州又は溫州と銘打てるは、大かたこの地の產なりとぞ。畑は多く山の上にあり、崖ともいはず蔭ともいはず、凡そ一里が程の山つゞきは殘る隈もなく耕され、見渡すかぎりは蜜柑の畠なり。秋の暮より冬の初かけて、濃き綠なる葉かげに、このくだものの色うるはしく黃ばめるが、枝も撓わなるさま、いと珍しき見物なり。土地の習ひとて、多くは山に登る人の摘み食ふを咎めず、園守の老爺にわづかの錢などとらすれば、思はぬ家づとに歩みがてなることも多かりき。名高き暖地なれば、冬來れども山に紅葉なし。清見潟の風光を一望の下に見下ろし、靜かに蜜柑の木かげに横はれば、岸うつ波の音幽かにひゞきて、心もいつしか遠くなりつ。里の子等が木の實つみながら、節面白ううたふ歌なむど、世を外なる長閑けさ、いはむかたなし。

清見寺は由緒古き寺なり、臨濟宗の靈場にして、又の名を興國禪寺と呼べり。むかしより

海道一の名區と稱へられ、『三保の松原清見寺』てふ歌は今も尙ほ普く知られたり。海に沿うたる山の半腹に立てれば、樓觀の眺め、遠くゆきわたりて、清見潟のけしきは大かたこゝに集まれり。鐘樓高く聳えて不離の梵音旦暮にひゞき、名勝の地、更に一段の幽寂を加ふるらし。近きころ境内に火ありしが、燒けたるは羅漢堂のみにて、この寺の壯觀故の如きこそ欽ばしけれ。

興津の宿の東はづれに興津川あり、この川を北に溯りて甲斐の國に通ふ路は、身延山の本道なり。川口は卽ち薩埵の岬にして、鐵路斷岩を穿ちて蛇の如く走れり。この岬よりの富士の眺め、又なく美はし。夕暮の空に色面白う薄れゆく山の姿に眺め入りて、夜に入るまで立ちつくしゝこと、われその幾度なるを知らず。三保の浦、龍華寺よりの眺めも、こゝのには よも過ぎじとぞ思はる。

この地、東京より汽車にて六時あまりも隔てたれば、都人士の別莊とては、井上伯、阿部伯などの有する二三に過ぎず、喜ばしきことなり。別莊といふもの大かたはその土地を俗了す。鎌倉、大磯なむどのさまにて知るべきなり。旅館は東海ホテルとて、處にはふさはしからず淺ましき名なれども、よろづ心地よき宿なり。先つ歳には二八ばかりの少女の都にも稀なるべう美はしきが、たとへば谷間の姫百合の、心なき人の目にもとまりしが、今はよその奥庭に移されて、あだし人の眺めを許さずとか。げに人の上は頼むべからで、山河のみぞ心ゆるすべかりける。

五　三保の松原

霜月の中ばごろ、都よりゐるべの人は訪ね來りしかば、われ東道の主人として、共に三保の松原に遊びぬ。船はわが宿の前より漕ぎ出でぬ。三保の濱まではわづかに一里あまりの海路なり。風なぎ、水靜かにして、空の色さへ高く澄みわたれる日なりしかば、四方のながめいとはれ〴〵しくぞ覺えし。富士の高根はいつしか群山のおもてに立ち、薩埵、岩淵の崎より、青嵐遠く裾野の原をこめて、愛鷹、函根、伊豆の山々まで色おもしろう薄れゆくさま、心往くばかりのけしきなり。船はやがて岸につきぬ、こゝに遊ぶ人のならひとて、われ等もまた三保の神社に詣でぬ。

三保の松原としいへば、たとへば天の橋立の如く、細長き土地の海に突き出たるならむと、大かたの人は想ふめれど、實はいとひろき出洲なり。最も幅ひろきは二十丁にも餘るべく、長さは一里にも近かるべし。折戸、三保などの漁村その間にあり、田畑も少からず、多くは芋と砂糖の木とを培養し、まゝ桃の林を交ゆ。三保の神社は三保村のはづれなる松林の中にあり、宮居いたくあれ寂びたり、額して御穗神社と云へり。祭神は昔より神主の家に傳へたる緣起には、仲哀天皇なりと誌せるよしなれど、疑はし。されどこの駿河の國には燒津、草薙なむど、日本武尊を祀れる處多ければ、その御子にて天が下治め給へりし帝を祀り申す因緣、全く無きにしも非ざるか。たゞ出雲の國美保が關に三保神社あり、祭神は三穗津姫なれば、こゝの社と神緣あるべきやに思はる。三穗津姫は高產靈神の御女にて、大已貴神に嫁し給はむとて下降し給ひたる御方なれば、かの天女の天くだりしと云ふ傳說と似通へるも奇しからずや。神世のこと杳として素より人間の窺ひ知るべきにあらず。

社より南の方三四丁にして海邊なり。昔に高き羽衣の松は、この海邊の松原の中にありきと傳ふれど、今は其跡のみかすかに殘れり。三保の社にこの羽衣の斷片ありと聞きつたへた

れば、歸途、祠官の家に立ちよりて一見したき由を申入れぬ。社掌なるべし、五十ばかりの男の袴つけたるが出で來りて、かの羽衣の由來、天人、伯梁が事など、わが目もて見たらむ樣にまことしやかに說き立て、やがて大きやかなる鑰持出して社の內殿を開き、恭しく一個の玻璃筒をぞ捧げ來りたる。玻璃筒の中に錦のきれを布ける小筐あり、その中に、たとへば煤に黑ずみたる物の碁石ほどの大きさなるがあり、卽ち羽衣の片なりと云ふ、筒の中より取出して試みに指を觸るれば、毛屑に似て更に細く、綿に似て更に柔かなり。物の眞僞を論らふだにたわけたる業なれど、苟にも世に得たる名は空しからず、行き見る人の年々に絕えぬこそ奇怪なれ。社掌の言葉によれば、三保の村には伯梁の子孫もあり、かの天人に邂逅ひし時、伯梁が着けたりし蓑と釣竿とを今尙ほ傳へけるとか。たゞに一條の傳說として、虛實をよそにしてこそ云ひもらぬ趣はあれ、かくてはなか〳〵に興さむる心地せらるゝぞかし。

われは、友と共にまた船に上りぬ。午すぐる頃、淸水の港に入りて、朝陽館と云ふ旅亭に立ち寄り、再び船をかへして興津なるわが宿に歸りしは、有渡の山に夕日かげまばゆき頃なりき。

六　久能山

またの日、久能山に遊びぬ。袖師の濱の浦づたひに、江尻より清水を廻りて、わが宿よりは凡そ三里あまりの路程なり。清水の入江に箕輪と云ふ所より船にて折戸に渡る、わが知れる人の、そこの寺に假り住居せるを訪ねむとてなり。小春の空のいとうらゝかなる日なりければ、心地いひあらず爽かなりき。午すぐる頃、折戸を出で、加茂、駒越なむど云ふ村々を過ぎて間もなく久能の山下に着く。駒越よりは濱づたひの道にして、遠洋のながめ見もあかず、伊豆の山々青螺の如くにして左手の空を劃り、右手は烟波縹緲の間、はるかに御前が崎を望む、景物限りなく壯大なり。增、蛇塚あたりの一帶の砂濱には、汐汲む乙女等の脛もあらはに立ちはたらく樣、滿干の汐の辛き世渡りとも思はでや、鄙歌をかしう聲そろへたる、世を外なるけしきなり。

久能山は名の高きほどには高からぬ山なり、海拔わづかに九百尺に過ぎず。されど、海に臨みて斷崖けはしく立てれば、山態おのづから凡ならず。およそ駿遠の地、山河多しと雖も

海洋の煙波をうけて四望かくの如く空濶なるところ、實にこの地を推すべし。むかし東照公が其の墓域をこゝに定め給ひしは、さすがに好鑑のすぐれたるを賞すべけむ。

是の山の草創に就ては、俗間の說一ならず。或は推古天皇の頃に久能のなにがしが觀世音の道場を建てしが始めなりと云ひ、或は養老年間、行基この地に寺を建てゝ觀世音の木像を彫めるを開祖とすと云へれど、今は討ぬるの要なし。西行が山家集に『久能の山寺にて月をみてよめる』といふ歌あれば、鎌倉のころ既に寺塔の設けはありけむ。降て戰國に至り、今川氏の滅後、駿州の地武田氏の領となるや、この山の險阻なるをたのみて一の砦を設けしが、まもなく德川氏の有に歸しき、家康特にこの地を愛し給ひ、登攀ゑばく〳〵なりしと云ふ、公の薨ずる時、遺命してこゝに葬らしむ。かくて元和のはじめ、久能の城は東照權現の靈屋とはなりにき。現に存する所の社殿は、卽ち當時二代將軍の造營にかゝれり。翌年春、野州日光山に改葬の義定まりて、靈柩東に移りしが、史家の中には『あればある、なければなしとするがなる』てふ天海が歌などによりて、改葬の名のみなりしを信ずるものありと云ふ。今は別格官幣社に列せられ、春秋の祭祀、いと嚴かに奉行せられ、東海の靈場として、其の名、海內

に聽けり。

見上ぐれば、見る目も險しき斷崖ながら、二十餘折の磴道、千餘段の石階は、飛欄の如く麓より立ちのぼれれば、思ひの外に上り易し。一の門より本殿にいたるまで、二三丁が間は概ね平地にして、物見の松、勘助井戸などの故蹟あり。神殿は質素にして、而も莊嚴、情景まことに神さびたり。東照公の遺骸を埋めたる處は本殿の後ろにあり。凡そ三十間許の石瑞籬を繞らせる中に、一丈五尺の巨石塔立つ、卽ち墓標なり。この墓標の前に當時諸侯伯の獻納せし赤金の燈籠十數基列べり、石塔の西に向へるは公の遺命によれりと云ふ。

われは時久しくこの墳墓の前に佇立しき。靜に英雄の偉業を回顧して、うたた數ならぬ身のあるに甲斐なきを覺えぬ。あゝ三百星霜一夢の中にたち去りて、祖龍今何れの處にか目さむる。われは薄倖兒、人の知るなく、事の成すなし、さるを惜しむまじき命の尙ほ捨てがてに、そゞろに漂浪の旦暮をかさぬるこそ愚かにもまた悲しからずや。

憐れなるわれは、かゝる思ひに沈みて、悵然として山を下りぬ。

山を下りたるは波勝の崎に夕燒けの色うるはしき頃なりき。われは車を命じて靜岡に行き、

暮夜、汽車にて清見寺下の宿に歸りぬ。

七　富士川

知る人の富士の裾野に住めりしを訪ねむとて、われ幾たびか富士川を渡り行きぬ。不圖せることより、そのわたりの地勢に思ふところあり、試みにその變遷を訪ねて左の如き考案を得き。もとより地理歷史の學に精しからざるわれなれば、想像のあやまれるも多かるべし。

われの見る所にては、富士川の流れは古より漸く西の方にかたよれるが如し。今は岩淵、松岡二村の間を南に指して直ちに海に入れど、古は鈴川より今の海道以南の地は概ねこの川のデルタにてありたるらし。而してこのデルタはナイル川のそれの如く、又は利根の流域の一部の如く、更に幾多の小デルタに分れて沮洳沼澤の間に散在したるらし。海道以南の地、今も尙ほ是等沼澤の遺跡少からず。村名、地名の多くは、森島、五貫島、宮島、柳島なむどの如く島の字を有せり。今は富士川を境として、東は富士郡、西は庵原郡に分たるれど、この川の東の方なるなにがし村の舊社には、駿河國庵原郡と明記せる標札のありと云へば、本流

の西に移れる、疑ふべくもあらざるが如し。蓋し海道以南の富士川の流域は、デルタの常として概ね卑濕の地にてありたるべければ、今の村落は遠からぬ過去に成りたるらし。かゝれば延喜式中の神祠のことゞく海道以北にあることも解し得らるゝなり。源平盛衰記の富士川の條には、平家の陣地、河口を去ること二町許りと記るされしと覺ゆ、また以て一證となすべけむか。

かゝる想像のいかばかり中れるかを正さむは、世におのづから其人あるべし。こゝにはただ思ひ寄れるがまゝにかくなむ。

八惑ひ

清見潟の三月は都の三歳にもまさりてわれには事多かりき。語るべき友もなく、訪ぬべき家も無きわれながら、げになすべき事の多かりき。われは書を讀みき、山に登りき、濱邊にたゞずみき、されど時の多くを默思の間に費しき。あゝこの默思の忙がはしさをわれならぬ人の誰か知るべき。

われはげに病める身なり。されど病める身の樂みを、病まざる人の如何でか知るべき。若し薄倖のわが生涯に尙ほ幸ひの月日あらば、清見潟の三月ぞ、然るべかむなる。おもへばはかなき人のいのちかな。われ惑ひながらむと欲するも得ざるなり。

（明治三十四年四月）

感慨一束

姉崎嘲風に與ふる書

先頃よりの重ね〳〵の御狀身にあまみ〴〵と喜ばしく存じ候。春以來此方よりははかゞ〳〵しき御返事も申さざりしが、兎角は病軀事に勝へず、審に此の愁思を抒べて君と共に憂を分たむと念へども、情迫り胸悶へ、筆を落して文を成さず。何れの日か此の感懷を風露に托して君と共に自然の中に優遊するを得ん。君よ、悲しきは吾等が身の上にて候ひけるよ。病は年と共に加はれども、信は獲難く、迷は深し。徒らに惆悵して低回すれども、道遠くして日暮れなんとす。この旦夕の命を以て何れの時か色心相應の信徒となり、如說修行の行者となり得べき。再々の君の御狀、あゝ吾れ涙を以てそを繰返せしこと幾度ぞ。同じ惑ひに身を苦しめて、君は早くも解脫の途に就き給へれども、吾れは尙ほ依然たる吳下の舊阿蒙。力めて書を讀み道を尋ぬれども、見思の惑ひ旦暮に積もるのみ。所詮は沙を絞るに油無く、石を磨き

て玉に似ざるか、あゝ吾れ又誰をか恨みとせむ。

君と別れてよりはや二年なかばを過ぎぬ。あはたゞしくも經つ月日かな。吾れも亦病の中にもはや二年を暮らし候よ。是の間、身世匆忙として相移り、君も吾れも共に人生の宿疑に陷りぬ。世に離れ、人に離れ、さては二十年來の外緣に離れ、吾れは玆に久しうして己れ自らの友となりぬ。あゝ君よ、君も亦この思ひをばよも忘れ給ふまじ。是れまで他人の意味を餘りに多く知り過ぎたる吾れは、却て吾れ自らの意味をば知らざりき。人生の第一歩たるべきこの自覺を離れて、良しや萬卷の書を讀み古今の知識を蒐めたりとて、吾れに於て何の關はる所ぞや。吾れは自ら此の覺醒を貴しと叫びぬ。

此の間の消息を今更君に語るの要はあらじ。吾等はたゞ此の自覺に本づきて吾等の世界を建設するの務ありと存じ候。されど君よ、吾等の世界は尙ほ頗る遠かるべし。少くとも吾等の生國にて吾等の解せらるゝは頗る難事なるべく候。唯、意志の存する所に實在あり。君と吾れと、此世に存せむ限りは世は尙ほ吾等の物たるを妨げじ。君よ、吾等は互に心強かるべく候。眦藍の風吹き荒めども、尙ほ消し難きは眞信の一燈ならずや。そも何者の王者か能く

吾等の獨立を危うし得べき。吾れは是の覺悟を以て君と共に人生の歸趣に安住せむことを希ふものに御座候。

* * * * * *

近來鄰國の事、吾等の意に滿たざるもの甚だ多く、君にして若し此地にあらば、必ず吾等と同一の感を懷かるべしと存じ候。一々この不平を錄して君に送らむは煩はしけれども、筆に任せて其二三を書き列らぬべく候。

『何故に日本人は斯く少しの苦悶と煩惱とを有して優々たり得るや』。君の疑はれし此の疑問は、早晩日本人の自覺を喚び起すべき力を有し來るべしと存じ候。君が三月の開書は、ゆに警世の大文字にて候ひしが、此邦の人は如何ばかりその眞意を解せしか。或は文に悲哀の調あるを言ひ、或は語に慷慨の意あるを見て、輙ち皮相の評を下せるの外、その中に包含せられたる人生の宿疑に就て眞面目に顧慮せし人幾何ありや、覺束無し。今月の「太陽」に載せられる五月の分も、果して同一の運命に遇はざるべきや、懸念の至りに候。所詮は現代文明の苦痛を色讀し、その解脫の爲に中心の煩悶を經たるものに非ざるよりは、斯かる高調の文字は長

へに解せらるゝの期無かるべし。去りながら、眠れる人は何時かは醒めむ、迷へる人は何時かは悟らむ。天の靈光尙ほ此の國に空しからずむば、吾等の言葉に聽くことの晩かりしを悔ゆるの時機は早晩來らむ。吾等、君と共に誓らく野に叫ぶ人たらざるべからずと存じ候。

八月の「太陽」紙上に揭げたる君の開書に就ては、紙上にも一言妄批を加へ置き候如く、まことに近來の快論、感興不淺候。ショーペンハウエル、ニイチェ、ワグネル、三者の思想を同一系統の精神發達と觀ぜられたるは、恐らくは先人未言の卓見か。三子者若し靈あらば地下に微笑すべくと存じ候。誠に是れ現代文明の弊竇に對する靈界の光明とも見るべきもの、將た又人類精神の發展上必然の道程にも候歟。吾等幸ひにして人生の大疑に逢着してやうやく先聖の眞義に參ぜむとするもの、君の此の解說によりて得る所少からざるを覺ゆるは、こよなき仕合と存候。ワグネルの仔細は今方に研鑽の途上にあり、君と共に其の高調の遺韻を樂しむの日亦遠きに非ざるべき歟。

* * * * * *

日蓮上人に關しては、君と吾れと不幸にしてその觀る所を異にすれども、是れ唯、日蓮て

ふ一客體に就ての見解の差異にして、是の見解の由來する各自の精神に就て毫も乖離する所無きことは、君と吾れと先づ以て互に諒とすべき所と存じ候。君は自ら特に日蓮を研究した る事無しと言はるれども、今の世に日蓮を批難する如何なる識者の言も大體に於て君の說を出づること能はざるべし。實を言へば、是の疑は吾れ自らの胸中にも存する也。されど吾れは是の疑ひを解除すべき他の有力なる事情によりて、上人の人格を醇化し得たるを以て無上の喜びを感ずるものに候。好んで異を樹つるには非ざれども、君の疑問に就て少しく述ぶる所あるは、敢て君の意に反する事にもあらざるべくと存じ候。事體素より重大にして吾が信解の力に及ばざるもの多々あらむも知るべからず。他日もし其の謬りを悟り得ば、吾れにとりて此上の幸はあらざるべくと存じ候。

君が日蓮に對する批難の一つは、彼れが大乘有緣說によりて、謂はば國家主義の宗教を打立てむとしたりと云ふにあり。然しながら、こは一考を要すべしと存じ候。如何にも日蓮は東方有緣の小國を以て後々の五百歲に於て上行菩薩出現の國土なりとなし、妙法は是の國土を中心とし、一閻浮提に宣布せらるべしとの信念を有せしが、そは宗教を以て國家體制の一

具となし、若しくは國權結托を以て立教の基礎とせむとせし世に所謂國家的宗教と同一視すべきものに非ずと存じ候。是の事の仔細は、先頃本誌(第三卷に收む)に掲げし『日蓮上人と日本國』(樗牛全集)てふ拙論に略〻盡したりけに覺え候へば、君にも既に御領解の事と存じ候が、如何にや。吾れは、己れの信仰する所の眞理に無上の價値を置くことを以て宗教家の第一義と信じ、既に是の第一義を立てたる後、世上の一切の事物を此中に攝取するところに宗教其物の妙用は存すと思惟す。日蓮は是の點に於て吾が理想的宗教家に近きが如し。君の見る所如何にや。

君は又日蓮の折伏主義が主として排他的なりしを惜しみ、ニーチェの個人主義よりもワグネルの愛の福音を擇ぶと同一の理由によりて、多くの同情を日蓮の事業に寄する能はざる由を述べ給ひぬ。こも亦極めて自然の疑ひと存じ候。是の如く疑ふは獨り君のみならず、世上の識者、宗教家等の苟も日蓮に快からざる者のみならず、斯く言ふ吾れ自らにも亦此の疑ひ無きにしも非ざる也。想ふに愛とは意志融合の謂ひ也。精しく言へば自己の心の中に他の心を攝容し、若しくは自他互ひに相渾同するの謂ひ也。かく一切己れに異るものの存在をも認容

し、是れに臨むに無限の同情を以てするを以て愛の極致とするの意味に於て、日蓮の折伏主義に幾何の愛ありしや。斯かる意味に於ての愛の福音は彼れの教理に存せしや、否や。是は獨り君のみならず、吾れに於ても恥かしながら尚ほ未了の問題に御座候。一切法界を一心の中に觀ぜむとする佛教的唯心説、或は台家の所謂一念三千の無差別觀、若しくは妙宗獨造の知解と稱する現象卽實在の事觀の妙法——是等の教理は君の既に熟知し給ふ如く、平等差別の二諦を融合して吾等の實在に深遠なる意味を與ふる其の形式に於て頗る愛の極致に似たるものありと雖も、吾れの見る所によれば、そが關はるところは主として知解の範圍に存するに非ざる乎。愛の愛たる所以の意志の活動としての融合は、尚ほ此の境地に存せりや、否や。吾れ少しく惑ふ。是れを以て吾れはワグネルの愛は日蓮の教理にも存せしやと問へる君の疑ひを是認し、君と共に世上の日蓮學者に向つて其の解決を希望する者に候。

さりながら、實を云へば是の疑問は從來吾が日蓮崇拜の因緣に於て多くの重みを有せしものには非ざりき。吾れは唯、客觀的に見たる信仰、もしくは教理の實質を外にして、形式上より日蓮の人格に就て其の崇高偉大を讃歎せるに候ひき。玆に形式的と云ふは少しく語弊あ

るが如し。然しながら釋迦にまれ、基督にまれ、其の教理の悉く今日の學理的批判に勝ゆべしとは、恐らくは何人も思はざる所ならむ。取りも直さず、其の人格の崇拜は形式上に憑據するもの多きを知るに足るべし。是の意味に於て、吾が日蓮に對する崇拜を形式的なりと云ふに於て吾れは何の異存も無之候。這般の斷案少しく概括に失するが如し、或は他の誤解を招かむことを恐ると雖も、細説の追無きを如何にせむ。唯、君の判讀を希ふの外無之候。

是の如く述べ來りて尚ほ日蓮の爲に一事の君に言ふべきものあるを思ふ。そも〳〵日蓮の立場より見れば、其の嚴烈なる折伏は、廣大なる攝受の準備として、一種の慈悲の發表として見るべきものには非ざる乎。吾等の見る所によれば、個人としての日蓮は眞に慈悲深き人なりき。所謂柔情俠骨並び具はるとは眞に彼れに於て見る所の性格にて候ひき。去りながら既に天下の民衆に對し、妙法弘通の大導師として立ちたる彼は、妙法的理想に基きて是の民衆を改造せざるべからず。彼は釋尊に對する絶對的歸依の結果として法華爾前の諸宗門を邪教と斷じ、隨つて其の謗法を破撮するを以て濁世救護の第一事と爲しぬ。是に於てか其の事業の第一着手として嚴烈なる折伏の要を見る、所謂自然の勢には非ざるべき乎。折伏は攝受を

豫想してこそ始めて意味もあれ、攝受は卽ち慈悲の用に外ならず。卽ち日蓮の宗義よりして見れば、大なる折伏は大なる慈悲を待つて初めて現はれ得べきものには非ざる乎。彼れが涅槃經の文句に擬して、『一切衆生の異の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人の苦也』と謂ひ、又『二十八年の間他事なく南無妙法蓮華經の五字七字を日本國の一切衆生の口に入れむと勵むは、此れ卽ち慈母が赤子の口に乳を入れむと勵む慈悲也』と謂へるもの、斯くして初めて生命ある文字となり得べしと存じ候。君は是の間の消息を如何に解し給ふや。吾れは玆に佛敎に所謂慈悲と、基督敎などに謂ふ所の愛との間に概念の差別あることを忘れたるに非ずと雖も、日蓮に就て愛を言はむものは先づ是の慈悲を認むるの要あるべし。吾れは日蓮の折伏の蔭に大いなる慈悲ありしことを疑ふ能はず。彼れが其の生國の滅亡をまでも忍受して妙法の功德を民衆に强たむとしたるの衷情は、深く察すべきことと思ふ也。況や妙宗の敎義に逆化下種など云ふ妙用ありて、折伏によりて征服せられざるもの、尙ほ反抗の因緣によりて救濟の緖を得べしとなすが如き、其の說の如何は暫く措き、亦是の問題に關聯して一考すべき事と思ふは如何に。

日蓮上人に關しては言ふべきこと尙ほ甚だ多しと雖も、本書の主眼は君に鄕國の現狀を述ぶるに存するを以て、暫く詳細を他日に讓るべく候。

* * * * * * * *

本邦思想界の現狀に就て何事をか君に言ひ送るとせば、そは吾が不平を書き列ぬるに外ならざるべく候。されど、吾等の如き時代の畸形兒よりその不平を取り去らむは、取りも直さず其の言論を取り去るに等し。吾等は此の不平を逃ぶるに當りて最も尊大なるべきことと存じ候。

一言以て是れを掩へば、本邦の思想界は餘りに平氣に御座候。疑ふべきこと、怪しむべきこと、驚くべきこと、怖るべきこと、憂ふべきことの充ち滿てる此の時世に於て、彼等の餘りに晏如たるには呆るゝの外無く候。舊時代の遺物たる老朽學者に就て云々するは吾等の勝ゆる所に非ず(此の老朽學者の中に尙ほ壯年なるもの少からざるは君の知る所の如し)。新進の青年學者に就て見るも、是れ唯老廢者の年若き者たるの外、一も淸新の理想を抱いて時世の改造に心を苦しむるものあるを見ず。青年の祝福たる懷疑の味は、彼等の嘗試し及ばざる所。弱

冠、學に志してより證典死書に傾倒するの外、毫も活ける人生の疑惑に逢着するの機會を得ざりしを以て、三五年にして其の學を卒へたるもの、早く既に村學究となり、道學先生と化し了し、平板凡俗の倫理說などを振廻はして世上又疑惑なるものの存するを知らざるが如き爲するもの、比々皆然らざるは無し。あゝ君よ、昔者、須梨盤特は三箇年に十四字を記せざりしが尙ほ佛に成りぬ。提婆達多は六萬藏を誦じて而も無間に墮ちたるに非ずや。安住の一念を離れて天下の知識を集むるも、沙上に樓閣を城くに等し。彼等空茫にして自ら悟らず、偏へに知を外に求むるもの、吾等より見れば何ぼう無意味の事に候はずや。況してや自ら僧して人に敎ふるの愚を料らず、年三十にも滿たざるに早くも老先生の態を成して諄々乎たるに至りては、捧腹絕倒の限りと存じ候。

天皇神權說は今日に於ても尙ほ靑年法學者の頭腦を支配し居るは意外にも事實に御座候。祖先敎に基ける國體論は、國家主義と並びて、倫理學者の金科玉條たることも依然として故の如し。乾燥無味なるヘルバルト等の敎育學は、今日尙ほ敎育者の頭を苦しめ、年々地方村夫子により開催せらるゝ夏期講習會には、例によりて敎育倫理の少年學士多く聘せられ、敎

育社會の大問題は依然として公德養成法とか、言文一致とか、何々敎授二十五年勤續の祝賀會とか云ふ樣のものなること、是れ亦申すまでも無之候。宗敎は勸財と撰擧の道具に使用せらるゝの外、何の活動も無く、近くは本願寺の騷動の如き、毫も地方豪家の相續爭ひの私事に異らず候。新佛敎と云ふが如き運動は一時靑年僧侶の會同の外に何の意味もなく、新宗敎の論議は昨年來喧しかりしが、アウンバラバ、濱口熊嶽、乃至半僧坊、長生稻荷等の繁昌の外、敎界又何等の新現象を認めず候。一切斯界の事、眞に胸に惱みある者の眼より見れば馬牛相關せざる事のみ。要するに太平此上も無き事に御座候。

何れの邦に於ても革新の思潮は文藝の上に現はるゝを常とするは君の知らるゝ所也。此の邦に於ては然らず。文藝は徒らに凡俗なる現代を註釋し、讚美し、裝飾するの外、他事無ゆに見え候こそ、かへすゞ〳〵も無念の至りに候へ。人は輙ち口を開いてトルストイを稱し、ゴルキイを讚すれども、彼等を產するに至りたる迄の魯國が、現代文明に對して如何ばかりの苦悶と健鬪とを經由せしやを考ふるものあらざるなり。君よ、等しき者のみ等しき者を解し得べし。此の凡俗の社會に醞釀せられ、絕えて人生の疑惑に陷りしこと無き時勢の循兒に、爭

でか彼等を解し得べき精神的素養あるの謂はれあらむや。唯々標榜の新奇を喜び、漫然新思潮を口にするもの、そも〳〵何等の無意義にて候ぞや。されば褒むるもの貶するもの、畢竟一時の流行にして、やがては吹く風の何處をそれと跡も無く消え失せ候ひなむ。イブセンも然り、ニイチェも然り。吾れは彼等と共に是等の先哲を口にするに忍びざる也。ニイチェに就ては、君の書にも見えし如く、到底部門的學究先生輩の窺知を許さざるものありて存す。彼れを目して哲學者とし、倫論學者(理学)となし、乃至詩人、修辭家とするもの、既に人々相解する道の第一義を逸す。吾等は此の偉人の爲に知己少きことを悲しむの情に勝へず候。

嗚呼君よ、文明の苦痛は斯かる時世に於て最も深く感ぜらるゝものに非ざるか。今の思想界の煩瑣と平和と單調と凡俗とは、何時まで吾等を欺き、吾等の精神に安慰を與へ得べしとする歟。吾れは平和を持ち來せしに非ず、子をして親に離れしめ、妻をして夫と別れしめむが爲也と呼ばはり得るものの出でたるは、やがて斯かる時世には非ざりし乎。君よ、偉人の出づるまでは世は常に平和なるものぞかし、されどその平和は命なき無事也、毒酒に醉ひ倒れたるものの眠り也。吾れは目覺めたらむ時の苦惱を想ひて、一日も早く此の平和の破却せられむ

ことを望むの情に勝へず。眞の晴天は暴風の後に來るが如く、戰鬪を經ざる平和は眞の平和には非ざる也。

所詮は、人々自ら悟るの外無しと存じ候。自ら悟らむと欲せば、先づ自ら疑ふに若くは無し。個人は個人の存在を疑へ。其の何の爲に既に生き、又何の爲に將に生きむとするやに就て眞摯なる考察をめぐらせよ。是れ最も古き疑問にして又最も新しき必要也。社會も亦其の存立の根據を疑へ。殊に國家は其の憲法と法律と廣大なる版圖と强盛なる軍備とを擁して何の爲に存在するか、又存在せざるべからざるかを疑へ。個人も社會も國家も先づ其の天分に就て明白なる覺悟を有するに非ざるよりは、一切の行動すべて無意義に終らむのみ。畢竟デカールトの哲學の如く、吾等は先づ自己の存在に關する自覺を喚び起して玆に其の立脚の地盤を確めざるべからず。君よ、斯の如くにして世に多くの驚きと疑ひと苦しみと惱みとあらむ。唯是の驚き、疑ひ、苦しみ、惱みありてこそ初めて眞摯なる人生の解釋はあり得べし。君の所謂愛の福音も亦是の如くにして初めて宣傳し得む。兎も角も、吾れは吾が思想界の平氣を以て其の根本的病弊と思惟する也。君は如何に思ひ給ふや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

七月五日の君の御書は是の狀を認むる數日前に落手仕候。英皇不豫の事に關して大英國の前途を豫想せられたる仔細は、又あるまじく剴切痛快の御論と奉存候。ミセス・ベサントの印度帝國に就ての演說を假りて我邦にあらしめば如何。吾等は是の想像によりて一の大いなる教訓に接したるの感無き能はず。全帝國の空前絕後の誇りとする戴冠の鴻典を目して、無益なる觀世物と罵倒し、苟も國家の天職に對する明白なる自覺に基かざる一切の權勢と榮華とを無意義と貶して大帝國主義に心醉せる英國上下の人心を警撼するあたり、抑、何等の痛快ぞや。而して帝國主義の政府が此の如き言論の自由を容認するの雅量もさることながら、是の國民的虛榮心に對する大打擊に對して大喝采を酬ひたる國民に到りては、覺えず拍案三歎を禁じ得べからず候。げに君の言はるゝ如く、英帝國の大いなるは其の殷富に非ず、其の軍備に非ず、實に是の國民あるに依る也。君よ、試みに同一の事件を移して我邦に擬せば如何。

わけて興味あるは聖ポール寺院に於ける英皇平癒の祈禱に御座候。教會の祈禱が英國の社會に於て一種の儀禮以上に如何ばかり國民の眞信に接觸せるものなりやは、吾が審にせざる

所なりと雖も、君の報ぜられたるものの如きは、眞に吾等の見て偉大とする所也。日の沒せざる帝國の君主を、病に惱める汝の僕と稱し、彼れの重患は彼れの悔悟を强めむと言ひ、彼れをして其の殘生を汝の畏れと光榮とに捧げしめよと言ふが如き、是れ卽ち一切現世の虛榮を排無して靈界の威嚴と光明とに事へしむるの一大告救也。かゝる偉大なる信念に基きて立てられたる國家は幸なる哉。あゝ君よ、是れを以て君主神權の上に建てられたるルイ十四世的國家主義に較ぶれば如何。

嗚呼鄕國の事、傷心すべきもの何ぞ一に是の如く多きや。想ひやるだに心苦しき限りに候。神の物をも其の有となさずむば已まざるカイザルの國に於て、個人はたゞ一個の頭顱を有するの外に何等の價値をも認められざる也。是を以て吾れは思ふ、當代文明の革新は、社會の上下にゆき亘れる現世的國家主義の桎梏を打破するにあり。此の一關關にして通過せらるべくむば、自餘思想界の事、おのづから順風に帆かけて長江を下るの慨あるべくと存じ候。言囁嚅として意甚だ明ならず、たゞ〳〵御推讀を仰ぐの外無之候。

君よ、吾れの國家に就て爾かく言を爲すは、主として個人の爲に候。個人の精靈は無盡藏

也。釋迦出で、孔子出で、基督出で、ソクラテース、プラトー、ダンテ、沙翁、ゲーテ、奈破翁出で、バイロン、ニイチェ、日蓮出でたるも、個人は猶ほ依然たる無盡藏に御座候。此の無盡藏の開發する所に人生の精華あり、光榮あり。所謂人道とは是の開發の結果を中心として無限の繼續を歳時と方處に繫けたるものの謂に外ならずと存じ候。されば是の無盡藏の開發を障害する如き生活方法は、すべて人道の公敵としてその改造を期せざるべからず。是れ將た個人自衛の本務にして、同時に又當代の權利たらざるべからず。吾が先に人は自ら悟らざるべからずと曰ひしは卽ち是の事の謂に外ならざることは、君の旣に諒知せられたる所と存じ候。

* * * * * * * *

鎌倉に移り越し候てより、はや一年にも間近くなりぬ。東京へは去年の暮このかた一度も行かず、人にも世にも日に疎く相成申候。此地も思ひの外の俗地にて、吾等が如きものの永く住まるべき處にてもあらぬにや、此頃は駿河灣清見潟の風光寤寐の間に往來致し、曾遊の感興今更の如く想ひ出され申候。何れ是の秋頃には、かの地の客となるべきかと懸念致し居

り候ひぬ。病にかゝりてより口に酒盃を接けず、眼に美色を絶ちて、此世さながら禪房の中に等し。あゝ人生酒を絶つて何によりてか行樂せむ。吾れ曾つて君に言ひ送りぬ、君還り來まさば願くは一夕清見潟の海樓に痛飲し、其夜滿腔の血一斗を吐いて死なむと。君よ、此語矯に似て矯に非ず、吾れは時として眞に是の如く思ふことある也。過ぐる頃、臨風、宇都宮より三葉の新紙を送り越し候ひしが、開き見れば令弟潔君が主筆たる松陽新報にして、中に君が潔君に與へたる私信を掲載しありき。吾れは君が其の私信を讀みて一種の感愴に打たるゝを禁じ能はざりき。君は其書の末に吾が事に言ひ及び、かの清見潟に快飲して滿腔の血一斗云々の吾が言葉を引きて、『嗚呼是れ病に苦しめる憐れむべき我友の聲ぞかし。予は是の友の顏を或は此世に於て再び見得ざるべきかと思へば、斷腸の思に勝へず』と書き給へりき。あゝ我友よ、君も爾か思ひ給ふか、今日まで君に明らさまに言ひしことは無けれども、吾れも亦是の如く思ふて日夕憂苦しつゝありし也。唯、幸にして、病尙ほ太だ重からず、力めて生を養ひ神を勵まさば、尙ほ殘生の君と共に樂しむべきものあらむか。唯、且暮藥餌に親しみて、坐臥すべて意の如くならず。是の如くにしてよしや百歳の壽を保つとも、佳人一夕の歡會に價せ

好既に御聞き及びも候半か、吾等の文科大學にては、此度史學科の外國教師リース博士を解雇致され候。聞く所によれば、同科には自今外國教師を雇ひ入れざる方針の由にて、リース博士の補充としては先づ以て箕作元八君教授となられ候。史學科の講座、眞に外國教師を要せざるに至りたらむには、本邦史學の一進歩として慶すべき事なれども、こは吾等の少しく危疑する所に御座候。吾等は素より坪井、箕作諸君の學識を疑ふものには非ざれども、博聞强記なるリース博士の缺在を補充して遺憾なきを得べきや否やは、聊か懸念せざるを得ず。言ふまでもなく、西洋歴史の事たる、其の史料に關し、國語に關し、又其の人情風俗習慣等に關しては、漫りに本邦人の通達を容さざるものあるや論無し。本邦學士が屢に三五年の留學によりて此等の困難を除却し得べしとは吾等の決して思惟し能はざる所に御座候。文科大學史學科は果してかゝる事情に打勝ちてまで自今外國教師を要せざる迄に進歩し居るや。返へす返へすも疑惑に堪へず候。不幸にして吾等の疑惑にして正當の理由を有せむ乎、本邦史學の盛衰に關する由々しき大事と存じ候。賢明なる學長并に當事者は、かゝる單純なる遺算無かるべきは吾等の萬々信ぜむと欲する所なれども、疑惑は遂に疑惑たるを免れず。君は如何に思

ざるを念ふと雖も、尙ほ且つ此の生の戀々として捨て難きものあるを覺ゆるぞ是非も無き。君よ、弱きはけに人の心なりき。

忘れもせず、三年以前の八月二十二日のことなりき。君と臨風と吾れと、船を同じうして遊びくらしゝ扇が浦の一夜をば、君は如何に憶ひ起し給ふぞや。あゝ是の三たりの友の相會して斯かる遊びを再びすることは、此の世にて望み得べき事なるか。今や臨風野州に下りて、吾れは湘南に客となりぬ。彼は身世の匆劇に處して悠遊の暇を得難く、吾れは病軀を擁して遠く動き難し。たま〳〵來り訪ねらるゝも座に酒盃なく席に佳人無し。あゝ吾れ何によりてか是の磊塊を放蕩せむ。來らむ年の秋には君歸り來まさむも、かゝる歡會の再びし難く、往時の忘れがたきを想へば、轉た人生遭逢のはかなきを傷まずむばあらざる也。あゝ君よ、笑ひ給ふ勿れ、弱きはけに人の心にて候ぞかし。

* * * * * *

斯かるよしなき繰言を書き列ねむは限りなき業なるべければ、終りに學界知人に就て思ひ寄り候事共五六を錄して此の趣味なき長き手紙を了るべく候。

ひ給ふや。

吾等更に思ふに、史學科にして若し外國教師を要せずとせば、哲學科の如き無論同一の措置に出づるを可とすべきに非ざるか。哲學科に外國教師を要するは、主として哲學史の講義の爲なること勿論也。何故に哲學史の講義が外國教師に待たざるべからざるかの理由は、取りも直さず何故に西洋史の講義が外國教師の力に依らざるべからざるかの理由に御座候。精しく言へば、其の史料、語學等の點に關して本邦人の容易に得難き便宜をば、彼等外國教師は有すとの理由に外ならずと存じ候。況や哲學史は思想の發達に關する思索なるを以て、考察思辨の力に待つ所多し。是れを西洋歴史が客觀的事實に關する所の多大なるに比すれば、本邦人の是れを學得すること遙に容易なるものあるべし。されば若し文科大學の方針が漸次外國教師を除去するにあらば、次には必ず哲學科教師の解傭を見るべきことと存じ候。君は是の邊の利害を如何に觀給ふや。

本年度留學生三十餘名は例によりて發表せられ候。是の事に就きて注意すべきは、從來學校を出たばかりの新學士の少からざりしに反して、今回は概ね既に各官立學校の職員となり

居れる故參の顔觸なること、從來文科方面にては哲學關係の留學生尤も多かりしに、今回は一名も無きこと。或は從來極めて例少かりし史學科の留學生三名までも出だしたること等に可有之候。新聞紙は是の撰拔に關して情實多かりし由を報ずれども、如何にや。唯、吾等の心附ける二三の遺憾を言はば、高等師範學校より上田敏君を出ださざりしこと、若しくは文科大學より内田銀藏君を送らざりし事等に候。上田君の詞藻は餘り感服せざれども、其の語學のタレントは當代稀有と稱すべきもの、恐らくは英文學科の出身者中、君の右に出づるもの無かるべしと思ふは決して吾等が私見のみにはあらざるべし。同君の奉職せる高等師範學校にして若し英語研究の爲に一名の留學生を撰拔せむと欲せば、無論同君を推すべきに、餘り名聲なき某氏の是れに代りたるが如きは、頗る遺憾と謂はざるを得ず。内田君は留學の撰には入りたれども、そは歸朝後廣島高等師範學校の教授たるべき約束の下に於てなりと聞く。是れ亦吾等の、恐らくは君も亦遺憾とする所なるべし。其の學風に於て、其の學殖に於て、將た又學者たるの品性に於て、内田君の如き人、當今幾人ありや。同君の如きは實に將來の大學教授として殆ど模範的人物と謂ふも不可なし。文科大學は氏の如き才を收容せずして、抑、

何人を收容せむとするや。屢に中等教員の養成所たるに過ぎざる高等師範學校の如きは、到底、氏の驥足を伸ばし得べき地に非ず。吾れは是の事に就ても、例の忌はしき情實談を耳にしたれども、筆にするだに厭はしきことなれば省きぬ。要するに、留學生の人才鑑識に就て、イマ一層の用意を當事者に望むは、決して不當の要求に非ざるべしと存じ候。

丁酉倫理會に對しては、近來多くの興味を有たざれば、其の近況も亦おのづから審かならず候。曾つて中島、桑木、二君の提論の下にニイチェの研究ありし由は聞きたれども、其の所謂研究の如何なるものなりしかは聞知し及ばず。畢竟かゝる問題は部門的學究先生に鹽梅せられむには、餘りに多くの非學究的分子ありたるべきを蔭ながら懸念罷り在り候ひき。哲學雜誌廣告によれば、ザラトストラ如是說と道德發生論とに基づきたる桑木君の一著述あり、題してニイチェの倫理說と稱する由。あゝ吾等の關はるところは說に非ずして人也。桑木君何ぞ其の所謂倫理說より一歩乃至百歩を進めてニイチェ其人を解說することを爲さざるや。そも〳〵ニイチェに學說なるものありしや否やは暫く措き、此の誤解せられたる偉人に對して戲侮の意を表せしむるの道、唯、其の人物に對して深厚なる同情を寄せしむるの外無之と存じ候。ゆに君の言はれし如く、愛は理解せしむ。唯、此れ是の道、人々相解するの道と存じ候。

去冬以來、芥舟、臨風、竹風、醒雪、諸子と兩三回相會せし外、殆ど絕えて先輩知友に面せず。當地にありては時々田中智學氏と來往するの外、山に面して書を讀み、海に臨みて嘯くの外他事なく候。是の如くにして朝々又暮々、徒らに歲時の水の如く流るゝを送るのみ。近來久しく新書に接せず、心少しく飢えたるの感あり。あゝ吾等は何時まで讀書子たらざるべからざる乎。歎嗟の至りに御座候。

* * * * * *

書き送りたき事は何時迄書きたりとて盡き間敷候まゝ、惜しき筆を茲に擱き申候。今朝、君が七月十八日夜の書翰一通と美術雜誌二册并に大英新百科全書一册とを受取りぬ。御苦心の段々伺もながら謝するに辭無し。書中『街頭の樂手』の一篇、感興淺からず讀過候ひしが、末段の一節、特に吾が情を動かし候。

嗚呼世に棄てられて世を怨まず、人に顧みられずして人に背かず、一箇の風琴に命を托

せるかの老樂手。彼れが前身の何なりしかは我れ之を知らず、彼れに罪過ありしとするも、我れはそをさばく判官とならじ。又彼れの現在が如何に窮困なるも、我れは必ずしもそを悲しまじ。彼れの風琴より出づる哀れの音律は、凡ての懺悔よりも力あり。彼れが命を知り天を樂しめる自得は總ての富貴榮華よりも固く且つ貴し。

吾が言はむと欲する所、亦是の外に出でじ。乃ち君が此の文を錄して是の書を結び申候。今夕此時、君も或は其の故郷の病友を想ふこともあらむか。吾れは此の書によりて遙に君の健康を祈りて靜に病の床に就かむ。あゝ夢よ、吾等が此世に於ける最終の隱れ家よ。此の夜の眠に幸あらしめよ。

（明治三十四八月十九日夜、鎌倉長谷にて）

郷里の弟を戒むる書

歳も暮になりて、寂莫の夜半に物思ふべき時とはなりぬ。先頃の御書、脩學讀書に關するくさ〴〵の御尋ねは眞に學徒肝心の用意、及ばずながら愚見左に申し述ぶべく候。

今の學校の敎へむほどの學科は人並みに習ひ覺えらるべく候へども、さりとて餘りに執着に過ぎむは無益の業たるべし。今の敎育は多數の學生に行きわたり、彼此人我の差別なく平等の敎化を旨とす。譬へば松、杉、牡丹、水仙なんどの四季さま〴〵の草木を一壇坫の上に培養して、一樣平等の發達ならせむとするにも似たり。彼れに好きもの必ずしも此れに適せず、此れに合ふ者必ずしも彼れに相應はず。善し心無き園守ならましかば、高きは挿えられ卑きは引き上げられ、曲れるは矯められ、ゆがめるは斷ち切られなむ。草木おの〳〵其性によりて其の處を得むこと中々に難かり。今の敎育を其の弊ある側より見れば、まさしく是の譬例にも似たるべく候。抹香も燒かず屁もひらざる凡人となりて不足なからむ人々は、斯く

てもこそ甘むずべけれ、一定男子の眞骨頂ありて我れと思はむ人々は、是の際頭脱飛躍の覺悟こそ肝要なるべく候。

けに今の教育は器を作りて人を作らず、人に使はるべき小才を作りて人を作るべき大器量を作らず。是れ將たよく〳〵思案あるべく候。近くは世上幾千幾萬の人の頭となりて大事業に當れる人々を御覽あるべし。才學人に優れたる例としては甚だ少く候ぞ。所詮は其人物の浩量有德なるに歸すべく候。今の教育に人となりて中學より進みて高等學校、大學を卒業し、其學秀でて、外國にまで留學せる學者先生達は其數少からざれども、多くはたゞ〳〵學者也、技術家也。乞食も一朝金を拾へば富者となり得ると一般、要は學術を拾ひ得たる人と言ふまでにて候。京童が活字引、活書籍などと申すは是なり。たま〳〵學を修め術を覺え得たる者の斯くて果てむは人として口惜しかるまじかるべきや。古來大人物と稱せらるゝ人の例しにも考へてよく〳〵勘考あるべく候。

されば立身の第一義は人物修養の一事に歸着すべきか。是の大歸着の標點あり、是の大安立の地盤ありてこそ其の學術事業も眞生命、眞活動を得たりと申すべけれ。この本末を顚倒し

て、たゞ〳〵才學技巧の巷に走らむは、若き時は知らず、年老い心靜まりての後悔及ぶまじく候。今の教育家、學者等の小慧しげなる理窟などは餘り心に留めず、自覺の鎧を著て安心の旗を指し上げ、勇猛不退轉の利劍を提て一向顧聘することなく、身神一期の軍に向はるべく候。けに〴〵觀心の一法によりては現世の萬事折伏の軍に外ならず。人物修養の一大事畢竟自我滿足の要蹄たるべく候。

人物の鍛錬は行住坐臥、一念時も忘ずることあるべからず候へども、分けて古人の傳記など甘讀熱量せんこと最も肝心と存じ候。吾等の生息する今日は過去無量劫に比すれば泡沫夢幻の短日月也。是の短日月に於て吾等人々の接觸し交通し得る人とては其數とても限りあること也。是の短日月の限りある人の中には幾何の英雄豪傑あるか知らざれども、是を過去萬邦の數千年の歷史に現はれたる偉人大人物に數ふれば、けに九牛の一毛とや言はむ。されば活ける人の中にて師とすべきあらば素より仰で師とすべし。されど吾等の龜鑑と崇め、理想と尊ぶ人は過去にあることと覺悟あるべく候。過去の人は言はず語らず、寂寞として古蹟の中に永眠せりと雖も、其の遺蹟は日月の如く明らかに、今も昔の如く世界の上に照臨せり。仰

で師とすべく、撈て友とすべし。彼れ物言はざれども、其の默契會通の三昧こそは、まさしく異身同體の親みよりも貴く、彼れ手を握らざれども、其の默契會通の三昧こそは、まさしく異身同體の親みありと謂ふべけれ。書を讀み道を求めむもの、這個の三昧に入らずむば、是れ寶の山に入りて手を空しくして歸らむにも似たるべく候。吾等が人物の修養實に是の間に於ておのづから健孚感應の不可思議を現ずべし。

けに人物の感化は不可思議の一事緣に候。當世の道學先生、教育家先生は、言說法度によりて道德は事成し遂げられ得べけむ樣の考にても候や、一切事皆道德道德と責め附け候へども、斯樣の方法は、狐憑をば棍棒にて畜生々々と叩くと一般、根氣沮喪、其人精神的に死滅せざれば已まざるべく候。所詮德育の事は其人にありて其法にあらず、生付き書生上りの學士先生などの關知せざる事也。よく〳〵是の事を御思案あらば、吾等の宗師先達を古人に求むるの已みがたきこと、更に明らかなるべく候。

更に是の義を強く申すべし、日月天に懸らずば人は行くべき道も分からず、暗中に迷ふべし。若し吾等の心に其理想と尊び、光明と仰ぎ、人物修養の大眼目と信奉すべき大人物なく

ば、是れ天に日月無きと均しく吾等の心暗黑中に迷へるものと謂ふべし。吾等は押しきつて問ひ申すべし。今の世に其の心の暗黑中に迷はざるもの幾人ありや。或は利に餓ゑ、或は智に渴へ、營々として世を夢の如くに暮らす人も、若し中夜心を沈めて、我れの事業に何の理想ありや、我れの未來に何の光明ありや、我れの人物に何の標的ありや、我れに面して笑ふもの幾百千人あるも、眞に我が心を會通融和せる心は世に果して是れありやと自ら問はば如何。誰か其身のさながら暗中廣野に彷徨せる天涯萬里の孤客にも等しきことを感ぜざるべき。あはれ心細きは決して人の上には候ふまじ。吾れ人亦心を沈めてよく〳〵思案すべきにて候。人生一期の大事、是に過ぎざるべく候。

兎角は言抽象に馳せ、會通の程も如何と存じ候へども、思ふこと憚りなく申し陳じ候。今の學者、教育者の多くは、決して其實御身等の眼に或は映ぜむ程のえらき人々には是れ無く候。其の博く物識れる點をこそ吾師とも賴み申すべけれ、人物修養の一大事に臨みては觀心自得の工夫の外他に道無きことと先づは心得らるべくや。世に知識と申すものは無量無邊、幾百代の生を累ね、幾千劫の世を數ふるとも盡くし得られまじく候。生れつきての好みなら

ば是非もなく候へども、益もなき事を究め盡さむとて再びは受け難き人身を消耗し去らむは、いよ〳〵心無き業なるべし。所詮は吾が安心を堅め、吾が人物を磨き、當來二世を通じて如說修行の人たらむの大願に資するに非ざるよりは、一切の道教學智すべて無用と觀ぜらるべく候。學問の眞工夫、是の外に出でざるべくと信じ申候。委細の旨は重ねて申すべし。あなかしこ、此の書輕々しく御覽あるまじく候。

（明治三十四年十二月）

猶多放言

（ニイチェ自らの言を假りて）

一

吾れ初めて此世に來りし時、人皆古き迷の上に坐しき。彼等皆自ら世の善きと惡きとを辨へ知れりと謂へり。

道義に關はれるあらゆる教へは永世の法度として崇められぬ。斯くて善く眠らむと欲する人は、枕に就く前に常に善と惡とを語らへり。

是の眠をば吾こそ妨げたれ。吾れ訓へて曰く、身自ら創造者に非ざるよりは、誰か好く善と惡とを辨へむやと。

人生の目的を造り、此世に意義と未來とを與ふるもの、彼をこそ創造者とは名くるなれ。物の善きと惡きとの事實を造らむものは、唯彼にして能くせむのみ。

二

『盗む勿れ』。『殺す勿れ』。是の如き語も曾て神聖と呼ばれたりき。其の前には人々膝と頭とを屈め、其の靴を脱ぎ去れり。

されど吾れ汝に問はむ、かゝる神聖なる語よりも優れる偸盗と人殺とは世に果して是れありしや。此世到る處に行はるゝ盗と殺とに非ずや。かゝる語を神聖と呼べる彼等こそは眞理其物を殺害せざりしか。

三

吾は猛き者を愛す。されど劍を執るものは、先づそを用ふべき敵の何物なるかを知らざるべからず。

汝の敵は憎むべきものたれ、卑むべきものたらざれ。汝は汝の敵に就ても誇る所無かるべからず。

四

噫我同胞よ、此人生の未來にとりて危險の最も大いなるを何物とか爲す。そは善き人、正しき人には非ざる乎。

故如何に。彼等自ら思ひ且つ人に向て言へばなり、『我等既に暴と正とを知り、加ふるに自ら是を身に有てり。憐れむべし未だそを得ざる人よ』と。

惡しき者の如何なる害を爲せばとて、善き人の害の甚しきに及ぶべくもあらず。

噫、我同胞よ。曾て人あり、善き人、正しき人の胸に指さして、僞はる者よと呼びたりき。されど彼れの語は解せられざりき。

善き人と正しき人とは彼れの語を解することを許されざりき。彼等の心は其の良心の中に拘禁せられければ也。

されど這は眞理也。僞る者は善からざるを得ず。彼等には他に擇ぶべき道無き也。

（明治三十五年一月）

吾が好む文章

○是と曰ふに非ず、非と曰ふにも非ず、たゞ吾が好むところと曰ふに於て聊か仔細あるまじき也。吾れは奥州の陲に人となりて、都人のみやびたる心など露もたざる男なれば、意誠語朴の外に文章の美を解せむこと思ひもよらず。大かたは世の物笑ひとなるに過ぎざらめども、數多き讀者の中には、げにもと首肯かるゝ人無きにしも非ざるべきを頼みにかくなむ。

○我邦にて名文と云へば、先づ指を源氏物語に屈するが常也。されど吾れは源氏を好まず、却てそを古今の大悪文の一つに數へたく思ふ也。かく曰はば國文家は冷笑ふて言はむ、源氏の悪しきには非ず、汝の解し得ざるが悪しき也と。げにさもありなむ。有體に曰へば、吾れは是れまで源氏を讀まざれば國文を語り難しなむどと訓へられて、其を手にせしこと幾回なるを知らず。されど何時も半ばにも及ばざるに根疲れ氣倦みて卷を捨てざること無かりき。所詮は世を隔てたる其の文體のいかにも解し難ぬるのみならず、たま〳〵訓釋義疏の助けによりて覺束なくたどり行くも、苦しみのみありて面白味とては更に無し。ところ〴〵には流石に捨てがたき妙文字無きにしも非ざれども、砂の中より黄金を拾ふの勞にも似て氣懶し。吾れはかくて源氏にはとても機根の無きものと吾身を諦らめ、爾來はたゞ吾が專攻の事柄に關する折にのみ已むなく史料として手に執ることとせり。吾れは、國文家は定めて難じ給はむ如く、げに源氏を解し得ずしてそを大悪文と罵る者なりけり。

○されど源氏を解し得ざるが故にそを大悪文と罵るは、吾れにとりては正當の判斷なりと思はるゝは如何に。吾れは世界の凡ての人が一同に源氏を名文〳〵と讃頌するとも、吾が中心に於て爾か感ぜざる限りは獨り悪文〳〵と罵詈すべし。解せざるは汝の罪なりと曰はば曰へ、解せられざるは源氏の罪也と吾れは答へむ。讀者は吾が言を理不盡なりとばし一概に思ひ給はで、つちつら自ら省みて其の是非を己が心に尋ねらるべし。

○源氏の文はまことに優しき、麗はしきみやびたる文なるべし。されど其の響はわが胸に應へざる也。五十四帖みな戯れの文には非ざるべきに、そを讀みて吾が眼に涙ありしことなし。書き錄るせることの中には誠に人生の悲慘を極めたるものもあれど、隆能が繪物を見た

らむ樣に、たゞ恍として夢中の觀にふけりたらむに似たり。げに解し難ねたる爲なるべし。されど吾れは疑ふ、世にそを解し得たる人幾何かあるべき。吾れまことにそを疑ふ也。

○言奇語麗を以て取らば知らず、吾が見て名文とする所は、吾が精靈に響きあるものの謂也。吾が人格に活ける衝動を與へ得るものの謂也。其の血と淚と生命とが、やがて吾が血と淚と生命となり得るものの謂也。區々たる聲調排列の巧拙の如きは、所謂文人者流の遊戯三昧のみ、吾が好む所は則ち與からず。

○今の文士、殊に青年文士の一輩が好で擬古の文體を弄び、冗漫纖弱なる王朝の詞藻を列ね、以て優雅を誇るものの如きは、尙ほいまだ戯文三昧の境にあるもの、文章の眞趣味とすること頗る遠しと謂ふべし。

○榮華物語、三鏡の如きも吾が好む所に非ず。國文として見れば、その惡文たることに於て源氏と伯仲の間にあり。昔物語、古今著聞集等の文章は是等に較ぶれば力もあり、情もあり、吾等には解りやすくして面白し。

○所詮は王朝の文字は吾等野人の卑しき機根には不相應なる上品高位のものなるらし。鎌

倉の武士時代に降りては、流石は吾等の趣味に近き文章も出でにき。

○先づ吾が好めるは保元物語也。平家の樣には潤飾無けれども、文意誠實にして語調亦雄壯也。白河殿夜討の前後の條など際立つて面白し。平治物語も同作者の筆かとも思はるれども、前のに較ぶればやゝ見劣りせらるゝ樣也。

○平家物語の妙文は言ふまでも無し。祇園精舍より六道の卷まで一篇ことゞく無韻の詩、時代が時代だけに筆も躍り墨も湧きたるらし。文情双至とは正に此物語を評し盡せり。俊寛の條、重盛諫言の條、都落の條なむど心ゆくばかり也。吾が常に愛づるは、中にも維盛都落の條也。弓にて簾をさつと搔い上げてのあたりは、幾度讀みても飽かず面白し。源平盛衰記は、事は繁けれども文は劣れり。平家には文に過ぎたる所もあれども、またさらでは到り難くぞ覺ゆる妙もあり。但し人の熟く知れる事なればことゞくしく言ふまで無からむか。

○太平記も吾が愛讀書の一つ也。名文章の限り無く多き中にも、わけて笠置夜攻の條に、振鈴の響きのあたり、或は坂本の戰の條など絶妙の文辭と謂ふべし。

○總じて鎌倉時代の文學には、吾等の趣味に適へる文字いと多し。王朝の如く古からずし

て而も朴古なる所あり、江戸時代の如く新しからずして而も清新なる所あり。音近くして解し易く、意切にして情應ふべし。調に緩急の自在ありて、氣勢の抑揚また意のまゝ也。讀むべく語るべし。若し文範を古代に求めば、吾れは夫れ鎌倉時代を取らむか。

○此時代の物語に、右に擧げたる外尙ほ義經記、曾我、鳴門中將、秋夜長物語等あれども、まづは平家と太平記とを推すべし。其の他、鴨の長明に方丈記、四季物語などあり、西行法師に撰集抄あり。或は十六夜日記、東關紀行の如き、降りては兼好法師の徒然草等もあり。是等は世の人十中の七八は誰も知り且つ讀める所なるが、玆に前揭の諸書に露劣るまじき、或點に於ては空前絕後とも云ふべき特色を有する一大文學、この時代に現はれたることを百中の九十九人までは絕えて心附かざるらし。日蓮上人の文章是れ也。

○上人の文章は加茂眞淵が嘗て徒然草にも優れりと評せるを外にして、他の國學者等の注意せざる所なりき。平田(篤胤)は上人の遺文の一部を讀みたるに相違なけれども、日蓮は傳敎の蟲食ひなどと罵倒せる外に、文章に就て一言だも言はず。近年日本文學史の著述は一二にして足らざれども、三上、高津、兩氏の著を初めとして上人の名をだに揭げざるが多し。坊主の

書ける物なれば讀まずと云ひて國文學者の中譯は立つべきや。鎌倉時代隨一の大文學を念頭にかけざりしは、國學者因襲の僻見に本づけりとは謂ひながら、不覺も甚しと謂ふべし。

○上人素より文章家ならず、上人の文章などと云ひ立てむは其の人の志に背ける業ならめど、而も大文章たるの事實は默すべくもあらず。げに〳〵上人が文章家ならぬ事實こそは、まさしく其の大文章家たるの因緣ともなりしならめ。

○上人の文章は文字章句の排列と謂はむよりは、寧ろ肝膽を活きながら白紙の上に塗りつけたるものと謂はむかた妥當なるべし。所謂文章家の眼より見れば字句整はず、文辭粗厲なるものも多かるべし。されど其が人の心を動かすの一段に及びては、天下の文章何物か是れに及ぶべき。上人の文は文に非ずして精神也。人は文字を見ずして血涙の痕を見、章句を讀まずして師子吼の響を聞く。斯くても文章の極意は達せらるれ、人は何が故に巧ならむとは力むるぞ。げに文は人なりけり。吾れは玆に上人の文を論ずるには非ざれども、序なれば思ひつける二三節を左に記して今の學生諸君に研究の枝折を予ふべし。

○『佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、天台、南岳、妙樂、傳

教等だにも未だ弘め給はざる法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の初に一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先がけしたり。若驚共二陣三陣つゞいて、迦葉、阿難にも勝れ、天台、傳教にも越えよかし。僅の小島の主等が威さむに恐れては、閻魔王の責をば如何にすべき。佛の御使と名乘りながら、臆せむことは無下の人々也。』

◎這は種々御振舞御書の首めに、鎌倉殿の迫害を慮りて、弟子檀那を誡めし文字也。凡そ本邦古今の文章中、雄大崇厳に於て是の一段を較ぶべきものありや、覺束無し。其の觀念の偉大なる、其の文詞の悲壯なる、朗讀一下すれば肉搖き骨鳴るの思ひあらずや。僅の小島の主等が威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき、佛の御使と名乘りながら臆せむことは無下の人々也と結びたる如き、一字一句金輪際より生ひ立てるが如し。日本文もて是れ以上の力ある文章を書かむは神業ならではあり得べしとも思はれず。

◎高祖遺文錄三十卷の中にて、吾が最も愛讀するは種々御振舞御書、如說修行鈔、開目鈔、撰時鈔、佐渡御書、光日房御書、教行證鈔、報恩鈔、身延山御書、成佛用心鈔、生死一大事血脉鈔、頼基陳情書、波木井殿御書等也。觀心本尊鈔は教相上本化妙宗の祕鑰として崇めらるる一大文字なれども、理義深邃にして今の吾れには尚ほ未だ解し難ぬるふしあるを恨みとす。其他の御書、就中消息文は上人の事蹟と對照して何れも何れも興會盡し難し。

◎學識宏遠なる上人の物し給へる文なれば、言々典據ありて、無學なる吾等には會通の程頗る易からず、大かたは盲人の巨象を探るにも似たらめども、流石に人の心の誠は高きも卑きも變りなければにや、言ひまらず首肯かるゝふしも少からぬぞ有り難き。中にも本誌の讀者諸君に薦むるは、種々御振舞御書也。此書は龍の口の法難を中心として、文應の初めより身延山の幽棲に到るまでの上人一代の事蹟を自叙せられたるものにして、文解し易く、歴史上の趣味さへいと饒し。吾が前號に掲げたる況後錄は、拙惡言ふに足らざれども、この御書に擬して作れるなりき。

◎法論の大文字としては開目鈔を推すべし。此書は、喩へば大瀑布の天より落つるが如く、始より終まで段落なく、章節なく、上下兩卷を通じて一氣にして成れり。凡そ論難の文章として、かばかり雄渾を極めたるは吾が未だ曾て見ざる所也。殊に冷靜なる理論を叙說のみに非ずして、紙背に燃ゆるが如き熱情を藏す。談理に托せる一大抒情文とも見るべし。『詮ずる

所は天も棄てよ』より、かの三大誓願を以て結べるあたりなど、音韻錯落の間に天來の師子吼を聞くべし。貴しとも貴し。

○如說修行鈔は、法華折伏の宣戰狀とも見るべき文にして、詞急にして意迫れり。節を拍て是れを誦すれば、骨肉飛動の感あり。無上の權威を有てる者の言は自から是の如くなるべし。教行信鈔は其の弟子日進に與へて法門論難の覺悟を示せるもの、如說修行鈔と並びて雄壯比ひなし。『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず。彼れ〴〵の經々と法華經と、勝劣、淺深、成佛、不成佛を判ぜむ時、爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず、何に況や夫れ以下の等覺の菩薩をや。まして權宗の者どもをや』と云ふが如きは、日本文學中に他に比倫を見ざる文字ならずや。

○撰時鈔は佛法東流の次第より、末法弘通の因緣を明にして、歷史上より上人の地位を說けるもの、辭意暢達にして文理明晰なり。佐渡以後の御書中にては上人の最も意を籠められしものの一つなるべし。報恩鈔も亦開目、撰時の二鈔と並び稱せらるゝ大文字にして、語簡にして意深し。彼の半段は舊師道善房に對する報謝の情を述べられたるものにして恩愛の情盡せり。

身延山御書は上人晩年の心境を叙せられたるもの、『誠に身延山の栖は千早ふる神も惠みを垂れ、天下りましますらむ』の書き落しより、鷲の山風の御歌に終るまで、まことに神々しき大文字にして、上人の偉大なる人格はおのづからその間に磅礴せり。もとより長明、兼好なむどの小人生觀に較ぶべくもあらず。正に是れ人生自然を併せて宗教の光に醇化したるもの。波木井殿御書は上人最後の消息文にして、六十年の大なる生涯を追懷するに足るもの也。

○上人の文を論ずる、おのづから別種の用意を要す。玆にはたゞ本誌の讀者の爲に數言の注意を記せるのみ。鎌倉の時代には僧侶の手に成れる文字尠からず。淨土には源空、眞宗には親鸞あり、彼の撰擇集、此の教行信證、共に見るべき文字也。禪尾の明惠が法然に對する摧邪輪などもあり。其の他華嚴には凝然、天台には慈鎭ありて、何れも著書少からず。日蓮上人の御書が是等の間にありて嶄然として他の卽接を許さざるは、猶ほ泰山の群峯に雄枕するが如し。人物の眞價値のおのづから文字に現はるゝや、是の如きものあるを見るべし。

○吾れは歷史上の順序を追ふて吾が好める文章を列擧する考なりしが、計らずも日蓮上人に引きかゝりて多くの紙數を費したれば、今は先づ是れにて筆を擱くべし。（明治卅五年二月）

文は人也

◉今の文章の多くは僞文のみ。意誠語朴の眞に人を動かすもの極めて稀也。詩人キーツ言あり、曰く、己れの脈博の上に試みられたるに非ざれば、公理も公理と稱するを得ずと。嗚呼、戀愛と云ひ、希望と云ひ、慰藉と云ふ、何れも人生の最大事實也。自らの血と涙とを以て是れを解釋したる人にして、初めて是れを口にするを得む。

◉文字は符號のみ、そを註解するものは作者自らの生活ならざるべからず。文は是に至りて畢竟人也、命也、人生也。

◉人の產み得るものは唯己れの子のみ。あゝ今の時、畫工塑人の類にして詩人と稱し、文學者と號する者、何ぞ一に多きや。

（明治三十五年四月。無題錄）

斷片

人と愛情

○人を獸にすといふや、人は最も獰惡なる獸なり。when gazing at tragedies, bullfights and crucifications he hath felt happier than at any time on earth.

○凡人が永遠に歷史に反復されたれば如何、——吾人は人を憎まず、人に飽きたり。not man-hater, but man-satiated!

○愛情無き男女の一對となりて生活するは、是れ何の意義ありや、吾人にとりては *Fairness is a great thing!*

疑問

一、道德は價値なり、然れども價値は道德のみに限らず、……吾人の最人の最大の幸福は最大なる

價値の存する所に存す―― 好 ――心中、事實は最終の證明なり、? 他人の爲にせよと云ふと雖も之れ意識上の問題也。

二、價値は價値を製造する者の專有物也、――價値なき所に道德なし、――卽ち道德は道德を造ることの出來る者にのみ言ひ得べし、――世間の善惡は習慣上の空名のみ、人生の最終の判斷は善惡にあらずして幸、不幸なり、

? 吾を裁判くものは吾人のみ、??

三、人は眞理と云ふ――然れども人の愛する眞理よりも奇蹟なり、而して此判斷は己にあり て人にあらず、――眞理は人生の最も低廉なる低價のみ、窮すれば已むなく眞理に行く、??

四、人は國恩に死すと云ふ、誰か死ぬる程國恩の有難きを感ぜしや、――國と國と戰の時は 野獸の群の相爭ふのみ、國家は野獸の大なるもののみ、??

五、國家は疆土を大にして何にする? 軍備を大にして? 國家と個人、――(個人は其所謂 道德を以て國家の不道德を助く)

六、詩人は何故に其詩を公にせざるべからざるか。――西行法師、――自然詩人――

七、人臣下と云ふ、臣下とは何の意味ぞ――帝王の尊貴は何處にある――(精神上の所依 は外にあり……) 風は吹く如何ともする能はず、雨は降る如何ともする能はず、

八、批評とは何ぞ――Subjectivism に力あり、

(手帳の中。明治三十五年二月の條)

日蓮上人

一、法華經弘通の付屬

靈山會上の次第――上行付屬――佛滅後二千年の經過――

二、上行菩薩出現の預言

時――大集經の五個五百歲――藥王品「後五百歲」の定解――處――藏經流布――彌勒菩薩 預言――天台妙樂の預言――傳敎の預言――末法の初め、日本――其人に關しての預言― ―勸持品……

三、法華經の行者としての日蓮

日蓮の傳記――清澄開宗――松葉谷燒打――小松原法難――伊東法難――龍の口法難――是までは法華經行者のみ、八幡諫曉は頂上――佐渡流竄は一大自覺の機緣

四、上行菩薩の自覺。日蓮信仰上の大飛躍

上行自覺の次第――「我は上行也」――其宣言、寺泊御書、開目抄……――如說修行抄の開示――觀心本尊抄の現顯――大使命の覺悟――日蓮一生の大基礎

五、日蓮と預言

釋尊の預言と日蓮――日蓮は預言によりて信仰あり、自信あり、――自らも預言によりて一世を感化せむとす――預言は天地人生の上に有する至上力を意味す、而して此力は釋尊付屬の行者たるによりて生ず――開宗の預言、立正安國論――蒙古來襲、十一通書、……――

六、日蓮と日本國

佛讖に本ける國家主義――立正安國論――大義名分――反臣廿四人……法華經至上主義――

――塵の小島のあるじ――而かも日本國は大切――一閻浮提の理想――本尊に天照大神

七、八、蒙古來襲に對する日蓮の態度、

日蓮傳中の大疑問――

九、基督と日蓮

十、結論

（明治三十五年三四月頃）

日蓮研究の動機

◉人あり、吾人の日蓮論を見、其の讃美の太だ過ぎて日蓮宗徒の言と擇ぶところ無きを笑ふ。知らず、吾人を笑ふ者と、日蓮を知るに於て果して孰れぞ。

◉前に掲ぐる所（全集第三卷所載）は、謂はば序論のみ。日蓮と日本國、預言者としての日蓮、宗教史上に於ける日蓮の地位、日蓮と其の宗門、日蓮と基督、――是等は吾人が次を追ふて世に問はむと欲するところ。而も病の爲に長文を草すること能はざるの故に、暫く腹笥に藏むるのみ。吾人の日蓮論は尙ほ未だ大方の批判を受け得べき迄に分明ならざる也。所謂讃美の太だ

過ぎたりと云ふもの、果して何の謂ひぞ。

◉遮莫、日蓮上人の世に知られざるは疑ひも無き事實也。曰く四個格言、曰く辻說法、曰く龍の口法難、曰く佐渡遠流。人は唯、是の種の三四の事相に據りて、剛情我慢の一英雄僧を想ふに過ぎず。其の預言に關しては、比するにサボナロラを以てし、其の折伏の態度を以ては、日本のルーテルに擬するの類、多少の識見を有する者の批評も亦是の如きに過ぎざるのみ。謬妄も亦甚矣。

◉是の凡俗至極なる惡世に於て、日蓮の如き人物を祖先として追懷し得るは、吾人にとりてそも〳〵何の幸ぞや。政治家が良心を鬻ぎ、道學先生が道德を受け賣する時に、妙經身讀の行者が此土卽寂光の大理想の爲に天下を敵として戰へる風姿を想望するを得るは、吾人にとりて何等の祝福ぞや。

◉是の祝福の吾人に降りたるは實に近時の事に屬す。試みに後に來る者の爲に、吾人の經歷を語らむか。

◉六七年前のことなりき、予は或處に於て、偶〻日蓮の文章と稱するものを見たる事あり。

當時の予は日蓮に就て何等特殊の感興を有せざりしが、其の文章の一節がいたく予の好奇心を動かしたるは忘れもせざる事實なりき。然れども予は未だ佛敎の敎理に通ぜず、日蓮の敎判等に就て何等會得する所無かりしは言ふまでもなし。所謂予の好奇心を動かしたる一節は、單に其の文字の雄壯にして語課の豪快なる、太だ平生見る所の國學者の文章に異るものありしが爲のみ。後來、數〻是の事を追懷せしことあれども、間もなく是の一節の文字すらも遺却し去りたりき。然れども何時かは日蓮上人の文章を研究するの機會に遭遇せむことは、是れより永く予の希望の一つとなりたりき。

◉今日より想へば、往年予が偶目したる文章は敎行證抄にして、所謂好奇心を動かしたる一節は、『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず。彼れ〴〵の經々と法華經と、勝劣、淺深、成佛、不成佛を判ぜむ時、爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず。いかに況や夫れ以下の等覺の菩薩をや、況して權宗の者共をや』と云へる有名なる一段なりし也。

◉されど予は專修の學科に忙はしく、この志願も心に任せず。凡そ六七年の間は忘れたるが如くにして過ぎ去りき。然るに去年病ひを養はむが爲に大磯に在りし時、日蓮研究の素願

を果すべき機緣はゆくりなく現はれぬ。

◉去年の秋の初めなりき、予は田中智學氏より「宗門の維新」と題する一册の寄贈を受けぬ。是の書、祖師上人の垂示せる大理想に本づきて今の日蓮宗を改革し、以て世界を統一する一大宗教となさむとする著者の抱負と計畫とを述べたるもの也。予は是の書を讀み、著者が熱烈なる精神の上に及ぼせる日蓮上人の勢力を想ひて深く心に感ずるところあり、更に上人の文章を研究せむと欲せし往年の志願を憶ひ起し、この一念の發起に乘じて是の偉人の組織的研究を思ひ立ちぬ。

◉予は是の目的の爲に十月の末より鎌倉に移り越しぬ。以爲く、鎌倉は日蓮の生涯に於て最も重大なる紀念を留めたるの地、其の遺跡に對すれば追懷の想念おのづから新なるべく、孚應の感化亦其の間に現はれむ。且つ是の地は予に「宗門の維新」を寄せたる田中氏の住する處、未だ一面識無しと雖も、若し告ぐるに情を以てせば、必ず予が研究に對して有益なる指導を與へらるゝならむと。

◉斯くて鎌倉に移りたる後、予は田中氏を訪ふて面會を求め、告ぐるに來意を以てせり。

氏は予の志を諒とし、研究の方法に就て審に示す所あり、且つ必要なる書籍を貸與せられたり。是の如くにして予が日蓮研究の端緒は開かれぬ。爾來予は力めて『御書』の精讀と教理の研鑽とに從事し、時に田中氏と會して判釋を聞くことを樂しめり。予の領解は果して多少の進境を示したりや、日蓮上人と予と果して相近づきつゝありや。予自ら是れを知らず。唯、是の研究が予に從來未だ曾て知覺せざりし一種の滿足を與へたる事は、予にとりて至大の報酬と謂はざるべからず。而して是の間に於て田中氏が予に與へられたる多大の厚意は予の實に感謝に堪へざる所也。

◉研究の進歩するに隨ひて、予は先づ日蓮上人に對して從來予が有せる概念の甚だ謬れることを覺りたり。想ふに世人の有する所の概念も亦是の如きに過ぎざるべし。然らば則ち日蓮の人物は殆ど全く世に知られずと謂ふも過言に非ざらむ、予は是れを以て甚だ遺憾なる事なりと思惟したりき。

◉日蓮をして通常の人ならしめば、其の知らるゝと知られざると、世に於て關はる所無けむ。然れども予は彼れの人物に於て眞に世人の無知を遺憾とするの偉大を認めたり。想ふに

彼れを世に知らしむるには多くの困難あらむ、而も予は如何なる困難も彼れの眞相を世に知らしむるの功德に比較すべからざることを認めたり。殊に今の俗惡なる國民に向つて其の祖先の中に是の如き大人物ありしことを訓ふるは、道學先生が千萬回の講話にも優りて偉大なる精神的感化を與ふべきを認めたり。是れを以て予は自ら計らず、予が認めて日蓮の眞相とする所のものを書して世に問はむとの決心を固めたり。

◉予が日蓮研究の因緣は略〻右に說けるが如し。如今不幸にして病の爲に長論文を草する能はざるを以て、暫く續稿の揭載を見合はせたりと雖も、佛天の加護によりて予が素志の貫徹せらるべき日の早晩來るべきことは、予の疑はざる所也。

（明治三十五年五月。無題錄）

樗牛雜記

樗牛が雜記の殘れるもの二つ。一は主として雜誌「太陽」の原稿案にして、明治三十五年一月分より、その年の終りに至るまで、文章の腹案や心に起りし儘を記したるもの、他の一は主として日蓮研究の爲めにその遺文の句などを抄錄したり。今茲に揭げたるは、文案雜記の前半にして、之を世に公にせしものに比して幾何かの差異あるを以て、彼此相參照するに足るべく、又彼れが如何に文案を草したるかを知るべし。此文案は多くは鉛筆にて橫書きにせり。（編者）

For January（明治三十五年一月分）

△世ニ迷信無シ——行者ヨリ見レバ凡テノ信仰ハ眞行也、不信者ヨリ見レバ凡テノ信仰ハ迷信也、——一向宗——日蓮宗——

△醜都府——家屋——道路——青天ニハ電信アリ——夜ノ月光ハ ランプ ガスノ光ニ汚サル——人ハ牛馬ノ如ク走ル——人ノ顏ハ皆惡相アリ——聞ゆるものハ林間ノ風、溪水ノ音ニ

アラズシテ罪惡ノ響也――風ガ吹ケバ黄塵萬丈――

△愛ト心ノ批評

△理想的凡俗――改良服ヲ着、公德唱歌ヲ歌ひ、倫理道德ヲロニシ、風俗改良ヲ說キ、其ノ手紙ハ言文一致……

△大和田氏ノ文典唱歌　動詞ニ自他ノ差別アリ「月ヲ眺めて」「火を消す」と「を」の字を入れてはいはかを他動詞とこそ名づけたれ――

△吾人ニ對スル批評ヨリモ――

三十四年史

△文壇照魔鏡――

△裸體畫問題――先ニハ明星――後ニハ展覽會

△春雨ノ無果花、己が罪、思ひ出の記

△天外ノ寫實小說、戀ト戀

△書物ノ表紙ノ立派

△詩集ノ出版――鐵道唱歌――落梅集、行く春――片袖――春草――霜しも、花柏榴、短笛長鞭、みだれ髪――

△イブセンノ譯(高安月郊)

△〔省〕

△〔省〕

△豫約出版――大史論著ナシ――

△讀賣月曜文學ヤメ――

△主ナル論文――竹風ノニイチェ論――藤岡氏ノ東西京美術論――大塚氏ノ日本衣服論――畔柳氏ノ病理論――他ハダメ――

○

1、學問ハ深カレ、博カレ、未來後世ノ爲ニモセヨ、然レドモ人生ヲ忘ルヽ勿レ

2、我邦ノ學問ハ是ノ人生ノ關係ヲ遺却スル傾キナキカ

3、學問ハ全人タル爲ニ必要ナルベシ、學問シテ不具人ヽナラバセザルニ如カジ。

4、學問分離ノ弊——教育學者——教育家——倫理學者——道德家——病理學者——醫者
——哲學史家——哲學者——宗教學者——宗教家

5、村上氏ノ例——

6、如上ノ弊ノ根本ハ個人ノ自由ヲ沒却セルニアリ——觀心修證ノ一義ヲ捨テヽ唯々形式方便ノ中ニ强迫スルガ爲也、吾人ハ宗教ヲ要ストセバ先ヅ神ヲ自己ノ中ニ認メザルベカラズ——

現代ノ不平

○宗教家ナシ宗教學者ノミアリ——井上、加藤、村上氏ノ宗教論——村上氏ノ態度ヲ惜ム——親鸞、法然、日蓮ノ例——宗教ノ比較研究ノ如キハ閑事業ノミ——教科大學設立ノ意義如何——

○歴史家——哲學者——教育者——道德家——ナシ ——學者ノミアリ——歴史ト現實ノ利用——

○人物養成、哲學者タラザル可ナリ、先ヅ人タレ

學風刷新——私立大學ニ望ム——(從來ノ早稲田學風ハイケヌ)

○大ナル實行家出デヨ、意力强キ、

○日蓮ノ例——衆凡人ノ爲ニ遂ゲル歴史上ノ事例アリヤ——(江戸城——凱旋門——宗教改革——佛蘭西革命——)

呵吒波羅婆ノ方ガ餘程エライ、學者ガツマラヌ議論シテ居ル内ニ、兎モ角數萬ノ信徒ヲ拵ヘタ。

(此間十數項一度書きて後消してあり)

凡テ Vanity ナリト言フ勿レ、善食善飲シテ事實也 Jopandy's happincss

カクシテ善キモ何ノ幸ゾ(運命ニ屈シ……)

人ハ火ヲ恐ル、燒カレ〔ン〕コトヲ恐ルレバナリ taste undisputable, but life the dispute

人生ハソンナニエラキモノニアラズ——心ハ變化ス 今ノ學者ノ多クハ僞人ナリ怯者也。

△Ibsen 病ム—— Tolstoi, Nietze 死ス !!! well battled life!

〔以下二行不明〕

〔以上、全集第四卷(醜なる哉東京市)、第二卷(明治三十四年の文藝界)、第四卷(現代思想界に對する吾人の要求)參照〕

For February (明治三十五年二月分)

△日本橋論

△新年文壇所觀

△胡沙笛(酒汀)

△嘲風の獨逸文明論、(近來ノ大論文)

△虛僞ノ文章(近時ノ文章)

△十九世記大著述ニ就イテノ諸學者ノ意見ニ就いて

△Nietsche ノ書ノ讀まれざるを悲む

△クサワカバ(有明)

△登張氏ノ(Nietsche ト二大詩人)

△日本隨筆字引(「常」カ)

△三土氏の中等國語讀本

△文藝雜誌ノ流行——大阪ノ小柴舟(將來出ヅベキ文藝界)

△讀書感

1. Schopenhauer

2. Heine

3. Wordsworth ハ第(「大」カ)キライ

Keats ハ上田敏——Shelley ハヨル

Tennyson ハ凡俗

Körner ハ好シ

Goethe ハ too great

4. Sudermann, Zola, Sienkiewicz, Ibsen
Dante ハ too weak——
5. Nietsche, ノ Zararathustra
6. 日本、源氏——平家、源平、太平記——日蓮（親鸞、蓮如ハ weak）烏羽僧正——土佐
……——日蓮——源氏
〔此の間に本卷所載「斷片」人と愛情あり〕

○新年所觀
△井上博士ノ裸體畫論、——美ノ定義ヨシ
△Dr. Stratz ノ裸體美論——
△大町ノ尊氏論ヨシ、勤王ノ思想
△抱月洋行——專門學校ノ前途
○野村越海ノ合掌（妙宗）
○上田敏氏ノ「藝苑」——文友館

○鷗外氏ノ文體ハキライ、吾人ハ野調アルヲ愛ス（卽興詩人ハ凡作ノミ）
○明星
○岩手縣ノ少女ノ遺言
○米仙畫談ヲ讀ム
○倫理學者ノ倫理ガ先決問題
○人ノ產ミ得ベキハ己レノ子ノミ——學者輩ハ人ノ子ヲ生ム

For March（明治三十五年三月分）

△三宅雄次郎氏洋行
△江湖快心錄
△名家歷訪錄　黑田天外
△ダンテ（上田氏）
△日本繪畫史批評

△Böcklin ニ就イテ

△今ノ文章ハ僞文也

△美的生活ノ極致(德ノ報ヒハ幸ニアラズシテ德其物也)……Spinoza

△美的生活者ニシテ初メテ基督ノ(汝ノ敵ヲ愛セヨ)解スベシ——(is he no egoist,) (右ノ頰ヲ打タバ左ノヲモ向ケヨ)ヲ解スベシ

△佛ノ Nirvana ヲモ解スベシ……

△日本帝國美術史稿

△展覽會出品ヲ精撰セヨ(Royal Academy ノ如キ、Turner ハ16才ニテ許サル、コレ異例ナリキ)

△Turner ノ Temeraire ヲ見ル毎ニ誰レカ壇ノ浦ノ戰後ヲ描クモノナキヤ

Ruskin 曰ク

"Of all pictures not visibly involving human pain, this is the most pathetic ever painted."

△藝苑

△文藝界、 ステルン

△醒雪ノ評ニ答フ——イヽ雜誌出來ル譯ナシ

△菅公唱歌ノ黑田等署名

△日蓮六百五十年立宗會

(明治三十五年四月分)

△古ヨリ人生ヲ積極的ニ幸福ニシタルモノハ Phantasie ノ事業也

△道德家ハウヂ虫ノ如シ

△ニイチエノ獨乙人ノ批評ナゾ何デモ宜シイ

△予トニイチエ——美的生活論

△Simplifer と Complexener

△吾人ノ說ノ今ハ世ニ容レラレザル處ニ價値アリ

△丁酉倫理會トニーチエ、日蓮ト鎌倉――平ノ左衛門ハ中島カ桑木カ

△――大ナル眞理ハ古ヨリ解セラレズニ經過スルモノナリ――難生ノ草ノ如シ

△大人物ハ殺サル

△理屈(窟か)ヲ言ヘナラ言フ、然レモ今ノヨ――ナ理屈(窟か)ハ言フ程價値無シ、狂人ト共ニ走ルノ類ノミ

△倫理學者ニ小説ヲ讀ムコトヲ勸ムル

△他人ノ説ノ抄介(殺か)ハ無意味

△翻譯ハ意氣地ナシ(大文學者ナラザル)　上田敏ハ創作スベシ

△吾レ謗法ノ罪ニヨリテ〇〇ノ漂泊ノ運命ニ陷〇〇〇〇〇〇不明〕

△消閑ノ具トセン――論理學カ――哲學史カ――認識論カ

△道德論ハ腐敗ノウヂ――説ノ出テルハ必要ナレドモ修正ノ功ナシ、喜ナド作テモ何ニモナラズ

△道德論ノ世ヲ救ヒタル例ナシ

吾人の嗜好

△嗜好ハ變ルモノ、今ノハ如下

△文學上――予ハ英文學ヲ學ビタリ――芥舟ト共ニ――初メハ Scott, Wordsworth, Tennyson ヲ好メリ――就中 Tennyson ノ Locksley hall ノ兩篇、In memoriam, Lancelot ノ連篇ノ如キハ尤モ好メリ――然レモ今ハ皆キラヒ也――

△Burnes, Byron 尤モ好ム……Burnes ノ傳(Carlyle)亦大好キ、其 Mary in heaven, Lyland Mary ノ如キハ今モ暗記セリ

△Keats, Shelley ヲ好メルコトアリシガ今ハイヤ也。

△予ハ好デ詩文人ノ傳ヲ讀メリ、英國文豪ノ連篇ノ如キ好デ讀シガ William Sharp ノ Heine 傳尤モ面白シ

△獨ニアリテハ Körner, Heine 尤モ面白シ、Körner ノ letter 面白シ……

△Goethe, Schiller, Lessing……後二者ハ哲學者トシテ余ノ尤モ敬服スル所也、Briefe ü. aes. Erziehung d. M.――Laokoon……

△英語ト獨乙語——自己ノ經驗
△米國詩人ニテハ Whitman ヲ好ム——小說家デハ Hawthorne
△予ハ旅行記ヲ好ム Goethe, Heine ノ Italien, Harzreise……Graf v. Schack ノ Ein halbes Jahrhundert, Mark Twain ノ Innocent abroad,……Jamson 夫人ノ獨乙旅行記……日本人ノ旅行記ノ愚——

人物ト詩文
人物ト文章

Sappho {Spectator / Grillparzer}

Burnes Byron Körner Heine Hugo Spinoza Schopenhauer Fichte Nietzsche

依法不依人トハ冷淡ナル理屈一點張ノ時ノコト也、藝術ノ如キ感情的ノモノハ依人不依法也

Ernst ist das Leben, heiter ist die Kunst-no! Ernst ist das Leben, ernst ist die Kunst auch

For May（明治三十五年五月分）

△日本國歌募集に就いて
△Bright May 人ハ尙モ名利、知識、道德ニ狂奔セントスルヤ、飲み得ル口ニ非ズヤ、胸ニ青春ノ炎アリ
△老人ノ昔時ノ談程無殘ナルハ無シ——
△日蓮上人ト日本國
△日蓮に就いての辯解
1. Not blind worship
2. 偉人殊ニ宗教的偉人ヲ愉悅スルハ必要也
3. I am an egoist 只吾人ト同ジキモノニ福祉ヲ頒たんト欲スルノミ、

4.——

△英國僧正バーカー英帝ヲ罵ル（日曜ニ寺院ニ行カズシテ興行場ニ赴ク……予ハ英帝ニ忠臣タラント欲ス、而カモ基督ニ不忠ナル能ハズ）英人之ヲ贊ス、國民尙生命アリ

△我邦宗教家ノ無氣力——宗教ト國家——カイザルノモノハカイザル——

△紅葉ノ金色夜叉——宮ノ手紙ノ死文——mere rhetoric——

△讀賣ノ改惡

△饒舌——野心——

△小兒ニハ稀有ノ事例ヲ訓ヘヨ

△釋迦誕生會、日蓮宗紀念會……世人ハ何ノ爲ニ偉人ヲ追慕スル——彼等ノ忘レタルモノ二アリ、曰ク懺悔、曰ク祈禱

△山縣五十雄君ノ英文學研究、第三、英米詩文集——

△英國熱 Anglo-Saon Superiority ハ俗惡ナル書ノミ

△冠鐺日親傳ニ就イテ（餘言拔萃）

△予ガ日蓮上人ヲ研究シ初メタル徑行——△日蓮ノ研究セラレザル所以

△Cromwell—Dumber——人ハ愚ト云ハン but no—人生ノ大ナルカ

△今年ノ展覽會——畫題ノ愚——Millet ノ Angelus Turner ノ Temelaire……

△學者ガ煩瑣ナコトヲ列ヌルハ單ニ理屈ヲ付ケテ御目ニカケルニ過ギズ、眞ニ中心ノ要求ニ應ジテ已ムヲ得ズシテ然ルモナシ

△理屈ト羽織ノ紐ハ如何ニモつくもの也、吾人理屈ヲ尊マズ

△宗教談ノ轉載

△大塚氏ノ Romantik 論——其ノ功過論ハ nonsense

△Nietzsche ニ對スル吾人ノ關係……

△予ノ理想——Good appetite, sound sleep, perfect freedom

△人意必ずしも天意ニ非ズ——予ニトリテハ人意アルノミ、天意アルナシ、我レヲ深ク知るものは神也……alles Ego!

△Ein Wolf selbst zeugte für mich und sprach:

„Du heulst besser noch als wir Wölfe."

世間ト世人ト是ノミ

△爾ハ强シト云フ、神ヨリモ强キカ

爾ハ傲慢ナリト云フ、汝ノ僞善ニ恥ヂザル程ニ傲慢ナリ得ルカ——

△Als keine neue Stimme mehr redete,

Machtet ihr aus alten Worten Ein Gesetz:

Wo Leben *erstarrt*, thürmt sich das Gesetz

△坪内氏ノ說ヲ駁ス(文藝界)

△醒雪ノ批評的態度

△井上圓了氏ノ論集——余ガ所謂宗教、日蓮宗徒ニ望ム

△京都ノ奈良

古鏡

無言ノ聲

顏ノ疵

(○夜大吹雪)

日蓮上人と日本國

1、佐渡ヨリ歸ル——鎌倉殿中ノ氣焰——心ハ隨ひ奉るべからず——日本國ノ主權否定

2、日蓮上人ノ國家觀——宗教ノミ實在——國家ハ假象——宗教ニヨリテ國家ハ左右セラル、宗教ノ爲ニ國家護持ノ必要アリ——其證立安國論(「立正安國論」カ)……超國家主義——蹇カノ小島ノ主——小神——……身延隱遁ノ理由モ是ニヨリテ說明セラル……蒙古……モ

4、蒙古襲來ニ對スル日蓮ノ態度——謗法ノ國土ハ存在スベカラズトハ日蓮ノ主義——日本ハ謗法ノ國土——蒙古ニ對スル上人ノ希望——膺懲ナリヤ滅亡ナリヤ(不明)——兎ニ角蒙古來襲ガ佛讖ノ攝理ニヨレル佛國建立ノ爲ノ一大事ナルコトヲ信ゼリ——旗曼陀羅ノ虛妄——博多港銅像ノ無意味——田中氏等ノ國禱論ノ不知可ナルコト

5、予ノ批評——宗教ノ本體——神ノ國——個人精神ノ絕對的自由——國家ノ權力ノ範圍——(心ニハ及バズ)——心ハ如何ナル審判ヲモナスコトヲ得……國家ト宗教——宗教家ハ

迫害ノ覺悟ヲ要ス、何ゾ神ノ物ハ神ニ返セト斷言セザル——Tolstoi, Nietscheノ道破ノ是點ニ於テ慥ニ眞理也、人類ノ深奥ナル欲求ヲ大膽ニ發表シタルモノ也

〔全集第三卷參照〕

樗牛全集拾遺

詩歌宗教及び道德

詩歌のひゞきは人心最奥の音樂なり。吾れ人の言はむと欲して言ふ能はず、聞かむと欲して聞く能はず、奕々として忡傷する所のもの、一念の天來、詩人の口を假りて玆に微妙の詩歌をなす。哲學思想が幾十百年の歴史を重積して、而も明瞭なる斷定を下す能はざるもの、零丁たる詩歌一篇、正に是の幽深の意を瀝盡す。夫の宗教なるもの、其の末流は源泉の清きを傳へず、星霜の經過と共に其の舊態を留めざるに至ると雖も、而も其の教祖が一代の風雲を掀飜して、新に信仰の光を濁世に放ちし時にありては、是れ只〻詩歌なりしのみ。詩歌は物質に對する心靈の表象なり、現實を以て滿足し得べきものにあらず。何れの時代にか詩歌あらざるべき、何れの時代にか宗教なかる可き。オクサス川の谷間に、白牛黃犢を友として、錦光燦爛たる曙光の影を望みては無限なるアデチ女神を愉悅し、暴風雷雨の裡にはインドラ神の爭ひを認めたりし古アリアンは更にも言はず、赫灼として燃ゆるが如き熱天の下、綠葉蔚

蒼たる椰子樹の蔭に、ソーマの酒を供へて、吠陀讃頌を朗咏せる黒色長身の印度人より、氷雪皚々として一花一葉の紅綠なく、滿目慘澹の世界に穴居して、而も死後此の光の輝き亘れるあなたに、黄金の角ある馴鹿の群なす樂土あるべきを夢想せるチュクチェン人に至るまで、皆是れ其のさゝやかなる理想の光によりて現實を照らし、其の希望と幸福とを來らむ世に繫けしものには非ざるか。猶太教も是れなり、基督教も是れなり、回佛以下の諸宗教亦是れに非ざるは無し。詩歌は人心の抱懷せる理想を表彰せるもの、而も是の理想を尤も具象的に表彰したるものは則ち宗教也。宗教はあらゆる詩中の尤も詩的なるものと謂ふべき也。

理想の上に其の根據を有せることに於ては、道德は毫も宗教と異ること無し。而も宗教の遂に道德たらず、道德の遂に宗教たらざるは、是の理想を表彰せるの方法に於て其の間に異る所あればなり。道德的理想は、心性組織の必然なる結果として道德的意識の中に生ずるものなるを以て、心性發達の未だ圓滿ならざる現實の狀態にありては、是の理想に對する意識は自から不明瞭なるを免れず。吾人が現在にありて、其の理想的狀態として想像する所のものは、所詮是の不十分なる意識の上に本づける一種の想像に過ぎざるを以て、勿論終極絕對

的の理想を知るに由なし。宗教は是の現在の不完全なる意識を超脫し、吾人が主觀的理想を外界に投射し、良心によりて代表せらるゝ吾人が道德的要求を客觀化したるものに外ならざる也。而も理想と現實とは到底兩立すべからざるを以て、宗教に所謂理想的狀態は、現實世界にあらずして未來彼岸の世界にあり。想像と死に緣るの外は是れに到達するの途無き一種の超絕的世界也。既に超絕的なり、如何なる矛盾撞着をも包容して綽々として餘裕あり。於是乎種々の神祕奇怪なる屬性を以て纏飾せられ、又種々の神祕奇怪なる儀式によりて崇拜せらる。代累り年移るに隨ひて、形式は實質を被包して當初の精神又見るを得難きに至るも、其の起源に溯れば、宗教は遂に道德的理想に外ならず。故に種々の神祕的形式と屬性とを宗教より剝ぎ去らば、殘る所は吾人の良心の命令及び其の希望に過ぎざらむのみ。今更に宗教の目的とする圓滿なる世界は、何が故に現世にあらずして未來彼岸に存するかを考ふれば、宗教の本來道德と兩岐無きこといと〳〵明なるべし。蓋し宗教に所謂未來の世界は、道德的理想の客觀化せられたるものとして勢ひ然らざるを得ざるなり。道德的理想の、所詮現世に於て到達するを得ざること億萬劫尙ほ一日の如くなるを思はば、宗教が其の理想的世界を、全然超絕

的となせしは洵に至當なりと云ふべし。死は人生に於けるあらゆる積極的制限の否定なり。宗教が是の死を以て彼岸に達する必至の條件となせしは亦洵に其の當を得たりと云ふべし。

宗教と道德とは本來已に相兄弟たり、猥りに壘壁を築きて二者を別つべきに非ざるなり。宗教が實際的制裁を有する間は是れ卽ち道德にして、道德が理想的精神を鼓吹する間は卽ち是れ宗教なり。宗教も道德も其の對象とする所は人生及び人生の理想なり。世に宗教を以て單に獨斷となし、倫理學を以て批評學若しくは記述學となすが如きは、偏僻不通の說なりと謂はざるべからず。若し宗教より道德の分子を省き、道德より宗教の分子を取り去らば、二者共に破滅せざるを得ざるべし。

（明治二十九年五月）

戰爭は競爭のみ

戰爭は競爭の一種のみ。唯、競爭の器械として學術が知識を用ひ、商業が財貨を用ふる代りに、戰爭は人命を用ふるのみ。所謂 Krieg は Kampf の一族名と見るを妥當とすべし。

平和は現世に於て望むべからず、人類の慾望が進步に存する間は、競爭は遂に免るべからざればなり。吾等は戰爭と名くる一種の競爭にのみ特別の罪惡ありと思惟するを欲せず。

（明治二十九年六月）

外山博士を憶ふ

一　世の鹽

今は故人なる外山博士に關して、第一に追懷せらるべきは、其の人物の高潔なること也。若し利を見ては爲さざる所無き星亨氏の如き人を大人物と稱する眼より見れば、博士は寧ろ小人物と謂ふべかりき。博士は星氏一輩の當世的人物と全く其撰を異にす。博士は徹頭徹尾、正義の人也、勢利に依りて去就を決し、功名に誘はれて良心を枉ぐるが如きは、博士に於て夢にだも見る能はざる所なりき。博士は、今の俗流に投じ夫の汶々者流と共に方便主義の人たらむには、其の知見餘りに聰明に、其の道念餘りに嚴肅なりし也。政黨者流は疑ひも無く博士を以て融通の利かざる人物と爲せしならむ、されど融通の利く人物の寧ろ多きに勝へざる今の世に於て、吾人は特に博士の高潔なる性格を懐慕するの情を忍び能はざる也。

博士は今の世に缺けたる幾多の美質を有したりき。是の意義に於て博士は實に今の世に缺くべからざる人物なりし也。主義なき今の世に於て、博士は飽く迄主義の人なりき。自信無き今の世に於て、博士は飽く迄自信の人なりき。世は擧りて名利に競奔せり、而して博士は正義を以て自ら立ち得ざらむを恐れたり。奢侈は一代を風靡し、人は虚榮を追ふて僵るるを知らず、而して博士の勤儉は實に歎美すべきものなりき。日は照らすものに其の德を思はしめず、吾人は今に於て博士が眞に世の鹽なることを認むる也。

博士の其の主義を重んずるや、恐らくは死も亦是れを脅し得ざりしならむ。若し博士にして主義よりも名利を重んじたりしならば、博士の事業は更に其の大を加へしやも知るべからず、而も博士は外千萬人の讃仰よりも、内一心の疚しきに勝へざりし也。文部大臣を退きて閑散の地に就くや、知人の中には博士に向つて切に政黨に入るの利を說けるものありしが、博士の答は實に高潔なるものなりき。曰く、吾に主義の動かし難きものあるを如何と。將來の政治界に於て爲すあらむとするものの、大政黨を利用するの止むべからざること、博士の聰明にして安ぞ他人の言を待つて知らむや。唯、自家の所信を枉げて、夫の所謂黨議に左右せら

るゝが如きは、博士の到底忍ぶ能はざる所なりし也。畢竟博士は今の政治界に於て成功し得むには、其の所信餘りに鞏固に、其の德操餘りに高潔なりき。良しや博士にして政治界の人となるも、其の趨くところ、恐らくは夫の田口、島田諸氏と同一の軌道たりしならむのみ。博士が超然として始終批評家の位地に立ちたるは、眞に其の天分を效し得べきの地に立てるもの、啻に其の自ら知るの明を稱すべきのみに非ざるべし。

二　三河武士の好模型

主義を重んじ、廉直自ら潔うするの點に於て、博士は所謂三河武士の好模本なりき。博士の家は幕府の旗本にして、其の先は三河に出づ、博士の祖先は現に三方ヶ原に討死したる三河武士の一人なりき。吾人潛かに博士の爲人を察するに、三河武士の遺血の其の身中に流れつつありしを疑はざる也。今日三河武士の子孫として其の遺韻を傳へたるもの、田口卯吉氏の如き、島田三郎氏の如き、或は江原素六氏の如き、故佐久間貞一氏の如き、若しくは勝海舟翁の如き、其の廉潔なる點に於て、其の正直なる點に於て、何れも博士と同模型の人なり。而

して是の如き模型の人として、博士の如きは其の最も純なるものに近かりしならむ。幕末の英士たる海舟翁の相續人たるべきものは、先づ指を博士に屈せざるべからざりしが、今や博士の後に於て何人か是れに當るべき。日本が伊藤博文氏の如き、星亨氏の如き人物を再び見むことは必ずしも期し難きにあらず、吾人は現に幾多の小伊藤、小亨の多きに勝へざる也。されど博士の如きは、人物の模型として甚だ得易からざる也。請ひ問はむ、博士の薫陶を受けたる赤門數千の子弟、果して幾人の其の流風を傳へ得たるものある乎。

然れども三河武士の子孫は今の世の寵兒に非ざる也。聞說らく、海舟翁嘗て島田三郎氏を評して曰く、沼南は好男子、恨むらくは不遇の間に一生を終らむ乎と。正義と失意とは多くの場合に於て同意義に解せらるゝ今の時に於て、吾人は三河武士の子孫の薄命を悲しむの情に堪へざる也。博士の襟度は必ずしも狹からず、自ら守ること嚴なる割合には、己れと異る者に對して左迄狹直ならざりき。然れども博士にして如何に風雲に際會するも、到底大隈伯たるを得ざる也、伊藤侯たるを得ざる也。博士の大なる理想としては、唯、海舟翁ありしのみ、是れはた三河武士の子孫が天稟の宿命にして、而して博士の人格の高潔なる所以也。

三　博士の天分

博士の生涯の重なる部分を語るものは學者の閲歴なりき。然れども博士の天分は學者たるに在るよりは、寧ろ批評家たるに在りき。博士は學者として本邦人には珍らしきブロード・カルチュアを有したり。スペンセル氏を祖述せる其の進化論も、哲學雜誌に掲げたる社會、道德、宗教に關する論文も、慥に價値ある研究なりしならむも、然かも批評家は博士にありて更に大いなる天分なりし也。而して博士が多方面の趣味と、其のブロード・カルチュアと、自己の說を立つるよりは他の缺點を看破するに長じたる其の烱々たる觀察眼と、不羈獨立、何人の前にも忌憚なく其の所信を告白し得る勇氣と、凡て是の天分を果すべき要具として博士に賦與せられたるの觀ありき。

今日に於てこそ、スペンセル氏の進化論は、福澤氏の民權論と同じく餘り稱美すべきものにも非ざれども、日本が初めて博士の口より是れを聞きたる當時にありては、慥に警拔なる新眞理なりし也。博士が時流に先んじて是れを鼓吹したるは慥に卓見と謂ふべけむ。演劇改良論

は、今に於てこそ常套の問題なれ、博士の是れを唱へたる頃にありて、幾人か能く其の眞意義を解し得たるべき乎。博士が『漢字破り』を著はし、羅馬字會を起し、『漢字に反對するものならば何でも贊成する』と喝破したる時に當りて、幾人か能く國字改良の問題に對して痛切なる感興を有せしや。今や新體詩は鬱として藝苑の一方に昌え、其の光榮ある將來亦豫期し難しとせず、而して明治十年代に於て唱へられたる詩歌の一體が、三十年代の今日に於て漸く世人に認めらるゝに至りたるを思へば、吾人は博士及び博士と共に初めて新體詩を唱へたる人々の先覺を多とせざるべからず。吾人は帝國大學の教室裏に於ける社會學の講義よりは、寧ろ是等の警拔なる批評に於て博士の本領を認めむと欲する也。

着手は成功の半也。今の日本の學術界に於ける進化論の勢力如何を想ひ、新體詩が如何に漸く其の地歩を占めつゝあるかを考へ、國字改良が上下一世の輿論として、如何に盛んに研究せられつゝあるかを觀れば、吾人は殆んど二十年前の往時に於て、早く既に是の事を國民に警告したる先覺者、博士の如き人に對して須らく其の成功の半ばを歸すべきに非ずや。

然れども是の如きは大學教授たり、文科大學長たる博士の片手間に過ぎず、博士が精力の

大部分は、言ふ迄もなく大學教育の事業に效されたりき。帝國大學が博士の力によりて完成の域に近づきつゝありしは素より疑ふべくもあらず。されど博士の能力は一學校、一教室の中に發揮せらるべきものとしては餘りに大なりき。其の烈々たる活力は、靜穩和平なる規矩準繩裡に於て現はされむには、寧ろ強大なるに過ぎたりき。博士の性格は、其の活動の場面として更に大なる舞臺を要したり。大學總長や、文部大臣や、吾人素より博士の爲に是れを榮とすと雖も、而も博士の天分に待つありしものは、學校に非ず、官衙に非ず、而して社會なりき。吾人は是の點より見て、寧ろ博士の短命なる大學總長と、文部大臣とを祝せむと欲するなり。

四　社會的批評家としての博士

文部大臣を退ける後の博士の經歷の意外にも短く、今や故人として博士を呼ばざるべからざるに至りたるは、吾人の返すがへすも悼惜に堪へざる所也。社會は凡そ二十餘年の間博士の警拔なる批評を耳にせり。然れども眞に社會的批評家としての博士の面目を發揮し初めたるは、不羈自由の一個人と爲りたる文部大臣辭職の後にありき。是の短き二年間に於ける博士の活動は、其の光榮ある將來を預告するに餘りある、極めて目覺しきものなりき。而して今や忽焉として亡し。吁、博士、其の來る何ぞ夫れ遲かりし、其の去るや、何ぞ夫れ速かりし。

人としての眞價は性格の力として現はる。沐猴も冠する間は、衣冠を敬する人に敬せられむ。夫れ凡庸の徒は、偶〻其の地位職權を擁する間こそ堂々たる人物の觀もあれ、一度び一布衣となりて民間に下れば、忽ち獼猴の木より落ちたるが如きもの、比々として是れ也。我が外山博士は是の如き類に非ざりき。

臺閣を退きたる後に於て、博士が赤條々たる個人的性格の力は漸く現はれ初めたり、勳爵の虛榮に依るに非ず、政黨の援引に賴むあるに非ず、其の武器として筆と舌とあるのみ。而も是の筆と是の舌と、一度び博士の高潔なる人格を發表するに及びては、金剛杵に比すべく夜叉戈にも較ぶべかりき。是の如くにして社會の爲に、宗教の爲に、學術の爲に、教育の爲に、打擊し、警醒し、奬勵し、訓諭せり。殊に博士に於て他人の企て及び難きは、其の批評の忌憚無きにあり。博士は東京市民の教育に冷淡なるを痛罵して禽獸に等しと言へり。大隈伯の

學校に熱心なること溫室の如くならざるを見て、何ぞ盆栽を賣飛ばさざると罵れり。山口、鹿兒島にのみ高等學校を建設するは、藩閥內閣の持續計略なりと喝破せり。久保田讓氏の如きは、博士によりて公然一小俗吏と罵倒せられたり。地方の一教育會の、博士を聘して其の演說を聞きし時、會衆の奢侈を打擊し、滿堂をして顏色無からしめたり。博士は到る處に忌憚無く其の所信を告白して、毫も一身の榮辱を顧みざりき。殊に一度び全國民の教育的精神を鼓舞するを以て刻下の急務なりと信ずるや、或は仙臺に、或は神戸大阪に、或は岡山、姫路に、或は濱松に、或は長野、新潟に、到る處に其の熱誠に充滿せる稀代の雄辯を揮つて地方の民心を鼓動せり。久しく遺却せられたる教育問題が、近時漸く社會の注意を喚起せるもの、博士の盡瘁與つて多きに居ると言ふも、吾人決して其の過言に非ざるを見る。而して偉大なる人格の勢力と威重とは、漸く是の間に認識せられたり。嗚呼、夫の樞密顧問官、或は貴族院議員の明巢を狙ひ、若しくは今生の思ひ出に授爵の恩典に與らむとして絕えず上長の鼻息を窺ふが如き蠢々たる徒輩が、時に新聞記者の訪問談に緣りて屋に自家の存在を廣告しつゝあるに比すれば、啻に霄壤の差のみに非ざるなり。

五　博士の死

輓近の教育界が、博士の熱誠によりて鼓舞せられたることの小少ならざるは、天下の齊しく認むる所也。而して博士の夭折が、是の事業の爲に速められたるの事實を認むるに及びては、誰か博士の人物に對して更に崇敬の情を加へざらむや。吾人は敢て夭折と云ふ、博士の祖父九十餘歲、先考は八十餘歲、代々長壽の家たり、況や博士の事業より見るも、其の本領の現はるゝは今日以後なるべかりしをや。五十四歲の今日は、方に博士の壯年期たり、然らば卽ち博士の死は卽ち夭折に非ずして何ぞや。

吾人をして博士の悲しむべき死を語らしめむか。去年の十一月、博士病んで褥に在りしが、博士の住居する牛込區民の懇情に應じ、疾を力めて其の教育會に演說し、大に東京市民の教育事業に冷淡なるを打擊したりき。博士の病是れより漸く加はり、肺炎より咽喉を害し、引いて中耳炎を起したり。博士は病中にありても尙ほ時事を憂ふる情に堪へず、『藩閥の將來』と『教育制度論』とは、實に其の病床中の著述なりし也。『藩閥の將來』は教育擴張を以て

瀟閥打破の最良法なるを說き、特に高等學校增設の問題に關して全國民の注意を喚起せるもの、『教育制度論』は久保田讓氏等の所謂學制改革を駁擊して、大學教育の本領に關する俗論を糺せるもの、共に教育社會の緊急問題に屬す。社會は這般の問題に就て、聰明なる指導者を得たる間に、博士の病氣は漸く其の重きを加へたり。醫師は切に轉地療養を勸めしが、博士は是の多事の時に際して獨り閑地に退くことを肯ぜざりき。本年一月三十一日、學制調査會設置に關する建議案、貴族院の議事に上るや、博士は病を力め繃帶の儘にて登院せり。當日高等學校增設案に關する質問は、今より思へば、實に現世にて博士の口より聞かるべき最後の演說なりしなり。

死は往々其の人の傳記を語る。讀者よ、博士の如何に生きたるかを知らむと欲せば、請ふ先づ博士が如何に死したるかを見よ。

六　博士に對する無上の讒誣

嗚呼、官邊の生活二十餘年、一朝江湖の人となりて其の天分を披瀝せむとするに際し、

事業匪に其の緒に就て、俄然として實を易ゆ、眞に人生の恨事と謂ふべし。世には寧ろ其の生を悼むべき幾多の人あるに、殊に斯人に下る、天道の是非、夫れ何處にか愬へむや。

吾人は博士の死に際して一の悲しむべき報知に接したり。其の或は後世に累あらむを恐る、一言の辯無かるべからざるを覺ゆ。何ぞや、博士の死に際し、其の喪を祕して爲に授爵運動を爲したる者ありと云ふこと是れ也。吁、果して是の事ありし乎、果して是の事なかりし乎。博士の最も親近なる友人が是の事を爲したりと云ふに至つては、吾人は其の說傳に出でたりとの外思惟すること能はず。苟も博士の性情を知れる近親の人ならむには、萬々是の醜陋事を演出すべき謂はれなければ也。

博士が勳爵を口にせし事は、吾人の一度びも耳にせざりし所也。博士の主義あり、博士の性格あり、而して人爵に望むところありしと謂はば、誰か其の不倫の大なるに驚かざらむ。是の點に關する博士の訓誡は、吾人數〻是れに接せしが、實に高尙なるものなりき。夫の良心を欺きて官位を求むるもの、主義を典して富貴を購ふもの、或は學者として俗界の名利に競奔するもの、是等は博士の常に指彈したる所なりき。夫の博士の友人として、爲に授爵の運

動を爲したる人々は、博士を以て如何なる人物と爲したりし乎。男爵華族の稱號を以て博士の靈を慰め得べしと思惟したりし乎。有力なる一新聞紙は是の事を批評して曰く、『今の學者は平生廉潔にして名利心なきが如く裝ふも、一旦死に瀕すれば輙ち人爵の戀々たるに堪へず、友人に依囑して周旋せしむ』と。是れ博士の爲に授爵運動を爲せる者を以て、卽ち博士自らの意志に本けりと爲せる也。吾人は是の言の甚だ理あるを認む。何となれば、凡そ人の爲にすることは其の人の素志に反すべきものにあらざれば也。故人に對する場合に於て最も然りとなす。今博士の死に際し、其の親友と稱して博士の爲に奔走するものあらば、以て博士の素志を體認せるものと見做す、必ずしも理無きに非ざる也。彼の某々氏等の運動にして、果して事實なる乎、卽ち是れ博士の素志を詐りて、其の高潔なる性格に一大汚辱を與へたるものと謂はざるべからず。吁、博士が在天の靈にして、若し是の事を聞かば、夫れ是れを何とか謂はむ。俗物者流、往々自家の心事によりて猥りに高士を揣摩し、却て累を後世に遺すを覺らず、憐れむべく、嘆ずべく、惡むべし。然りと雖も、授爵運動の如きは、恐らくは新聞紙の訛傳にして、苟も博士の友人と稱する某々氏等の關知せざる所なるべきは、吾人の喜び

信ぜむと欲する所なり。

七　博士の眞摯

博士に關して言ふべき事は一論文の能く盡す所に非ず。されど一事の見遁し難きは、其の心事の眞摯なること也。眞摯は大なる性格の特徴なりとの套語は、吾人、博士に於て其の一好例を見る。博士の言行には如何に些細なるものにも、其の背後に大なる確信有らざるは無し。されば事を斷ずるや、寧ろ遲かりしと雖も、一たび斷じたる決心の堅固にして、是れに伴へる意志の猛烈なるは、實に目覺ましき程なりき。外より見れば、博士の所行には往々滑稽と見ゆるものあり、されど博士の心事に至りては、極めて眞面目なり、大なる確信と抱負との上に爲されたる極めて嚴肅なる意義を有せり。世人よりは入道と呼び、天狗と嘲られながらも、博士は毅然として其の確信を枉げず、其の抱負を捨つる能はざりし也。博士は時に耿洒落を以て人を笑はすることあり、されど人生の事、一として戲れに成さるべきものあるを知らざりき。博士にとりては、人生は飽くまで嚴肅なり、博士は玆に其の確信と抱負と天分

と之を自覺して、須臾も休止すること無かりし也。博士の全生涯に貫通せる眞摯なる精神は、實に是の自覺に木けりき。

* * *

嗚呼、山は尚ほ築くべし、河は尚ほ穿つべし、高尚なる人物に至りては、眞に天與の賚なり。日本は外山博士の死に於て回復し難き損失を被りぬ。貴族爵位は唯、帝王の一呼吸によりて製造せらるゝを得べけむ。唯、夫れ大なる人物に至りては、吾人是れを如何ともするなきなり。

（明治三十年四月）

成敗と正義

一物存在の眞意義は、其依つて以て物たるを得る所の精神本領の存在にあり。正義を以て立つ所のもの、一朝屈辱を忍ばば是れ已に滅亡なり。形骸は性格を作ること能はず。世間、名存し實亡へるものあり、進化の美名の下に滅亡の事實を掩へるものあり。斯の如くにして一種の幽靈的形式主義は殆ど無限の威力を以て社會に臨むに至る。是に於てか、あらゆる不義は雲湧泉迸して底止する所を知らざらむとす。

あゝ名目主義の弊なる哉、形式主義の禍なる哉。正義の爲に滅亡する國家は、滅亡によりて榮ふ。所謂大義親を滅すとは實に是の大主義の福音に非ずや。今や其性を失ひて而も其命を全うするものあり。彼等は、ひいて國家をして精神的死亡を遂げしめむとす。國、其性を失はば之れ變化に非ずして滅亡に非ずや。世には死せる宗教あり、然れども國民は國家をして死せしむべからず。あゝ形式主義の弊なる哉。

正義の爲に斃るゝは正義と共に生くるなり。世には形骸のみを以て立たざるものあり。個人も國家も已むを得ずむば死して而して後生きるの大覺悟大精神無かるべからず。

（明治三十年八月）

文明史とは何ぞや

エドワルド・ギボン氏は英國の大史家、其の椽大の史筆もて述作せし羅馬衰亡史は洵に歴史文學の一大偉觀なり。然るにヤコブ・ブルクハルト氏は是の書を貶して大體に通ぜずとなし、以爲らく、羅馬帝國の沒落が歴史上の眞意義は、異敎者の基督敎化したる一事實に歸すべしと。其說の當否は暫く論ぜず、是の二者の反對は、やがて文明史と政治史との差別を表はす。卽ちギボン氏の歴史眼は政治史的にして、ブルクハルト氏のは文明史的なり。

政治史とは何ぞや。一言すれば、國家生活の過程の中に起りたる事件の順序及び關係を誌せる歴史なり。而して其の關係は、主として外面上の現象に終始せるものにして、是の如き事件の由つて生起し來りたる時代及び個人の內面的の探索を旨とするものに非ず。人文史は則ち然らず。其の目的とする所は、人類社會一般の發達を其の精神的方面より觀察し、其の外部に表はれたる政治、經濟、宗敎、文藝、其他もろ〳〵の文物に對して、其の成立變遷の說明

を與ふるにあり。政治史は卽ち國家を中心とし、其の盛衰興亡に關して一切の文物を照査す。人文史は則ち人類社會を對象とす。苟も人類社會の進化に與かるものは、凡て人文進捗の過程を成すに於て缺如すべからざるの要素となす、已に缺如すべからざるの要素と爲すを以て彼此の間に輕重の別を立てず。宗敎も、文學も、哲學、美術も、政治、經濟も、觀ずるに人文を經緯するに須要の線條を以てす。何れを先とし、何れを後とすべき謂はれ無きなり。政治其物も亦是の如き人文發達の根本的說明に依傍することによりて、初めて其の精透なる叙述を遂げ得べきを以て、是の點より見る時は、人文史は政治史の所依なりと謂ふべきか。

然れども是の二者は必ずしも全體と部分との關係に於て成立するものに非ず。政治史は國家生活に起りたる過去の出來事をありのまゝに描寫し、讀者をして當時の社會を回想せしむるに足るべき寫實的分子を要す。所謂『現在の生命を以て過去の時代に魂する』は政治史に缺くべからざるの要素なり。故に政治史家は灰冷枯淡の文字を列ねて抽象的叙述を以て能事とすべきに非ず、其の摹寫點染に於て一段文人的の技倆を要す。之れレオポルド・ランケ氏が政治史家として尤も優秀なる位地を占むる所以の一なり。人文史とは自から其ゆきかたを殊

にせる所あれども、政治史とて單に事實の記錄を以て滿足すべきに非ず。究りなき局面の變化を通じて動かざる發達の原理を認識するに非ざれば、國家生活の說明は遂に統一を期し難からむ。是の點に於ては兩者ほゞ其軌を同くす。

又研究の方法に關して、政治史と文明史とは劃然たる區別あり。卽ち政治史は主として既に起りたる事件を以て發足點とし、吾人に告ぐるに是の事件の進行發展する過程を以てす。而も是の如き事件の由來する所の幾多の勢力に就ては多く語る所あらず、故に其の方法は概ね綜合的なり。人文史は則ち然らず。先づ人類社會に活動せる勢力そのものを捉へて其の性質を研究し、そが中に常住なるものと流轉するものとを甄別し、其の情性及び動力より來るべき自然の結果としてこゝに外部の事件を解釋す。もとより時に叙述を事とする場合なきに非ざれども、大體に於て其の方法は解析的なり。

兩者の開已に是の方法の差別あり、材料の取捨に就て亦自から徑庭無き能はず。政治史は國家の生活に與れる事件の綜合的叙述なり。故に事苟も國家と重大の利害を有するものは、其の由來の必須と希倖とを問はず、其の性質の常住なると一時なるとに論なく、すべて網羅

把住せざるべからず。然れども文明史にありては、事件そのものは何等の價値を有せず、只、是の如き事件によりて發現せられたる勢力、思想に價値あるのみ。

政治史と文明史との差別是の如し。されば政治史家が人文史を以て空理となすことの過れるは、猶ほ人文史家が政治史を以て迂濶なりとするの正しからざるが如し。要するに二者其の目的を異にすることを解せざるの罪のみ。然れども政治史は獨り以て歷史的職能を完全に盡し得べきものに非ず。一般人文の一現象たる國家生活は、一般人文其物の究明に待つに非ずむば其の內面的因果の連鎖を解釋すること能はざるや素より論無し。之れ夙に近時政治史家の着眼したる所なり。試みに世界歷史若しくは各國歷史と稱するものを意に任せて繙き見よ。是等は其の根本の面目に於て全く政治史たるにも係はらず、其中には人種の特質、文藝の進步、若しくは時代の精神に關して條章を設けざるもの無し。然れども編述の體制に伴ふて自から主客幹枝の別あり、是の種の書に於て人文發達の理路を尋ねむこと甚だ難しとす。

蓋し政治史、若しくは人類社會の一面の活動を對象とする特殊の歷史の一般文明史に於けるは、猶ほ自然科學の純理哲學に於けるが如し。例せば物理學は物質運動の法則を、植物學

は植物の分類生理を、天文學は天體運行の系統を研究す。然れども是等の法則若しくは系統が、主觀的には吾人の認識と如何の關係を有し、客觀的には宇宙の全體に對して如何の地位を占得せるものなりやに就ては、是等の自然科學は何等の解釋をなし得ざるなり。是の如き根本的原理の說明は、一切科學の綜合的知識に本ける純理哲學の組織を待つて、始めて爲され得べきものなりとす。幾多の特殊歷史は、各自の範圍に於て興亡盛衰の聯絡を說き得べきも、人類の全活動に關しては遂に人文史の說明に依らざるを得ず。

或一派の史家は、今日尙ほ文明史の可能的なることを否定するものあり。其の理由とする所は自から二種あるが如し。一は個々の特殊なる歷史を離れて別に人文史なるもの有るべき理無し、所謂文明史は特殊の歷史に根本的說明を與ふと揚言するも、是れ哲學者の理想より打算し來りたる空理に過ぎずと。是れ哲學界に於て純理哲學の存在を疑ふものと一般、其說の淺薄誤謬、素より取るに足らざるなり。古代若しくは中世の形而上學に見たる所のものを以て、直ちに自然科學の結果に對する歸納的方法によりて成立せる現今の純理哲學に擬し、荒唐不稽を以て之を難ずるものは、全く哲學の歷史的發達に盲なるものなり。之と同じく、

ヘーゲル氏ヘルデル氏一輩の歷史哲學と、最近人文史家の攷究とを同一視するものは、寂寥河嶽を辨ぜざるものと謂はざるべからず。文明史の由來を尋ぬるに、素と純理哲學と均しく人智の統一的傾向に本けるものにして、中世紀の世界觀に於て夙に其の萠芽を發せり。中世紀は何人も知る如く、基督敎のドグマの維持を以て哲學の職能となし、一切自由の討究を容認せざりし時代なり。アリストテレス氏の形式論理が、所謂スコラ的學者の唯一の武器となり、聖典の敎義は其三段論法によりて凡ての方面の極端に至るまで推度發展せられたるの時代なり。是の如き時代にありては、歷史は其の形而上的、はた宗敎的系統に隨つて思索せられ、社會の發達、人類の運命は全く信條として制定せられたり。是の故に當時人文史の原則として見るべきアウグスチヌス氏の宿罪說を超越することは、中世學者の敢てし得ざりし所なり。文藝復興期に至りて歷史的人生觀は漸く其の面目を革め來りしが、純正人文史はヘルデル、シレーゲル諸氏に至るまでは其の完全なる體制を成す能はざりき。然れども是等も亦當時の純理哲學の思想につれて演繹的說明を旨とせるものなるを以て、むしろ彼等の哲學主義の叙述として見るべきもの、人文其物につきて忠實なる客觀的考索を遂げたるものに非ず。ヘー

ゲル氏以下の所謂理想派に屬する獨逸史家にありては、是の弊殊に甚し、是等は何れも中世及び近世獨逸の純理哲學と一般の攻擊を辭する能はざるものなり。

然れども今日の文明史は又昔日の文明史に非ざるなり。地質學、比較言語學、及び人種學、比較神話學、人類學等の最近の研究の上に確乎たる科學的基礎を有するに至れり。クレム、ペシェル、ベール、ヘルワルド、リッベルト諸氏の著述はたしかに此傾向を代表す。人文史を斥けて空理なりとするものは、現今學界の實勢に通ぜざるものなり。

文明史に對する第二の批難は、人文の概念の廣大に失し、隨つて其の發達に關して統一的原理を發見し得べからずと謂ふにあり。是れ尤も有力なる批難なり。抑も人文史とは何ぞや。想ふに何人もこの疑問に答ふるに、數學的精密と、論理的確實とを以てする能はざるべし。そは難者の言の如く、人文の範圍及び種類は無限の廣袤を有すればなり。然れども明白なる觀念を寫象し得ざるの事物は、必ずしも吾人が研究の對象となり得ざるにあらず。誰か預想無くして一の概念を作り得べきか。物理學とは何ぞやと問はば、物理學者は物質運動の法則を研究する學なりと答へむ。物質とは何ぞと問はば、エネルギーの所住なりと答へむ。然れ

ども更にエネルギー其物の何たるを問ひ、又更に其何たるの何たるを問はば、茫々として究まる所を知らじ。物理學の概念と雖も極めて不明瞭なるものなるを發見すべし。吾人、今、人文史を定義して、時間に於て繼續せる人類活動の原理を攷究する學なりと云はば、難者は其の漠然なるを咎めむ。然れども吾人は凡て彼れに向て世間何の科學が漠然たらざる概念を有するかを問はむ。

蓋し概念にして明瞭ならば、吾人豈是の如き概念を說明する彪然たる書冊を要せむや。一個の科學の概念は數行の文字を以て悉くす能はざるを以て、玆に時として之を解釋するに等身の書をも要するのみ。もし强いて吾人に向て文明史の定義を求むるものあらば、吾人卽ち是の一卷を以て之に答ふべきのみ。

文明史の性質は以上論じたる所によりて略ぼ明瞭ならむと信ず。之を要するに、文明史は人類活動の主腦を把へて縱に之れを歲時に繫け、橫に之を方處に照し、精神的及び物質的の全範圍に亘りて、社會發達の眞相を究明せむことを企つる統一的歷史なり。世人動もすれば政治史を以て歷史の本領となす。之れ外觀の壯大に眩惑して、內部の發動を顧みざるものの

み。吾人は現時の我邦に於て殊に是の弊を見る。中學以上の教程にも政治史ありて人文史なし。時は限り無く進み、史料は限りなく增殖し、今より數世紀の後に至らば、政治歷史の攷究は實に非常の時間を費すに非ざれば研究し得べからざるに至らむ。人文史は是の繁縟を貫くに統一を以てし、是の冗漫を律するに原理を以てす。庶幾くは政治史と相並びて其の缺陷を匡救するに足らむか。

（明治三十年九月）

編者云、

此篇もと『人文史と政治史との關係を論ず』と題して雜誌「太陽」に掲げ、後に著書『世界文明史』の序論とせし所のもの也。

基督教徒の妄想

現實と理想とを辨ぜず、實行の主義と理論の原理とを別たず、相對と絕對とを混同し、具象と抽象とを一視す。之れ基督教徒の言論の空理妄想に陷り易き所以なり。

然るに彼等自ら其の空理妄想なるを識らず、他の己（おのれ）に異るものを指して、狹隘となし、偏頗となす。殆ど痴人夢を談ずるに似たり。彼等の言ふ所、夫れ唯〻抽象なり、故に博大ならざるを得ず。夫れ唯〻絕對なり、故に平等ならざるを得ず。博大可なり、平等亦之を妨げず、而も現下の主義として半文の價値無きを奈何せむ。横井時雄氏は夙に基督教徒中の有識者を以て目せらる。頃日一文を六合雜誌に掲げ、歐化主義と日本主義とを罵る。其の言、茫昧糢稜、殆ど頑迷なる基督教徒の思想と擇ぶ所なし。あゝ吾人は横井氏の口より尙ほ且つかゝる言論を聞かざるべからざる乎。

日本主義は氏の所謂自尊主義に非ず。舊神道の復興にも非ず。國民的意識の公明なる發表

なり。苟も之に反對する一切の文物は國民的自覺心の覺醒によりて之を同化若しくは排除せむことを望む。豈殊に區々たる歐化主義佛耶教に對して起れるものならむや。其の之を打擊するは、其の消極的方便として已むを得ざるのみ。殊に吾人の日本主義を目するに宗門名目の爭を以てするが如き、私心に僻し、眼孔豆よりも小、豈日本主義を正解し得たるものと言ふべけむや。更に吾人の言說の由來を忖度し、

今の日本主義論者の如き、自重自尊、日本固有の精神なるものを推擧すること甚だ高きが如しと雖も、若しも試に其の心情の微を分析せば、豈に幾多の自卑心恐怖心の其間に存するものある無きを得むや。

と放言せるに至つては、抑も何の據る所ありて然るか。吾人は基督教徒が他の公明正大なる言論に對し、是の如き陋劣至極なる揣摩臆測を下して、恬然として顧慮する所なきの一事を以て、其の心情の卑劣、道義の腐敗を暴露して極めて明白なるものなりと思惟す。是の如き無禮卑劣の言が、市井小人に出でずして、却て同志社社長横井時雄氏の口に出でたるは、實に意外千萬と謂ふべきなり。

氏は日本と獨逸との誤謬ある比較をなしたる後、結論して曰く、

眞理は窮りなく、天地人の間にありて存す。是れ眞理の府源なり。日本を忘れよ、西洋を忘れよ、而して自然と人間とに就て其の眞理を求めよ。

之れ何事を意味するか。中世紀の僧侶、スコラ的基督教徒、若しくは同志社學生の外は、今日誰か是の如き漠然雲を攫むが如き言に傾聽せむや。日本を忘れ、世界を忘れたる國家的意識は果して何物なるべきか。而して『大日本の元氣は此間より生じ來らむ』と云ふ、妄想自ら樂しむも是に至りて極まれり。土地は踏むべきものならざるべからず。雲中の樓閣は宏壯なりと雖も、遂に一双の膝を容れ難し。是の如き無我的、はた神秘的空想より果して如何の實行主義の演繹せらるべきか。吾人の言說する所は主義なり、實行なり。架空の談理に非ざるなり。

蓋し實行主義に接觸するや、基督教は常に幾多の矛盾と衝突とを免れず。是を以て故らに言辭を曖昧にして思想の高遠を衒ひ、含糊吹噓、務めて現下の實務に關渉せざらむとす。其の心事寧ろ憫殺に堪ふべけむや。

（明治三十年九月）

基神兩教の合一論に就て

今日苟も新宗教を創唱せむとするものは、横に國民の宗教的意識を檢覈し、縱に國家の體制及び發達を精査し、個人的はた主觀的一面の外に共同的はた客觀的他面を考察せざるべからず。更に眞に安心立命の大勢を人心に與へ得むが爲には、人文進化の中心勢力たる吾人の道理性を滿足せざるべからず。

今や宗教の改革は免れ得べからず。想ふに幾千年の惰性は一朝の滅亡を容れざるべし。將に來るべきものは如何の形容を有すべきか。

嚴密に國家的たることに於て宗教は存在することを得べし。而れども吾人の道理性との衝突に至つては遂に避くべからず。其の根柢に於て人格的一神の存在を認識する宗教は遂に迷信たるを免れず。宗教家は是の論難を陳腐なりと誤魔かし去らむとすと雖も、之れ耳を掩ひて鈴を盜むもの、神の存在を客觀的に說明するが如きことは中世紀のスコラ學者の業ならむのみ。

眞僞に關せざる一時の方便としての宗教は、無知の愚民の爲に或は多少の利益あらむ。今の宗教家は、眞僞の問題を避けて方便の利害を說く。愚民に訓ふべくして識者に說くべからず。主觀的心狀によりて迷信に非ず、神祕に非ずと云ふは、幻覺によりて實在を探るが如し。

（明治三十年九月）

罪惡の自覺と國家の利福

基督教に入るの門は先づ悔ひ改めよの聲を聞くにありとは、基督教徒の眞正の覺悟なるべし。各個人の罪惡の自覺を以て第一義となすの個人的教義は、國家てふ共同生活の發達し來れる今日に於ても、尙ほ維持せらるべきものなりや。

吾人は三並良氏の溫和なる基督教信徒たるを聞けり。今や其ムンチンゲル氏の日本傳道論の批評を讀みて、最も極端なる非國家論者なるを見る。氏は日本の基督教に政治的臭味ある

を以て、基督教の入門なる罪悪の自覺を忽諸に附するものとなし、罪悪の自覺に乏しくして唯、愛國的熱情に富めるを不可なりとせり。吾人は、所謂罪悪の自覺なるものが、宗教的迷信を外にして愛國心を排去せしむるに足るの價値ある何物なるやを知らむことを望む。氏は又新島氏の基督教に政治的加味あるを恨みとし、日本にありては宗教は政治の下婢なりと慨嘆せり。さらば吾人は生命あり活動ある宗教の、何國に於てか政治の下婢たらざるやを知らむことを望む。下婢も單身にては唯我獨尊なるを妨げず、而れども主人の前にては下婢たらざるを得ず。國家の事業に關して其の婢僕たらざるもの何處にあるや。宗教は政治と關せずとは抽象的觀念のみ。人生の活動は渾一無二、肉と靈とを別ちたるは中世僧侶の迷妄のみ。今の基督教徒にして猶ほ且つ是の謬見を持す、寧ろ怪しむべからずや。

是れ三並氏の爲に殊に言ふに非ざるなり。

（明治三十年九月）

主義と人物

多識して博識を衒ふ、是れ覺士の世に處するの道ならむや。要は一以て之を貫くにあるのみ。

苟も主義を以て立つ。道理の存するところ、之れ吾が當に往くべき所なり。狹隘と云ひ、寛大と云ふ、吾に於て爲す無きなり。況や聞茸は寛大と云ふべからず、夫の散漫異同と辨ぜざるもの、能く何事をか爲し得むや。人は人物を見て主義を問ふ。而して主義を以て人物を問ふべきを知らず。迂なる哉。

日本主義の唱道者を捉へて其の資格の有無を問ふ者は、何等の怯懦漢ぞや。人を以て言を取る已に誤れり。言を以て人を計るを知らず、更に愚ならずや。

小人、人の美を成さず

釋迦基督にして初めて日本主義の如きものを唱導し得べしとなす者は、何ぞ釋迦基督に非ざる人にして猶ほ且つ之を唱道したるを嘆美せざるや。由來小人他の美を爲すを好まず。深く憫れむべきなり。

（全集第四卷第二期參照。明治三十年九月）

社會と新聞紙

近時殘忍酷薄なる出來事の社會に頻繁なる一の原因は、新聞紙が、かゝる事を、事もなげに文飾して記載せるが爲なりと云ふ者あり。されど是の問題は、かく簡單に斷じ去るべきものに非ず。

敗倫極惡の出來事が果して比較的に增加し來りたるやは、其の人口及び內外事情の複雜なる統計によらざれば知るべからず。新聞紙上の記事のみにては不十分なり。而して、一身の生死榮枯に關することは、果して一二新聞紙の記事によりて挑發せられ得べきものなるか。新聞紙としてかゝる事を報道するは宜しきことにはなけれども、此を以て直ちに彼の因緣とするは早計ならずや。

吾人の見る所によれば、若し新聞紙にして社會の不道德を奬勵するの勢力を有し得べしとせば、そは殺傷等の記事よりは、寧ろ所謂第三面の艶種と稱するものに存せむ。是の艶種なるものは、今日中等以下の諸新聞には欠くべからざる要素として考へられ、其の文辭の輕妙洒落ならむことを競へり。是等の記事は、賣色遊蕩等の事を社會の通例の事として毫も毀貶の意を寓せぬのみか、通人才子の樂事として面白ろをかしく書きなす風あるを以て、世の輕薄の遊子を邪道に導くこと少なからざるべし。殺人創傷等の後には嚴肅なる刑法上の制裁あることは何人も知り居るを以て、新聞の記事にて之を犯すが如き事は極めて希なるべし。されど是の賣色遊蕩の事は是の如き事なきを以て、新聞の艶種によりて社會の制裁の案外に薄弱なるを知れるものは、或は知らず〳〵是の濁流に感染することあるべし。之れ尤も有り得べき事ならずや。是を以て吾人は世の新聞記者が殺傷の記事と共に、かの所謂艶種なるものに對して適當の調攝を施さむことを希望す。新聞は商賣なり、然れども其の社會道德と密接の關係ある商賣なることも覺悟せざるべからず。

（明治三十年九月。風塵錄）

士の德操

吾人、宋史を讀む毎に、深く歐陽修の人と爲りを慕ふ。常に以爲へらく、士の進退當に是の如くなるべしと。吁、吾人、今にして本邦士風の衰頽を嘆ずるもの、抑〻亦遲かるべき乎。

知識の高遠彼れが如く、學術の精微彼れが如きもの、世間何ぞ限らむ。獨り其の忠孝の器質を挾みて終始其の德に反かざるに至つては、歐陽文忠公は眞に一代の國士なる哉。上下四十年事多く志と違ひ、道遂に世に行はれず、具さに世路の崎嶇を歷、迍邅困躓、幾度びか流竄の禍ひに罹るも、剛正の節、果敢の氣、死に至るまで衰へず、堅く公議の是非を執り、凜乎として動かず、勢利前に誘ひ斧鉞後に迫るも、從容として大義に就けり。箕山の側、潁水の湄、英魂靈氣永く千秋の龜鑑となる、亦宜なる哉。王介甫は公の政敵、曾て『一國に在りては則ち一國を亂し、天下に在りては則ち天下を亂す』と罵りたるもの、而も公の死を弔して嘆じて曰く、『公や再び見るべからず、我れ誰と與にか歸せむ』と。吁、一世の國士、人を化すち亦是の如きものある乎。

吁、吾人今にして本邦士風の衰頽を歎ずるも、抑〻亦遲かるべき乎。今の人、成敗を重んじて節を輕んず、其立つや則ち名利、其行ふや則ち逢迎、所謂人物の高下は其の志す所の名利の大小にあり。夫の德を二三にし、主義を賣り、良心を賣り、朋友故舊を賣りて、而して一身の虛榮を買ふもの、今の所謂士人の常に非ずや。白日堂々の儀容を持して天下に巷議するもの、安んぞ知らむ、暮夜、朱門を叩いて媚悅哀を乞ひ、十年清士を以て世に鬻ぎ、せられたるもの、誰か一朝にして權勢の奴隸となるを思はむや。憫れむべきものは朴直なる輿衆なるかな。彼等の瞻依戴拜する所の人は、只〻彼等の肩に憑りて榮達の地に達するを目的とす、其手一度び是の地に觸るれば、土足直ちに彼等の肩を蹴倒し、踴躍して是れに就き、顧みて手を額にして輿衆の呆然たるを笑はむ。今の士人は、才を負ひて德を稱せず、却て成敗を以て是非を辯ぜむと欲す。是れを以て千計萬策、要は利慾の外に出でず。昔者歐公、功名成就せりと雖も居らずして去る。國家を以て志をなすもの、這般の氣宇、私情の外に劃然たるもの無かるべからざる也。

吁、吾人は尙ほ己を欺きたる者の言に聽かざるべからざるか。彼等の筆は名利の筆なり、

主義によりて動かざる也。既に欺かれたる吾人は、更に其の詐欺を再びせむと欲するものを惡むべからざるか。そも〳〵社會の制裁なるものは、斯かる場合に用ふべきものに非ざるか。

（明治三十年十一月）

人道何處に在る

人道何處にかある、膠州灣は二人の宣教師の殺されたるが爲に暴力を以て占領せられたるに非ずや。

東洋の平和は二人の宣教師よりも輕しとするか。教に仆れたるものは天國の恢復に向つて其血を濺ぎたることを感謝せざるべからず。獨逸政府は是れに對して干戈を動かさむとす。是れ果して『爾右の頰を打たれたらば宜しく左の頰を向けよ』との教を擴ちむが爲の行爲なる乎。

今や宗教は政略の奴隷なり、方便なり、昔の所謂切支丹が自ら施したる所のもの、今政府に於て是れを爲す。

是の如き國家の保護の下に傳教せざるべからざる基督教徒は憫れむべきかな。心あるものは恥ぢよ。清國皇帝の勅額を得て會堂に掲げむが爲には、其の携へたる聖書は血に塗れざるべからず。基督教徒は事是に至りて猶ほ人道の所在を吾人に告げ得べき乎。

（明治三十年十二月）

學問死活辨

〔初め「死學者」と題す〕

學ぶ所を行ひて以て宜しきを得れば、學初めて其の完全を稱すべく。行ふ所、學に從つて戻らざれば、行ひ初めて其の適切を誇るべし。知行合一は畢竟學者究極の標的たり。

天下の學者何ぞ限らむや、而も其行ひに於て茫々然として見る所少きは何ぞ。所詮學者の信ずる所堅からざればなり。知る所、以て行ふ、一見甚だ尋常容易の事なるが如し、然れども

是れ學者としての最大難事なり。行爲は常に責任と伴ふ、一個人として社會國家に其の人格の地歩を占得し、其の生存の意義を明にする所以なればなり。

其の所信を公白し、嶄々然として依りて以て其の一念を貫徹す。是れ事に處して首鼠兩端を持するものの爲し能はざる所なり、機に臨みて狐疑逡巡するものの爲し能はざる所なり、私己の利害を秤量し權勢に依傍するものの爲し能はざる所なり。抑〻又其の然る所以の理に徹底し、中心より其の眞と義とを會得したるものに非ざれば爲し能はざる所なり。苟も是れを爲すには一世批議の衝に當り、毅然として自ら立つの覺悟あらむを要す。さもあらばあれ、眞正の學者は事遂に是に出でざるべからず。

知識、是れ畢竟何爲るものぞや。彼の前人の遺型に蹈襲し、其の遺說を踏襲するもの、世は是れを學者と言ふ。然れども是の如き學者はた是れ何爲るものぞ。彼の一篇を採り、此の一書を剪り、補綴覆釘以て眞理是に了すと稱するもの、世は是れを智者と云ふ。然れども是の如き智者はた何爲るものぞ。夫の己れを虛にして偏へに他の意說を容るゝもの、むしろ活書筐に非ずや。古聖哲の言、三尺の童子尙ほ或は是れを辯ずべし。然れども誰か三尺の童子

を古聖哲の如く敬するものあらむ。何ぞや、他なし、彼は其の然り、且つ然らざるべからざる所以の理に徹底して而して其言を作したるもの、此れは唯〻茫然として他の口吻を踏襲するに外ならざればなり。今の人、古今東西の知識を萃め、博學多聞を以て世に誇る。然れども吾人は書典と字彙とを有す、是の如き學者の要を見ざるなり。學者の貴むべきは、中心自己の信ずる所を以て、小にしては是れを身に行ひ、大にしては是れを國に施し、一世の師表となりて夫の汶々たるものを救濟するにあり。あはれ今の學者果して是の覺悟ありや。

是れを心に解せずして是れを口にするものは、是れ形骸ありて而して生命なきなり。解する所ありて而して信ずる所無きは、是れ生命ありて魂魄無きなり。今の學者、生命あるものは甚だ多からず、況や魂魄あるものに於てをや。若し知行合一は魂魄あるものに於て初めて望み得べきを知らば、吾人又焉んぞ今日學者の茫々然として爲す所無きを怪しまむや。

古の學者は其の觀察の廣、思索の深に於ては、素より今の學者に及ばず。然れども吾人は知行合一の一點に於ては今の學者遂に遙に古の學者に及ばざるを慨かずむばあらざるなり。孔丘氏は徒らに倫理の學說を說きしものに非ざりき、耶蘇、釋迦は徒らに宗教の敎理を論ず

しものに非ざりき。希臘印度の古哲學者は、徒らに宇宙人生の抽象思索に耽りたるものに非ざりき。彼等は己等が說きし安立、道義の原理を以て、啻り其の知識慾の滿足に供へたるのみに止まらず、直ちに取りて以て實際人生の主義となしたりき。彼等の主義は實に其の生活によりて體現せられ、彼等の生活は其の主義によりて發表せられ、二者の間に形影相離るべからざるの關係ありて存しき。素より彼等の中には、其の天分の、自から其の主義を行爲の上に現はすことを容るさざるものありき。然れども尙ほ人生實際の疑問に對し、一定の意見の以て一世の師表となるべきものを懷抱せりき。是れはたアレキサンドロスが帝王の威を屈して草莽赤裸の一犬儒を訪ひし所以に非ずや。時經ち世遷りて、人智漸く開くるに隨ひ、學問と實際と漸く相隔離し、遂に漸く相反對するの勢ひを示し來れり。一藝一學の士、事に其の專攻の部門に從ふもの、精一深く多とすべきものありと雖も、而も實際人生と毫も爲すなきもの多きに至りては、寧ろ學問の弊に非ずとせむや。

醫學者が病理學を研究し、微を顯はし幽を闡き、錙分銖析、造化の妙工を看破せむと擬するは何が爲ぞ。畢竟其の研究の結果を疾病治療の上に應用すること能はずむば、其の價値の

大半は玆に失了せられたりと謂ふべきに非ざる乎。所謂知識慾の滿足は素より人生の幸福に缺くべからず、而も知識慾の滿足以外、毫も人生の實務に益する能はずと謂はば、吾人遂に學者なるものの實世界に用少きを悲しまずむばあらず。素より今の世は分業の時なり。人間知識の範圍を以て言ふも、今は遂に古の比に非ず。是の全般の所知を了して之を實際に施さむと要す、吾人素より其の希望の易からざるを認む。知行合一を以て今の學者に望む、素より古の學者に望むが如くなる能はずと雖も、今の時に於て、是の方向に對ひて一大振攝と一大奬勵とを呼號せむことの、必ずしも不急の事に非ざるを信ずる也。

屬者、說を爲すものあり、曰く、學者は須らく俗流の表に超然たらざるべからず、學者の品位價値是に存す。夫の學者にして社會國家の實務に交渉するものは、學者の品位と價値とを捨てゝ、好んで名利の濁流に投ずる者に非ずや、是れ學問の獨立と神聖とを滂瀆するものに非ずや。學者の務めは專念一向、其の志す所の學に從事して盡日尙ほ足らざるにあり、何の遑ありてか俗流に棹し、俗務に關るを得べきや。夫の、身、大學敎授の職にありて、傍ら行政立法の官吏となり、或は社會實際の運動に加入するものは、學者の天職を知らざるもの

み。學問の獨立如何ぞ是の如くにして支持するを得べきと。

吾人はかゝる俗說の今日に行はるゝを悲しまずむばあらざる也。學問の獨立と云ひ、學者の品位と云ふ、誰か是れを希はざらむや。然れども是の如き獨立と品位とを保たむがためには、學者は俗流の表に超然たらざるべからざるか。大學教授は政府の官吏となるべからざるか。將た又一切の學者は社會實際の運動に加入すべからざるか。假りに是の說を爲すものの言によりて一個の學者を想像せよ、畢竟是れ死學者に非ずや。

學びて而して用ふる所以を知らず、知りて而して行ふ所以を覺らず、學者の品位、學問の獨立は是の如くにして初めて保ち得べきものなるか。然らば則ち品位と獨立とは獨り死學者に於て望み得べきものなるか。嗚呼、天下の學者を誤るものは必ずや是の種の俗說ならむかな。畢竟、品位獨立とは何ぞ。其の所信を以て社會を率ゐ、其の所學を以て蒙昧を導くを外にして、何處に其の品位と獨立とありや。實際世界と隔離し、獨善自尊の生活を營まば、其の學、他の累す所とならざるべし。然れども其の存在の意義は何處にある。若し强ひて是れを獨立と言はば、是れ寂滅的獨立なり。世界は是の如き學者の生死によりて毫も其の利害を

感ぜざるなり。一物生存の價値は、其の所屬團體に貢獻する利益の多少に依りて量るべし。吾人は現實世界に關與せざる學者を死學者と呼ぶ、抑〻謬れるか。

且つ夫れ今の人の大々的誤解は實に俗の一字にあり。彼等は學者の俗化を難ず、所謂俗化とは何の意ぞ。若し大學教授の官吏となれるを俗化と呼び、學者の社會運動に加はるを俗化と稱するを得べくむば、吾人は實に一切學者の俗化せざるを憂へむなり。俗の一字、是れを實際的の義に解し、而して學者の俗化を忌避するは、畢竟學者の天職に對する我が國人の根本的誤解に基く。學者と學問を尊崇するは、吾人素より異議なし。然れども試みに一度び是の如き尊崇を慣する所以の理に想到せよ、社會に寸功なく、國家に寸益無きもの、其の物類の如何に關せず、何處に『尊崇』すべき理由かある。夫の一面に學問學者を重んじて、而して一面に實利實益の業務を卑しみ、其の事を俗事と稱し、其の人を俗人と呼ぶ、是の如きは其の眼識の幼稚、寧ろ憫笑すべきなり。學理に對して實際を俗化と呼び、學者に對して官吏を俗人と呼ぶ、是れ名目の左右、吾人何ぞ是れを爭はむや。唯〻是の如き俗化と俗人とを輕蔑するの傾向に至つては、社會國家の爲に斷々乎として其の虛妄を排斥せずむばあらざるなり。

嗚呼、久しい哉學者の本分の誤解せられたるや。古の人は其の學を以て其の行ひを定めたり。人生の實務を離れたる空理は、其の務めて忌避したる所なりき。彼等は一切知識の統一と効果とは、人生問題の解釋に存することを確認したりき。吾人を以て是れを見れば、是れ眞に學者の本分を會得したる者なり。今の學者は徒らに其の枝葉に走りて其の根幹に歸ることを遺却し、人生に近からざるを以て高しとなし、遂に世人をして學問是れ閑事業なりとの妄見を抱かしむ。嗚呼、是れ誰れの衍ぞや。今や方に學者各〻自ら其の天職を自覺し、其の來を究むるもの、尚ほ其の本に歸るべき時に非ずや。實業實務に其の學を應用するを俗化として卑しむことの毫も謂はれなきを認識し、濶大なる胸襟を披拂して共に俱に人生問題の解釋に協力すべき時に非ずや。吾人は所謂俗化を以て今日學者の品位及び價値を保たむが爲の最大急務なるを絶叫して敢て憚らざる也。

或は謂はむ、學者にして社會の實務に關渉せむか、名利の爲に其說を枉げ、曲學世に阿るの弊あるを如何と。今の學者が政府の官吏となるを難ずるもの、概ね是の事を言ふ。何ぞ其說の笑ふべきや。萬一是の如き事あらば、是れ是の如き學者の罪のみ。噎死するものは食を

恨むべからず。時に是の弊あるが爲に、學者は實務に關すべからずとするの理、何處にかある。學者の知識は學理上の根據に立つ、其の確信と觀察とは必ずや常人に超越するものあらむ。更に實際の一面に習熟して其の學を適用せば、事業の擧がる亦常人に倍するものあらむ。畢竟、學者は天下の利器、不幸にして權勢の爲に其の所信を二三にするものあらば、大に悲しむべきなり。然れども利器は是れを用ひて其効を見ること無くむば、其の利器たる所以の實、遂に何處にかある。敵人前にあり、吾れ尚ほ其害を恐れて利刃を振ふ能はずむば、匣中の寶は吾に於て瓦礫と何ぞ擇ばむ。吾人は今の濟々たる學者をして、碌々瓦礫に終らしむることを欲せざる也。

（明治三十年十二月）

國樂制定の必要

社會風教の維持に關して音樂の勢力の大なることは爭ふべからざる也。而して我邦を顧みれば、一の國民的音樂と稱すべきもの無し。是れ豈我が社會の一大缺點にあらずや。

從來及び現在の音樂一にして足らず、其の西洋より輸入せられたるものは、一個の美術として見むには、誰か其の優秀なる價値を拒むべき。而も未だ國民生活と圓融抱和するに及ばず、卽ち國民的音樂としては毫も爲す無き也。古來の傳襲に係るものは或は鄙俚に傾き、或は上品に偏し、共に一般社會に向つて其の推奬を敢てし難き事情あるを免れず。況や今日多少高尙なる音樂的趣味を解する者の滿足を要むるに足らざるをや。是れはた國樂として用無き也。一の雅樂協會ありて國樂制定の目的の爲に盡力するは大いに多とすべし。然れども所謂雅樂を以て是の如き國樂となさむとするに至つては、遂に固陋の譏を免れざるべし。雅樂は須らく保存すべし、されど今日及び將來の國民的嗜好に適すべきものに非ざる也。

今日、音樂學校に於て敎ふる所の音樂は、餘りに專門的なり、餘りに直譯的なり、餘りに西洋的なり、卽ち餘りに非國民的なり。吾人は國立の音樂學校に於て非國民的音樂を事とするを當然とすべき理由を見る能はず。

抑〻音樂の國民的たるに於て缺くべからざる二個の條件あり。國語と調和すること其一なり。其の國民的生活狀態と抱合すること其二なり。所謂趣好なるもの、萬邦を通じて一なるものに非ず、其の社會生活の如何によりて影響せらるべきもの也。美學上の原理に至つては東西古今に二途あるを許さず。然れども其の適應の事情に至つては、須らく各國の國民的生活によりて規定せらるべし。夫の國語の性質を顧みず、猥りに西洋音樂家の遺蹤を踏襲して過たずとするもの、其の生活狀態の如何を顧みずして偏へに彼邦の樂を喜ぶもの、爭でか國民的音樂を確立することを得べき。彼等は動もすれば趣味の敎育を呼ぶ、是れ大いに可。然れども彼等が他に向つて趣味の敎育を强ふるに先ちて、自ら國民生活によりて敎育せられなば更に大いに可ならむ乎。

遮莫、音樂は家庭の幸福を增進し、社會の秩序を維持する上に於て缺くべからざる也。今

の教育家音樂家は大いに是の點に注意せざるべからず。國費を以て非國民的音樂學校を建設せる文部省は、殊に一番の猛省を要す。

（明治三十一年一月）

死學者

身死して其の學活くるもの、素より欽すべし。學、其人と共に傳はらざるもの亦恕すべきものあり。獨り當世の米を食みて甘んじて死學者たるものに至つては、深く悲しむべき也。折衷を以て高しとし、曖昧を以て廣しとするの風ありてより、天下の學生、生きながら死するもの多し。希くは彼等に與ふるに五十年の糧を以てせよ、而して萬卷の死書と共に深山不毛の地に坑にせよ、是れ一世の思想を刷新する所以也。

（明治三十一年一月）

自ら傳へよ

人の己れを傳へざらむを恐るゝものは自ら傳へよ。少くとも是れによりて自己の安慰を得べくむば、彼れにとりて素より有用の事なるべし。然れども自己の口より傳ふるに非ざれば他に之を傳ふるの人無きが如き事業は、社會の爲には寧ろ初めより傳へざるに如かず。世界は舊腐の事物を破却するに非ざれば年を追ふて老衰に赴かむ。

（明治三十一年一月）

大和魂と武士道

日本魂は寧ろ三河魂と稱して穩なるが如しと時事新報記者は言ふ。德川の初代より扶植せられて三百年間の封建の下に練磨せられたる三河武士の精神は是れ武士道のみ、大和魂に非